



酒井日香

Vampire

孤独な予言者

鑑定料は超高額。
もし予言を外したら代償を払うという。
闇の占い師。

絶対に外さないと言われたら、
引き返さず人間は
何を言ってもいい。
本巻と続巻を合わせてすべてを見逃す
男占い師が今夜もアートを始める。

KADOKAWA
定価：本体1100円＋税

「悲しきかなや道俗の 良時吉日選ばしめ
天神地祇を崇めつつ ト占祭祀務めとす」

—親鸞 正像末浄土和讃 より—

占星術、それは天上の悪徳（VICE）。
星の巡りの名の下にさまよう明日を占えば、
垣間見えるは果てしなき人の欲望——。

1、

吹き降ろすビル風が、道行く女性たちのマフラーやストールを剥ぎ取ろうとする。暗いネオンに輝く大都会東京の、新宿の夜。19時を回る頃になると、新宿駅西口、小田急百貨店の並びは、さながら占い通りだ。高台子と角行灯がいくつも並び、仕事帰りの若い女性たちが占い鑑定を受けていく。

今日はクリスマス間近の金曜日で、一般企業ではボーナス支給の後である。そのせいかOL風の女性が多い。ちらほらと列を成す人気の占い師の前に並んで、順番を待っていた女性二人が、退屈しのぎにおしゃべりをしていた。

「ねえねえ、あたし昨日、妙なサイト見つけちゃった」

強い風に取りられそうなストールを、肩で押さえながら、若い女性が、一緒に並んでいる友達に話し掛ける。

「妙なサイト？」

話し掛けられた女性は、連れ合いの女性の話に首を向けた。

「うん。妙な都市伝説とか、ウソっぽい噂とかさ。そーゆうのを集めたおバカサイトだよ。昨日ヒマだから見てたの。そしたらね……」

「んー……？」

「そしたら、この東京のどこかに、自分の占いが外れたら、それ相応の代償を払うって誓約書を取り交わす占い師が、いるんだって」

「えー？ マジ??」

「さあ……、おバカサイトネタだし。でもたぶん、占いを聞くほうにはそういう需要があるかもね。だってさ、みんな、ハッキリした未来こそ聞きたいわけでしょ？相性とか、占い理論みたいなことだけ言ってごまかして、肝心の未来を教えてくれない占い師ってムカツクじゃん。でも、そのウワサの占い師さんは、未来のことしか言わないんだってさ。しかも外したら、代償を払ってくれるんだよ。そこまでしてくれる占い師だったら、こっちも信じてみようかなあって、思うだろうね」

聞いていたほうの女性が、話に興味をそそられたように顔を上げた。

「確かにね。そんな占い師の言う未来だったら、あたしも信じるかも。でもさあ、逆に無茶なことをその人に尋ねてさあ、お金とか、むしり取ろうとするお客が出てきたりしてね」

「きゃはは！ それじゃあ占いつつよりか、賭けだよ～！」

そうやって笑い合う二人の女性の前を、フチなし眼鏡をかけた、背の高い、トレンチコートの男が通りすぎてゆく。男はすれ違いざま、その女性ふたりをちらりと見た。

「そうだね。確かに、自分の予言が外れたら、代償を払うなんて約束すると、占いというよりは賭けだよ。ギャンブルっていうか。あたしだったらそんな無茶、安いお金じゃあやらないな。こっちも代償を払って、命がけで占ってやるから、お前も大金払えよって、そういうね。あたしなら」

「そうねえ。でも実は、あちこちにそういう書き込みがあるんだよ。だから、もしかしたら、本当にそういう占い師さんがいるのかも知れないなって。もしいたらあたし、ちょっと観てもらいたいよ～。いつ結婚できるのか不安で不安で……」

「あー、あたしも観てもらいたーい！ でもさあ、いくらぐらいするのかしらね、鑑定料……。1万とか、2万とか？」

「200万だ」

不意に、低い男の声がした。二人の女性が顔を見合わせて、通りの往来に眼をやると、今しがた通り過ぎようとしていた、トレンチコートの眼鏡男が、背中を丸めて睨むようにこちらを見ている。

「そんなに観て欲しけりゃ、観てやらなくもねえ。ただし、相談料は最低200万からだ。上はそれこそ、青天井……。姉ちゃんたちの薄給じゃあ、話にならねえな」

男は居酒屋から出てきたばかりといった感じで、爪楊枝をもぐもぐさせていた。肩越しに睨むようなその目つきは、どこことなく秘密めいた翳りを帯びている。

「なにに～……？ この人、酔っ払い……？」

「お、おっかなくない……？」

「ど、どーしよ……。あたしら、絡まれてる？」

女性二人が怯えて、身を寄せ合うと男は、ペッと爪楊枝を吐き出して、再び歩き出した。

占い産業は、今や1兆円規模だと言われている。占いを業務の主体とする企業は、日本国内に千社以上あるし、発行されている女性向け雑誌のおよそ9割が、紙面に何らかの占い記事を載せている。異常な数の多さだ。

占い師という職業の人間は、それになりたいと考えている予備軍や、趣味人口まで含めると、全国で50万人以上はいるのではないかとされているのだが、なぜ占いを商売にしようとか、趣味にしようなどと考える人間が、こんなに多いのだろう。

それはやはり、占いには“何も要らない”ということが一つである。そしてもう一つは、占いの論理というのは、実はたやすく習得が可能な、稚拙なロジックである、ということの2つの要素が大きい。

なにせ、証拠も根拠もなにもなくていい。お客が信じたならそれでいいのである。万が一外れたとしてもそこはそれ、解釈の問題、受け取り方の問題ということで、いかようにも言い逃れが

できる。

そのうえ占い師は、資格も学歴も、資本金が無くても始められるし、口さえ動けば誰だってやれるビジネスだ。新規参入に対してここまで懐の広い商売というの、珍しい。

それで、食い詰めたような連中が安直に、日銭欲しさでこの商売に飛びついたり、趣味の延長で占い師になる者などが多く、性質の悪い輩がはびこっていて、それ故に、占い師は人から馬鹿にされ、嫌われ、蔑まれる職業なのだった。

(ケッ、乞食どもめ。今夜もたかが数千円ぽっち欲しさで、人心をたばかっていやがる……)

さきほど女性二人のおしゃべりに足を止めた、トレンチコートに眼鏡の男。彼は、そんなことを考えながら、通りに並ぶ角行灯の行列を眺めていた。

男の年齢は30代半ばくらいだろうか。色白の肌に高い頬骨。筋の通った高めの鼻に、冷たく光るフチなし眼鏡を乗せている。その向こうには奥二重の切れ長な双眸。粗野な印象の濃くて粗い眉。薄い唇。眼鏡などしないほうが女好きのする顔なのに、人目を避けるようなその眼鏡だけが、長く垂らされた前髪に覆われていて、かえって野暮だった。

服装はビジネスマン風だが、よく見るとすべて高級ブランドだ。キラキラ光る金色のロレックスが左手に輝いて、一見しただけで、かなり羽振りの良い男なのがわかる。

女性客を前に、一生懸命話していた中年の女性占い師は、さっきからこの男がずっと視界から消えないので、手元の謎めいたメモを見ながらも、ちらちらと男の動向を窺っていた。

「あなたみたいに、四柱全体に丙、丁が多くて、紅艶とか、偏財星とかが命式の中にある人は、不倫関係や、実らない恋につい翻弄されてしまうのよ。結婚したいのなら、まずはそこから変えないと……。あら、でもあなた、今年から空亡だわ……。空亡が終わらないと、結婚は無理じゃあないかしら」

「く、くうぼう……？なんです、それ……」

地味で暗そうな女性客が、おばさん占い師の眼を必死に見つめる。

「空亡っていうのはね、支に対して干である星が、足りない時期を言うのよ。算命学では、天中殺と言うこともあるわ」

「て、天中殺！！」

女のお客は“天中殺”という言葉に異常に反応して、身を乗り出した。占いのことは良くわからなくても、それが不吉なものだということはなんとなく知っているのだ。

「空亡のときは悪い男に騙されやすいのよ。それが抜けるまでは、何もしないほうがいいわ。行動を起こすと、余計に悲惨な結果になってしまう……」

「そ、それって、いつまで続くの？」

恐る恐るわが身を尋ねる女に、おばさん占い師は断言した。

「再来年までね。あと丸2年間は空亡の影響が続くわ」

「あとに、2年も?! そんなに長い間?! それまでは、何をやってもダメなの? け、結婚も？」

女は顔面蒼白で、余計に暗い顔になった。2年といえば短い期間ではない。結婚を焦る妙齢の女性としては、深刻な問題である。

「大丈夫よ。運気を変えればいいの。あなたは庚を持っているし、いい位置にあるから、もっと

派手な服装をなさい。そして、赤やピンクの明るい色で服を選んで、メイクもそうしてみて。そうすると、空亡のマイナスを跳ね除けることができるわ。良いご縁にもめぐり会えるはずよ」

占い師が妙な開運法を女に提案したときだ。さっきから占いの様子をじっと見ていた男が、いきなり口を挟んできた。

「ケッ、バカバカしい。おためごかしを抜かしてんじゃねえや」

男の声が飛んできた瞬間、中年女性占い師の肩が、ぴくりと動く。こうなったらもう観念するだけだ。顔を上げて男を見据える占い師を見下ろしながら、男がゆらゆらと、高台子に近づいてきた。動作がどことなくドリフの酔っ払いコントみたいである。

「くっだらねえ。赤やピンクを身につけろだあ……？ そんなマジナイで人生が変わるんなら、誰も苦労しねえんだよ。もっと具体的にいつどうなるとか、どこで何が起こるとか、断言してみろってんだバーロー。そのうえ、運氣最悪が2年間だと？ そんだけ期間がありゃあ、そりゃあ何かしら起こるだろうが。人間、生活してるわけだからな。どうとでも解釈できるズルイトークをしやがって」

「ちょ、ちょっと！ 何なんですかあなた！」

中年女性占い師は、やや腰を浮かした。街占していると、この手の酔っ払いには時々出会うことがある。わずらわしいことになる前に身を乗り出し、手で男を追い払う仕草をしたのだが、男はそんなことにはお構いなしに、女性客の隣の空いている椅子へ勝手に腰掛けた。男の全身から、酒の臭いがぶんぶん漂ってくる。

「あんた、さっきから聞いてりゃあ、ケッコンケッコンって言うけどなあ、要するに働きたくねえだけだろ？ 私の人生まだまだイケる、私は本当はこんなモンじゃないと思い込んで、自分の等身大の惨めさを素直に認められないのが、今どきの姉ちゃんだ。占いに、あんたの幸せのありかが出てるって？ ハハハ！ 出るわけねえさ。占いなんてウソだらけ。何も教えてはくれない。教えてくれるのは世間だけだ。世間の冷たい、人の欲望と本音だけが、本当のことを教えてくれる……。ハハハ……！」

男はいいながら、勝手に腰掛けた椅子で足を組んだ。

「だから、何なんですかあなた。勝手にそんなところに座られたら、営業妨害なんですか……」

占い師が、方位盤や筮竹を寄せ集めながら、男に言うのだったが、男はますます我知らずといった感じだ。隣の暗そうな女性客に、馴れ馴れしく耳打ちした。

「ホラ、聞いた？ 今のこの、占い師さんの台詞……。 “営業妨害です” って言っただろ？ つまりだなあ、占い師なんてのは、いかにも根拠があるように、学理らしきモンを振りかざすけど、本音はカネさえむしり取れりゃあ何だって言うんだよ。算命学だろうが、占星術だろうが、占いなんて所詮は、乞食がカネをむしり取る方便さ。そんなもん、信じるほうがアホだ」

男はそうやって、鑑定用の小さな机に突っ伏した。酔いが回って、身を起こしているのがしんどい様子である。

「そうかなあ……。そう言い切ることもできないんじゃ……」

一方的に男に割り込まれ、ずっと怪訝な顔をしていた女性客がようやく口を開いて、男の言葉に首をかしげながら小声で反論する。中年女性占い師も、ネックレスが食い込んだ太い首を動かして、女性客に同意するように頷いた。

「そうよ。占いはねえ、未来のことが当たる、当たらないは問題じゃないの。自分自身を深く知るための手段なのよ。昔から言うじゃない。“敵を知り、己を知れば百戦危うからず” って」
「そうです。自分を知るための手段なんです。占いというのは。客観的に自分を見直せるツールだと思います、私……」

それを聞いた男は、馬鹿にしたような眼をして苦笑した。

「ヘッ、自分探しねえ。ますます薄ら寒みい……。お前らの言う自分探しとやらは、結局はただの欲得じゃねえか。ケツコンしたい、愛されたい、いい仕事がしたい、才能を開花させたい、もっとカネが欲しい、死にたくない、栄えたい……。どうしたらいいですかって、欲、欲、欲！
みーんな欲だ、醜い欲。この世に人の欲望がある限り、この商売は無くならない、永遠に……。ハハハ！！」

男はそう言うと、さも愉快といった感じで、高笑いしながら立ち上がった。そして、コートのポケットからくしゃくしゃに丸まった紙の束を取り出して、高台子の上にバサッと放り投げると、酔ってふらつく足取りで、蝶々のように楽しげに両手を広げ、往来の人ごみに踊りだした。
「ハハハ！ そうさっ！ この俺が打ち砕いてやる。この世の欺瞞という欺瞞をな……。神秘を語り、神秘を期待する馬鹿どもの妄想をっ！ハーッハッハ……。！！」

「な、なんなの？！ あの男は！ 頭がおかしいんだわ、きっと……」

中年占い師と、女のお客は、狂ったように去ってゆく男の後姿を、胸を押さえながら見つめていた。ふと、視線を落とす占い師の手元に、丸まった紙の束が見えた。札——、である。無造作に数えてみると、千円札かと思ったそれは、すべて1万円札で、35枚もあった。

「あ……。！ こ、こんなに！！」

中年女性占い師と、女性客は、顔を見合わせてしまった。

今、立ち去った男の名は、郷原悟（ごうはらさとる）——。人は彼を、天才占星術師と呼ぶ。しかし、彼の占いの実態を知るものは少ない。郷原が生きているのは、奈落の底、カネの亡者が蠢く権力の闇社会……。郷原は、占いを外すことが、決して許されない占い師だった。

2、

楽しそうにゆらゆらと、いい気持ちで歩いて、新宿駅の小田急前を通り過ぎ、青梅街道に出た郷原悟の携帯電話に着信が入ったのは、この直後のことである。

ポケットからいきなり音楽が聞こえてきた。スーパーマリオブラザーズの着メロだ。郷原は、酔って定まらない眼と手で、コートのポケットをまさぐり、携帯電話を掴み出すと、電話の相手が誰かを確認するでもなく携帯を開き、通話ボタンを押して耳に当てた。

「あい、ごーはらです……」

「よお、俺だ。川嶋だ」

電話の向こうの声は、聞きなれた、郷原の兄貴分、平安ファイナンス社長の川嶋貢（かわしまみつぐ）であった。川嶋は金融業者、平安ファイナンスの社長であるとともに、寺本組という暴力団の大幹部でもある。業界で言う“若頭”というヤツだ。

「なーんだ。川嶋さんか。何の用……？」

「なんだは無いだろ？また飲んでるな、お前……」

電話の向こうの川嶋は、郷原の声の調子で、郷原が相当酔っているのがわかったようだった。郷原の酒好きは、彼を知る者の間では有名な事実である。

「うっせえな……。いろいろあんだよ俺にだって。どうせまたあのゲームでもやれと、上から命令が来てるんだろ。川嶋さんからの電話が、悪事のお誘いじゃないってことはねえからな」

「まあ、ぶっちゃけそうなんだ。上からまた、命令が来ている。例のゲームを見たいとな。今度の挑戦者は、個人資産1000億円とも言われている、クレイジーな変態爺さんだよ。俺はお前に、それを頼むことしかできねえ……。お前も、断ることはできない……。それが、この世界の掟だ」

あのゲーム——。郷原が、闇社会に名を知られるきっかけとなった、あの忌まわしいゲーム……。それがいかに心身を荒ませようとも、郷原は、そこから逃れることは出来ない。それが、暗黒社会に生きる者の定めである。

「ちょうど今、その爺さんとのゲームに放り込めそうな、間抜けそうなヤツがいる……。ぜひお前に、そいつをイジってもらおうと思ってな」

「間抜けそうなヤツねえ……。どんなヤツだよ」

「今度のターゲットは、産婦人科医さ」

「産婦人科医い……？」

「しかも、K大出のエリート先生だぞ？ ほら、以前、お前に占ってもらっただろ？ あの杉並のおんぼろビルのこと」

「ああ……。東京日の出銀行の……」

「おお、それぞれ。お前の言ったとおりにな、本当に思いがけない事件が起って、そんで飛び込んだのさ。見事にな」

「思いがけない事件……？」

郷原は、鋭い目を細めた。

「詳しい話は後で。本人が今、ここにいる。これからお前のところに連れて行こうと思うが、構わないか？」

「ああ……。別にいいよ。とりあえず話を聞こうじゃねえの。例の所でいいんだな」

「そうだ。いつものところだ」

「了解……。んじゃあ、後で」

郷原は、深いため息をひとつ吐き出すと、携帯電話を折りたたんでコートポケットにしまった。そして、まばゆい青梅街道のスクランブルを見上げた。小滝橋通りのほうへ少し移動してから、タクシーを拾った。

「あ、運転手さん、新橋へ行ってくれる？」

「新橋ですか。新橋のどちらに？」

「ダイヤモンドパレスホテル」

「かしこまりました」

郷原はそれだけ言うと、シートに深く背中を預けて、目を閉じた。

また、悪夢の占い賭博が幕を開ける——。

1、

金色のオーデ・マ・ピケの腕時計が、午後4時を示していた。平安ファイナンスの社長用デスクで、川嶋貢は、部下からの連絡を待っていた。

「そろそろだな……」

呟いて川嶋は、事務の女性が淹れてくれたお茶をひと口啜る。と、その時、デスクの上の電話が鳴り出した。それをすかさず取り上げる。

「おう、どうだった？」

「やはり今日中の入金は、確認できませんでした。親父のほうは万策尽きたようで、さっきから百瀬公園のベンチで、惚けたように座り込んでます」

電話をかけてきたのは、平安ファイナンスの若手社員、浜崎慎吾だ。

「村井から連絡は？」

「はい。村井の話では、息子の亮一のほうも、午前中は、どこかにしきりと電話をしていたようですが、こちらも手立てがないまま、今、駅前のコーヒーショップで呆然としているそうです」

「そうか。ぼちぼち、確定の赤ランプってところだな。他のハイエナどもが敏感に、山本が飛んだのを嗅ぎ付ける前に、息子の亮一に会いたい。浜崎はすぐに、村井と合流して、息子の亮一のガラを、押さえに行ってくれ。親父のほうは渡辺に任せよう」

「わかりました」

浜崎が、川嶋に切れの良い返事をした。ガラとは、身柄のことである。この業界では不渡りが出る公算が高まると、どこの業者がいち早く本人たちを捕まえるか、というのが肝であった。本人を早く捕まえて、借金返済の絵を描かせるというのと、逃亡を未然に防ぐという目的があるのだ。

「でも社長、どこへ連れていきますか？ やはり、自宅へ？」

「そうだな……。とりあえず親父のほうは、家に帰るまで張りつづける。こうなったら奴さん、債権者が押しかけてくる前に、少しでも金目の物を処分して、夜逃げの算段をするはずだ。絶対に自宅へ帰る。そこを押さええるように渡辺に指示を出してくれ」

「息子のほうは、どうします？」

「そうだな……。息子は医者だ。いろいろ利用価値がある……。場合によっては借金の返済の相談に、乗ってやらなくもないとけしかけて、ここへ連れてきてくれ」

川嶋は、手元に置かれたタバコのボックスから、パーラメントを一本取り出して、ペーパーホルダー型ライターで火をつけた。

「え？ 返済の相談って、いいんですか社長。そんな甘いこと言って」

「ああ。いいんだ。山本次第では、本気で借金の棒引きを考えてやらなくもない。ただし、郷原と相談してからだな。郷原に、山本の身の振り方を描いてもらう」

「ああ、なるほど。郷原先生の元へ……。なら、甘くないですねむしろ。郷原先生の取り立てのキツさは、業界でも評判ですから。ということは、また、例のゲームのリクエストが来た、ってわけですね。それに、山本を充てようと……」

「お前は余計な想像をしなくていい。とにかく亮一は、ひとり息子のお坊ちゃまだけあって世間知らずだ。山本亮一が非常に扱いやすいタイプであることは、間違いない。すぐにここへ連れてきてくれ」

「わかりました」

川嶋は、浜崎の返事を聞くと、受話器を事務用電話器に戻して電話を切った。それから、肺に吸い込んだ煙を鼻から吐き出す。

（さて……。今度も郷原がどんな絵を描くかな。どちらにしろ山本亮一には、墮ちるところまで墮ちてもらわなきゃならんか……）

川嶋は紫煙をくゆらせながら、革張りの椅子を回転させ、自分のデスクの背面にあるブラインドを覗いた。莫大なカネが転がり込む予感に、高鳴る胸を落ち着ける。真冬の夕日が、筋向いのビルとビルの間を赤く燃やしていた。ほどなくして、再び浜崎からの電話が入った。

「社長、山本亮一のガラ、確保しました。今から帰社します」

「わかった。丁重にご案内しろ。丁重にな」

そうやって、瞼を薄く閉じ、遠い背後の夕日を見つめる川嶋。今夜はとても、長い夜になりそうだ。

2、

「どうなんですか？ 山本さん……」

「……………」

浜崎と村井に、コーヒーショップで声を掛けられた山本亮一は、抵抗する元気もないままに車に乗せられて、とうとう平安ファイナンスの応接室へとやってきた。応接室とはいっても、4枚のパーテーションで仕切られた空間に、応接セットが置かれただけのものである。

そこに座らされた山本は、悪い夢でも見ているような気がしていた。いったいなぜ自分は、こんな場所に居るのだろう。もう自宅が差し押さえの対象となり、自分と父親の背中には、重いと言うにはあまりにも重過ぎる7億円近くもの借金があるだなんて、未だに信じられない。さっきからやたらと他人事のような気がしている。

目の前にいる、恰幅のいい、迫力のある中年男や、自分を取り囲んでいる茶髪の若い男などがみんな、スクリーンの中の出来事のようにだった。

「聞いとんのか、ワレェ！！」

「あ！ ああ、ハイ！ す、すみません……！！」

「おい浜崎、まだお客様だ。粗暴なことはするな」

「す、すみません社長っ！ ですがこの方、先ほどからどうも、我々の話を聞いていないみたいで……」

貸金業規制法が改正されて以来、借金の取り立て方法にも、かなり神経を使うようになってしまった。殴ったり、蹴ったりということはもとより、怒鳴り声だってあまり頻発させると、恫喝行為ということで、コンプライアンスに引っかかるご時世だ。

川嶋は、ソファにぴたりとつけていた背中を起こすと、シガーボックスの中からタバコを取り

出して火をつけた。穂先をじりじり燃焼させて吸い込んだ、ずしりと重たい煙が、川嶋の酷薄そうな唇から拡散されてゆく。

「では山本先生……。ご実家の山本ビルは、どうしても手放したくないと、そういうことですか？」

「は、はい！！ あの通り両親には、あのビルだけが最後の砦なんです！ な、なんとか、それだけは……。それだけは、勘弁してください……。！ 両親を、いまさらあの歳で、路頭に迷わせるわけには……。僕がどうにか働いて返します！ お願いします、信じてください！」

山本は、必死に川嶋に懇願した。

「しかしですねえ、あなたは今、無職じゃありませんか。確か病院をご開業なさるといので、去年勤め先の、杉の木坂総合病院を退職されていますよねえ？ 我々としても債権の回収に、そう時間をかけたくはないのです。時間をかければかけただけ、損に繋がってしまう……。だから、あなたの就職を信用して、ご返済を猶予することは出来ません。それに、明日にでも働く場所が見つかりますか？ 見つからないでしょう？ ねえ？」

ゆっくりと山本を諭す川嶋のその声は、穏やかではあるが、眼光の鋭さとがっしりした厚い体躯が、威圧的だった。その静かな迫力のせいで、山本はうつむいたまま、何もいえなくなってしまった。

「ま、そんなに担保を差し出すのがお厭なら、手立てがないわけでもありませんよ……？」

「ほ、本当ですか?!」

「フフ……。あなたは、一応は医者だ。なんなら、架空の診断書でもお書きになりますか？ その手のアルバイトをお望みなら、ご紹介してあげなくもない。1枚作成すれば、数百万円だ。ただし、バレたら一発で医師免許剥奪、公文書偽造容疑で、下手をすれば実刑喰らいますけどね。それでも良ければ」

「……………」

「何とか言えや、コラ！」

黙りこくってしまった山本に、苛立った浜崎が声を荒らげた。川嶋は浜崎を右手でけん制すると、左手首の腕時計に目をやって、おもむろに山本に切り出した。

「もう、話し合いもかれこれ1時間になります。場所を喫茶店にでも変えましょうか。浜崎たちは、通常業務に戻ってくれ。私と山本さんと話し合うことにしよう」

川嶋は、そう言うと立ち上がって、携帯電話をスーツのポケットに入れ、山本を促した。

「浜崎、いつものシュベールに居る。山本さんと話し合いがいたら電話を入れるから、お前は社で待機していてくれ」

「はい！」

浜崎は、敬礼でもしそうなくらい背筋を正して、川嶋にキレの良い返事をした。

「では、参りましょうか、山本さん」

「は、はあ……」

山本は、これからどんな目に遭うのだろうと、不安で足元がよろけたが、川嶋に促されるままに立ち上がると、川嶋の後ろについていくしかなかった。

「行ってらっしゃいませ！！」

平安ファイナンスの茶髪社員たちが、威圧感たっぷりの姿勢で、オフィスから出ていく川嶋と、山本を見送っていた。

3、

新大久保に程近い、新宿百人町界隈の、コリアンタウンにある平安ファイナンス。そのテナントが入居している平安第一ビルの、道路を挟んだ筋向いに、小さな喫茶店“シュベール”があった。川嶋は、客と話をするときには、いつもそこで行うのだ。その店の窓際の、一番奥のテーブル席に山本を案内すると、川嶋はアイスコーヒーを二つと、サンドイッチを二つ頼んで山本に勧めた。

「もう夜ですからね。お腹も、減っていらっしゃるんじゃないですか？ 良かったら、サンドイッチでもつまんでください」

川嶋はいいながら、胸のポケットからタバコを取り出し、口に咥えて火をつけた。

飴と鞭——。こうして、食べ物を勧めるというのは、こちらもも鬼じゃないと相手に伝えるためのポーズだ。食べ物や飲み物を出してやると、それだけで相手は、この人は話がわかるかも知れないと、誤解するのである。

ずっとうつむいていた山本が、席についたとたん、顔を上げた。

「あ、あの……」

「はい、何でしょう？」

「ぼ、僕も、一服していいでしょうか」

「ああ。もちろんです。どうぞ遠慮なく」

山本はそれを聞くと、リュックからキャメルを取り出して、口に咥えた。医者というのは、極度の集中力と、責任が伴う重たい仕事のせいか、喫煙者が非常に多い職業でもある。さっきの平安ファイナンスの応接室では、とてもタバコを吸わせてくださいと、言い出せるムードではなかったから、山本はしきりとニコチンが恋しくなっていたのだ。夢中で煙を肺に注入する山本を、川嶋は紫煙の向こうで冷やかに観察しながら、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「正直、ウチだけじゃないでしょう？ 山本先生……」

「え……？」

「借金ですよ。借りてるの、ウチのぶんだけじゃないでしょう？」

「は、はあ……」

川嶋は精一杯、同情的な顔を浮かべて、山本の現状を聞き出すポーズを作ってみたが、もちろんこんなものは猿芝居だ。川嶋は山本の負債が今、どこに、いくらあるのかということは、聞かなくてもすべて把握している。なにせ山本の父親、山本敏夫と、息子の亮一を借金まみれにさせたのは、最初から平安ファイナンスなのだから。

この経緯はこうだ。今から1年半ほど前——。

東京都杉並区某所にある、甲州街道に面した山本の実家、山本ビルは、築50年は経っているだろうというようなビルであったのだが、その1階が小さなスナックになっている。

そこに、寺本組の末端系列企業であるおしぼり屋が、おしぼりや氷を納入しているのだが、納品にいつも行くのは、渡辺という若い男だった。この渡辺、実は平安ファイナンスの若手社員、

浜崎慎吾の、暴走族時代の後輩なのである。

渡辺は明るい性格で、人から好かれる性質だったから、すぐにこのママさんや従業員と親しくなった。そして、この山本ビルが今、借主と、家主である山本敏夫との間で、建て替え問題に揺れているとの話を聞きだすと、それを兄貴分の浜崎に教えたのである。

浜崎はこのとき、歌舞伎町のホストクラブから、平安ファイナンスに転職して3年目を迎えたところであった。早く手柄を立てたくて、気持ちが急いでいたから、この山本ビルをカモに出来ないかと、自分の社長である川嶋貢に、相談を持ちかけた。

浜崎のシナリオを聞いて、川嶋は悪くないと直感した。そこで、自社の顧問に相談してみたのである。

「この山本ビルの裏手は、去年までクリーニング工場だったんだが、今は更地になっている……。この山本ビルをどかしちまえば、それなりの広さだ。さらにラッキーなことに、この山本ビルはもう何年も前から、入居者と家主の間で、建て替え問題が起っているらしい……。そこに、付け入るスキがねえかとな」

「つまり、地上げをやれないかってこと……？」

平安ファイナンスのフロア奥にある、秘密めいた重役室で、爪楊枝を噛みながら、川嶋貢の話の聞いている男がいた。

「ああ。この界隈に近々、図書館を建設する計画があるらしい。この山本ビルの辺りが、候補地の一つに上げられている。だから、俺たちがある程度土地をまとめてやれば、建設を請け負っている第三セクターが、飛びつくんじゃないだろうかと思ってよ」

「ふーん……。そのビルの登記簿は？」

「これだ」

デスクで川嶋の話の聞いていた、フチなし眼鏡の30代男は、川嶋から問題のビルの、登記簿のコピーと、ビルオーナーの山本敏夫、息子の亮一の生年月日が書かれたメモを受け取ると、おもむろに、手元のノートパソコンにデータを入力して、星の軌道を計算し始めた。

そう、この男こそ、天才占星術師と闇社会で恐れられている、寺本組の若頭補佐、郷原悟なのだ。郷原は、川嶋の補佐役であるとともに、平安ファイナンスの専任顧問も務めている。ただし株式は所有しておらず、代表権は持たないから、会社の運営には参加できないのだが、それでも、あまりに当たるその占いのせいで、今や平安ファイナンスと社長の川嶋は、郷原の意見なしには、やっていけなくなっていた。

郷原はときどき、気が向いたときだけ出社してきて、重役室に詰めている。そして、客への融資が成功するかどうか、どんなカネ目の絵図面を描けるか、策を巡らせ、人の秘密を炙り出し、投資家や企業家の相談を聞いてやるのが、主な仕事だった。

ディスプレイに浮かび上がった、星々の軌道を見つめながら、郷原は、おもむろに言った。

「なんだ。もう時間の問題だな、この親子……」

「本当か？」

「ああ。これならたぶん、ハメるのはわからない。簡単にすっ転ぶだろう」

「具体的には、どうしたら……？」

川嶋は、思わず身を乗り出していた。

「そうだな……。この息子は、医者なんだろう？」

「ああ。今は杉の木坂総合病院で勤務医をしている。産婦人科のな」

「それなら、開業資金を貸し付けてやればいいさ」

郷原は、眼鏡を左手の中指で、鼻骨のほうへと押し戻しながら言った。その目は鋭く光り、感情のない酷薄さを湛えていた。

「開業資金か……」

川嶋は、膝の間で手を組み、思案を巡らせる。

「そう……。勤務医なんてえのは、キツイ仕事のうえに、賃金も安い。だからほとんどのヤツは、自分の病院を経営したいという欲があるはず……。その欲を、煽ってやればいい」

「しかし、うちはノンバンクだぞ？ノンバンクのバカ高い金利で開業資金なんか、借りるかなあ」

「やだなあ、川嶋さん……。地上げ、成功させたいんでしょ？担保を手放させて、身包み剥がすには、このビルの評価額の最低3倍は貸し込まねえと、すぐには倒れないよ。だから最初は、建て替えのための融資話を持ちかけて信用させてから、さらに息子の開業にかこつけて、もっと借りさせればいい。そうすると、星の言うことには、そのあともっと大きなカタストロフィーが起って、山本は簡単にお終いになると、そう、告げている……」

「ほ、本当か?!」

川嶋は、思わず身を乗り出していた。それを見て、薄い口角を上げる郷原だった。

「今まで、俺の占いが外れたことあった？ そうだな……。まずは浜崎を営業に行かせてみなよ。あんな、元暴走族がバレバレの、ガラの悪い茶髪兄ちゃんが、寺本組の代紋が入った名刺持って、建て替え資金のご入用はありませんかって現れたら、フツーは、狙われてると思ってビビる。そこがむしろ、俺たちの付け入るスキだ……」

「どういうことだ……？」

「つまりだな、人間ってえのは、まず不安を与えてやればいいのさ。不安を与え、心に澱みを残してやる……。不安を与えると、人は、その不安を払拭してくれる権威を求めるものだ。けなして、罵倒して、不安感を煽るだけ煽ってから、最後に誉める。安心させる。できるだけ権威的にな。データや論理、ネームバリューで装った権威で、いつわりの安心を与えてやる。そうすると、バカみてえに信じきって、人は洗脳されてゆく……。占い師とは、そうやって客をハメるものだと、俺は叩き込まれてきた」

郷原は立ち上がって、川嶋に背を向けると、南東に面した窓のブラインドを指で押し広げた。そのスラリと均整の取れた背中を、川嶋は見つめる。

「……わからない？」

郷原が振り返って、川嶋を見下ろしていた。その瞳の奥が、俺は馬鹿は嫌いだと、愚鈍な川嶋を見下すような光を帯びているのが、川嶋には気に入らなかった。

「つまり、平安ファイナンスが、お宅を狙っているんだと、さんざ営業かけて不安感を煽る……。系列金融にも情報を流して、煽りに加わらせる。あちこちから危険な融資話がやってきて、感覚を狂わせたら、ここで東京日の出銀行という、権威の出番だ」

ペットボトルの蓋を閉めながら川嶋は、眼を丸くして郷原を見た。

「東京日の出銀行……？」

「そう。日の出さんとウチは仲良しでしょ？ノンバンクに怯えた山本のところに、きちんとしたサラリーマンの、日の出銀行の社員を派遣するんだ。そして、日の出銀行もお宅に、融資したいんだと持ちかけてやれば、ノンバンクから借りるよりはずーっといいと考えて、安心して飛びつくはず……。日の出から借りてしまえば、しつこい勧誘も追い払う口実が出来る。その後、日の出銀行が、息子の開業資金も用意してやる。そのカネは裏で、ウチが貸してやったっていい。要は、東京日の出銀行の皮を被った、平安ファイナンスを仕立てるのさ」

郷原は、胸元まで大きくはだけたシャツのボタンを、留めることもないまま、テーブルの上のジャック・ダニエルを、2つ用意したグラスに注ぐと、今飲んでいたミネラルウォーターを足して水割りを作った。妙に手馴れた仕草で、その一方を川嶋に手渡す。

厳然としたタテ社会であるヤクザ業界では、本来、兄貴分の前で、こんな態度は許されないのだが、それが黙認されてしまうほど、川嶋は郷原に頼りきっている。寺本組の本部にもそういう噂が聞こえていて、最近では、川嶋ではなく、その弟分の郷原悟を、組幹部に推そうといい出す者もいるほどだった。

郷原は、美味そうに濃い水割りを飲み干して、笑って見せた。

「ククク……。転ぶさ一発で……。星が、俺に告げている。借金さえさせてしまえば、あとは俺たちが手を下さなくても、面白いように転落する運命だと。たぶん山本亮一にはもっと、致命的なことが起るはず。それが何かはわからないが、恐らく致命的な事件、事故……。思いがけない伏兵……。今にわかるさ、今にな」

そういつて、酷薄な笑みを浮かべる郷原悟を、川嶋は、腑に落ちない顔で見つめていた。

その8ヶ月後、東京日の出銀行が、山本の当座預金から持ち出された、ビルの建替修繕費、亮一の開業費など諸々の経費を繰り越した直後、なんと山本亮一は、とある医療機器メーカー社長を名乗る男に、開業準備金のうちの5千万を騙し取られてしまったのである。

（ご……、郷原の言った通りだ……！！）

川嶋は、愕然とした。しかも、郷原が予告していた通りのタイミングで、このことが明るみに出たのだった。

天才占い師——。背筋が、凍りつくほどだ——。川嶋はこの情報を、自社のデスクで聞いたとき、鳥肌が立っていた。

そこからの展開は、まさにジェットコースター。手元に置いてあった現金5千万を騙し取られると、すでに着工に取り掛かっていた建て替え工事と、開業のための内装工事などの買掛金支払いが、山本敏夫と、息子の亮一に襲い掛かってきた。支払いのカネの工面に、朝から晩まで追われる山本親子だった。

とうとう、あんなに、ノンバンクだといって馬鹿にした浜崎慎吾の元へ、山本敏夫から連絡が来たのであった。

「お願いだ浜崎さん！！ な、なんとか、息子の病院がオープンして、軌道に乗るまで、つなぎの運転資金だけでも、融資してくれないだろうか……。病院がオープンしたら、必ず返せるお金だ……。頼む……。！ 他の金融機関に行って、息子の恥を曝すようなことはできんのだ、事情を知っている平安さんだから、頼むんだよ！！」

そうって、まだ25、6の若造の足元に額を擦りつける、背中の曲がり始めた山本敏夫だった。

浜崎は内心、罵倒してやりたい気持ちで一杯だったが、顔じゅうで笑顔を作り、精一杯優しく対応してやった。それはお困りでしょう、わかりました、ウチでなんとかしましょう、と。

山本敏夫が平安ファイナンスから借りたのは、全部で600万円である。その600万円のために振り出した手形が、今日、落ちないのを確認したのだ。明日になれば手形交換所から、手形が決済されなかった情報が、ほとんどの金融機関に知れ渡る。

だから、明日になれば、山本敏夫のところにも、その息子の山本自身にも、ノンバンク——、そういうと聞こえはいいが要はサラ金——の、死肉に群がるハイエナどもが、一斉に牙を剥いて襲い掛かってくるはずだ。

川嶋は眼を細めて、アイスコーヒーをひと口飲むと、夢中で煙を吸い込んで、苛立っている山本亮一医師を眺めた。そして、再び切り出すのであった。

「それで、けっきょく今、どこに、いくら借金があるのですか。黙っていても始まりませんよ、山本先生。正直に話してください」

「う……。そ、それは……」

「まあ、いいですけどね……。言いたくないのなら。しかし、あなたは誤解しているようだ。むしろ我々は、あなたを救ってあげたいと、そう、思っているのですよ……？」

「え……？」

優しい川嶋の言葉の裏に、どす黒い罟が潜んでいるとも知らず、山本は少しの光明に青ざめた面を上げた。川嶋は、再びタバコに火をつけて言葉を続ける。

「あなたは、誤解していらっしゃるようだ……。明日の朝になれば、あなたの不渡り情報は、すべての金融機関に知れ渡る。明日になれば、ヤクザやごろつきどもが、大挙して押しかけてくるでしょう。もう、自宅には帰れませんよ。言っておきますけどね」

「そ、そんな……！！」

「あなた、お坊ちゃんだから知らないでしょうけど、取り立てなんかに来る連中はみんな、暴力団の息の者ですよ。上場企業だからと舐めてかかったら、とんでもない。耐えられなくてそのまま首を吊った人を、私は何人も見てきています。私はそこが心配で、見ていられなかったから、こうしてわざわざ、喫茶店にお連れして差し上げたんですよ？ 事務所じゃあ緊張して、頭が働かないと思ったからね。本当に私のところで一番最初に不渡りを出したことを、感謝してもらいたいくらいです。こんな親切な金融屋は、そうそうないですよ」

そうって川嶋は、ついノリ過ぎて、今のはオーバートークになったなと思った。いくらこちらの術中にハマっている男だとはいえ、あまり誇張した表現を用いると、かえって警戒心を引き出してしまうから、注意しなければならない。

「では、りよ、両親は……？ 両親は、どうしたらいいんです？！」

「そうですねえ……。普通の人が、取り立て屋を追っ払えるはず、ないでしょうねえ。なにせ連中は、恐いものなしのヤクザですから。一応今夜は、うちの若いのがご両親の身辺を守ってあげる予定ですが、それもいつまでもというわけには行かないでしょう。どこかへ、身を隠させてあ

げないとね」

「し、しかし、身を隠すといっても、どこへ……？」

そう山本が言いかけたとき、川嶋の携帯電話が鳴り出した。

「おう俺だ。なに？ 本当かそれは……。うむ……。わかった」

携帯電話を切った川嶋は、そのまま、山本を上目遣いに見た。

「今、さっそく取り立て屋が一組、やってきたそうです。うちの若いのが2、3発殴られたようですが、ご両親には手を触れさせなかったと。もう時間がない……。急いで、引っ越させましょう」

「ど、どこへ……？」

「そうですね……。さすがにご両親は負債者だ。豪華3LDKマンションというわけには行きません。私の知り合いが、伊豆で国民宿舎を経営しているのですが、そこで調理場の手伝いを探しています。そこの寮に入れてもらえるよう、掛け合っただけあげましょう。6畳一間で隙間風も吹くし、朝は毎日3時に起きて、浴場掃除やら飯焚きやらしないとなりませんが、路上生活者になるよりはマシでしょう。お年よりは残念ながら、そんな仕事しか無いのでね」

「そ……！ そんな……！！」

山本はやおら、尻を椅子から落とすと、ここが普通の喫茶店であることも忘れ、床の上に突っ伏した。

「お、お願いします！ 母はリウマチもひどいんです！ 父だって心臓病が……。そんな暮らしはとて耐えられない！ 僕が、どんなことをしてでもお金返します！ だからあのまま、住み慣れた家に住めるようにしてあげてください……。こ、この通り……！！」

山本は、突っ伏して泣いていた。ボロボロと涙を流していた。

カウンター席にひとりだけいた、文庫本を読んでいた男性客がぎょっとして、山本と川嶋のほうを見ている。マスターは、何のリアクションもない。

「じゃあ、診断書でも書きますか？ それとも、保険屋をだまくらかして、当座のカネを作る……？ 自分が、逮捕されて、人生を台無しにするのと引き換えに……」

川嶋は、突っ伏している山本の前に、しゃがみ込んだ。山本は閻魔大王に怯える亡者のように、震えて、顔を上げることができない。

川嶋は、本当に閻魔のような形相を浮かべると、急にドスの効いた声を出した。ヤクザの、寺本組若頭の、残忍なカネ貸しの本性が、真っ黒いとぐろを巻いて、山本を飲み込んでゆく。

「なんとか言いなさいよ、山本さん……。アレはダメ、これもダメで、そのくせ、お願いだけは一人前ですかあ……？ これ以上、私の善意を踏みにじらないでくださいよ……。ねえ……」

さきほどからこちらを気にしていたカウンターのビジネスマンは、そっと文庫本を畳むと、こっそり千円札をカウンターに残して店を出ていった。マスターは眼を伏せたまま、トレイを磨いている。

山本はひたすら目を閉じ、祈るだけだった。これは夢だと、自分に言い聞かせるように――。「仕方がない……。これでは話にならない。うちの顧問に会ってもらいましょうか。顧問なら、もっと何か、いいアイデアを出してくれるかも知れない」

川嶋は、そうやって、大きな体を立て直すと、後ろを向き、自分の携帯電話を取り出して、ど

こかへ電話を掛け始めた。山本から2、3歩離れて、携帯電話を耳に押し当てた。

なにやら、少し親しげに話している声が、床の模様を間近で見つめている山本の耳に入ってきた。その声が気になって、山本は、泣き顔を上げて川嶋の背中を見た。そして、聞こえてきた会話――。

「本人が今、ここにいる……。これからお前のところに連れて行こうと思うが、構わないか？」

一呼吸おいて、川嶋がさらに続けた。

「わかった。それじゃあ今から行くからな。用意しておいてくれ」

電話を切り、山本のほうを振り返る。

「さあ……。いいですよ山本先生。今から、うちの顧問が会ってくれるそうです。顧問なら、あなたに救いの手を差し伸べられるかも知れない。なにせ、うちの顧問はただ者ではないのでね。人の心を、未来を、自在に読める男だ」

「あ……。あうう……」

そう言って、乾いた笑みを浮かべる川嶋貢を、山本亮一は、涙に汚れた顔でただ、見つめるしか出来なかった。

4、

「あの……。これから、いったいどこへ……？」

山本は、不安に唇を歪めながら、川嶋の顔色を伺った。

「ああ、ウチの顧問がいる場所に、お連れいたします山本先生」

「こ、顧問……。？顧問って……？」

「ええ。ウチの顧問と一緒に、返済方法をこれから考えるんです。どうせあなた、返済の絵が書けるまで、家にも帰れないし、帰ったところで、ハイエナの餌食になるだけだ。あなたにはもう、帰る場所などない。今夜中に結論を出さない限り、あなたとご両親に明日はない……。ご両親を、薄汚い飯場に入れるのがいやなら、なにか奇策を思いつくんですね。この窮地を脱却できる奇策を……」

川嶋は微笑んだ。山本は、川嶋に腕を捕まれるまま叫んでいた。

「そ……。！ そんなの、無理です！僕にはそんなこと……。！！」

「だから、顧問に会ってもらうんでしょ？ 顧問の智恵を借りれば、奇策が思いつくかも知れない。うちの顧問には、それだけのカリスマ性があると、さっきから言っているでしょう。」

「い、厭だ、行きたくない！！ こ、殺さないで……。！！」

山本は、本気で泣き叫んだが、その声は駐車場に空しく反響するだけだった。川嶋は、泣き叫ぶ山本を無理やり黒塗りのベンツの後部座席に押し込むと、そのまま、自分も体を滑り込ませて、山本の隣に乗り込んだ。ベンツの運転手は先ほど山本を威嚇した、茶髪の浜崎慎吾である。

やがて静かに発進したベンツに乗せられて、山本はまるで生きた心地がしなかった。車が止まると、場所を特定されないよう、浜崎が山本に目隠しを当ててから、車外へ連れ出した。

浜崎に腕を引かれ、いくつか通路を渡り、エレベーターに乗せられたような感覚を受けて、怯えきった山本が着いた場所は、白を基調としたクラシカルな雰囲気、ホテルの一室であった。

かなり広い。高級スイートルームだ。

照明はところどころに灯されていて、神秘的にほの暗かった。室内の右手には、バーカウンターが設置されていて、洋酒のボトルが並んだ飾り棚まで置かれている。広々とした中央のリビングにある白い革張りのソファに、30代半ばくらいの男が、長い足を組んで静かに座っていた。長く垂らされた前髪の隙間から覗く眼鏡の奥で、鋭い瞳が光っている。

「いらっしゃい……」

男は眼鏡の奥の、切れ長の眼を細めて、薄い唇の口角を上げ、山本に微笑んだ。男の全身から、冷血動物のように感情のない残酷さがただよっている。それがまるで、悪魔のように感じられて、山本はみじろぎすると、思わず、一步後ろへと後ずさった。

「待たせたな、郷原……」

川嶋はそう言うと、男の元へと近づいていった。

「さあ、山本先生も、どうぞこちらへ」

川嶋が促す。しかし、そう言われても山本は、ソファの男に近づくのが、どうにも緊張してしまって、また、後ずさりしてしまった。

しかし、その真後ろには、気の短そうな浜崎が控えていて、山本を威圧している。

仕方がなく山本は、ごくりと唾を飲み込んでから、大きく息をすると、そろそろと、ソファの男のほうへ向かっていった。

眼鏡男は、彼の背後に置かれたルームランプの明かりで影が差し、なんともいえない静かな迫力を持っている。山本は、川嶋や浜崎よりもはるかに、この男のほうがヤクザなのだということが、対峙しただけでわかって、身震いした。

川嶋が、郷原に首を向ける。

「郷原……、こちらが、産婦人科医の山本先生だ」

郷原は、軽く頷いて見せた。

「ああ……。話はなんとなく……。東京日の出銀行も含めて、いろんなところから都合、7億近く借りてる人でしょ？ 実家のビルを担保にして。自分の病院を、開業させるつもりでね」

悪びれた風もなく、郷原はソファに背中をつけて足を組むと、肩をすくませて、姿勢を崩していた。

「んで、何があってあんた、こんなことになっちゃったのさ？ 順調に行けば今ごろ開業できて、7億の借金ぐらい、マイペースに返していける予定だったんだろ？」

「それがな、ファインメディカル、とかいう会社に、騙されたらしくてよ」

緊張している山本の代わりに、川嶋が説明した。

「ファインメディカル？」

「ああ。アメリカに本社がある会社だ。CT装置だとか、内視鏡だとか、遠心分離機だとかをよ、作ってる会社だよ」

「ふーん……。んで、その、ファインメディカルとかって会社に、どう騙されたんだよ」

郷原が、崩していた体勢を立て直して、山本のほうを見た。その鋭い眼差しと一瞬、視線が交錯した山本は、急に心臓がこわばった。

「先生……。顧問に、説明してやって」

「は、はあ……」

川嶋に促された山本は、うつむくと、途切れそうな声を出した。

「ファインメディカルを語る詐欺師、だったんだと思います。今にして思えば……。開業準備がある程度整ってきたときに、僕は、いろんな医療機器メーカーから、見積書を取り寄せました。僕は産婦人科だから、手術や分娩のために、たくさんの精密医療機器が要る……。それが計算してみると、だいたい2億5千万くらいはかかる……。だから、僕は購入するのではなくて、減価償却のリースを選択しました。リースなら、古くなれば下取りしてくれて、新しいものに替えられるので。医療機器というのは日進月歩ですから、そのほうが購入するよりもいいだろうと」

山本は、自分の顔の前で手を組んで、淡々と話しつつけた。

「その中でも、ファインメディカルを名乗る男が、一番熱心だったんです。それでファインメディカルの製品を揃えることにしました。ファインの医療機器は、僕も、前に勤めていた病院で使ったことがあったから、親近感もあったし……」

「ふーん……」

郷原は話を聞きながら、それらをすべて、手帳に書き込んでいった。占いの習慣で、人の打ち明け話は、すべて周到にメモを取る癖がついているのだ。その話に出てくる人や物、事実関係の中に、重大な秘密が引っかかってくることが多いのである。

「ところが、リース契約のために、ある信販会社が絡んできてから、様子がおかしくなっていた……」

「信販会社？」

「ええ。毎月のリース料金は、保障の問題があるから、信販会社と契約するのだと。そして、頭金をいくらか入れておくと、月々の支払いもぐっとラクになると言われて……。そのとき、僕はたまたま、5千万くらいは手元にあったんです。当面の支払いに充てるつもりのお金が……。それを頭金にしようと信販会社に振り込んだとたん、ファインメディカルの日本支社長を名乗っていた、近藤学という男が、消息不明になってしまって……」

山本は、ここまでしゃべると、悔しそうに唇を噛んだ。

「その信販会社の名前は？」

郷原は、メモを取りながら、山本に尋ねた。

「は、はい……！ “トロピカル信販” だと言っていました」

「トロピカル信販……？」

その言葉を聞いた途端、郷原の瞳が怪しく光った。川嶋も眼を細めて、郷原のほうを見る。トロピカル信販といえば、昔はテレビCMを流したりしていて、信販としては大手だ。そんな名の知れた会社が、こんなすぐにバレるような詐欺を働くだろうか。

郷原と川嶋は、顔を見合わせてしまった。まったく、どこまで騙されやすい男なのだろうか。

「信販会社だとか、銀行、証券、保険ってのは、出資法で定められているから認可制で、開業のための審査も簡単じゃない。だからだいたいは信販なんてのは、カード会社や銀行、デパート、鉄道、重工業、メディアなんかの資本力のある大企業が、子会社として持っているケースが多い。自社製品をローンで買わせるためにな。しかし手口がかなりずさんだ。だとしたら、信用させて、カネをとにかくむしり取るために、有名信販であるトロピカルを語った、ってことだな」

もちろん常識的に考えればそうだよな、という顔をして、山本は、郷原を見ていた。自分は、名の知れた信販会社だし、契約書もきちんとトロピカル信販のものだったから、それで信用してしまった……。有名な名前や人物に、人間がいかにかと騙されるか、という典型例である。今になってみれば山本自身も、まさに詐欺だ、うさん臭いと思うような近藤の手口だった。

「ちなみに、トロピカル信販だと言っていた連中だとか、近藤学の手がかりだとかってのは、何かあるのか？」

「は、はい……！ これはあのときの契約書にあったトロピカル信販の電話番号と、あと、こっちは近藤が逃げる直前まで構えていた事務所の住所、電話番号です」

山本はそう言うと、自分の携帯電話を取り出し、メモリーに残しておいたデータを見せた。見せられたそれを郷原は、自分の手帳に書き写す。

「ふーん……。トロピカル信販だと聞かされたほうは、03—xxxx—△△△△ね……。試しに今、鳴らしてみるか……」

そうやって、シャツの胸ポケットに突っ込んであった、自分の携帯電話を取り出すと、今、手帳に書き写した番号に、ダイヤルをプッシュした。

2度ほどコールが鳴ると、女性の声がした。

「お電話ありがとうございます、クリームです」

「……………」

郷原は眉間に皺を寄せて、一瞬、携帯電話を耳から離したが、瞬間的に何か思いついたらしく、すぐにまた電話機を耳に当てた。

「あの、初めてなんですけど、どうしたらいいですかね」

「はい。ご利用の方ですね。それでは、受け付けのほうへ転送いたします。このままお待ちください」

そう女性が言い終わると同時に、保留音の音楽が流れてきた。曲目は、サザンオールスターズの“愛しのエリー”である。しばらく待たされて、ガラの悪そうな、間延びした若い男の声が応答した。

「はい、受け付けです」

「あの、ボク、初めてなんですけど、利用するにはどうしたらいいですか？」

「はあ……、どちらでウチを知りました？」

「紹介です。人の紹介」

「……ご紹介者様のお名前は？」

「フランシスコ・ザビエル」

「は？」

「あ、間違えた、三浦按針」

「……………」

ガチャリと、電話を叩き切る音がした。いぶかしくなって、切られたようだ。

「どうしたんだ、郷原……」

川嶋が、郷原のほうを見つめる。

「ん～、よくわかんねえ。“クリーム”だって。変なの」

山本は郷原を見つめたまま、唇を結んで、固く手を握っていた。今は深夜だ。こんな時間にマトモな会社が電話対応するはずがない。

一度切った携帯電話を再び持ち直すと郷原は、平安ファイナンスの事務所に電話した。事務所は今、山本亮一の案件で、いつ他の業者と揉め事になるかわからないから、誰かが詰めている。案の定、電話をかけてみると、浜崎に山本ビルのことを最初に教えた、渡辺という青年が出た。その渡辺に指示を出す郷原である。

「おー……、渡辺か？ 遅くまでご苦労さん。突然だけど今からいう電話番号、加入者が誰になってるか調べてみてくれる？ ああそうだ。永森のところに聞けばわかる。すぐに調べてみてくれ」

金融業者の情報網というのは、本当に恐ろしい。彼等はNTTや携帯電話会社の職員にカネをつかませ、顧客情報を盗ませる。今、郷原が言った永森という者は、借金を機に身を持ち崩し、川嶋と平安ファイナンスからさらに開業資金を借りて、返済のために携帯電話や一般電話を担保にする金融業とか、名簿屋などを営んでいた。もちろん違法なのだが、借金が原因で日陰の身になり、ヤクザに手を染める人間は多い。

すぐに永森のところで電話番号を照会した渡辺から、連絡が来た。

「郷原先生、わかりました。この番号は、目黒にある、しらゆりテレフォンサービスという、電話応答代行業者の物のようです」

「電話応答代行、しらゆりテレフォンサービス、ね……。なるほどな。サンキュー」

「電話応答代行……？」

川嶋が、郷原を見詰めていた。山本は、じっと青ざめたままだ。

「ああ。そんなところだろうと思ってた。詐欺師がよくやる手口だ。電話がたくさん置いてあってな。契約者の言う通りに、バイトが応答してくれるサービスだ」

呆れた風に半笑いで、ソファに背中をつけ、郷原は長い足を組みなおした。それを前に、ますます小さくなる山本である。

「まあ、さっきの電話応答代行から調査してみよう。ヤツらは商売だから、必ず顧客のデータは控えてあるはず。いくら詐欺師だからって、電話代行と契約する際には、何らかの痕跡は残しているだろう。そこから、山本先生をハメた連中が、手繰れるかも知れない」

郷原はそうやって、刑事のようにメモしていた手帳を閉じると、ヘネシーのグラスを煽りながら川嶋のほうを見た。

「で？ 俺にどうしろと？ 話を聞いた限りじゃあこの人、今、返済能力は無いわけでしょ？」

「まあな。命がけの奇策でも思いつかない限り、この状態は覆らないだろうからな」

山本は、おずおずと顔を上げた。先ほどから、奇策、という単語が、川嶋の口に上る。妙に引かかる、その言葉……。

（奇策——。トリック——。一発大逆転のアイデア——。そんなものがあるのか？ あるわけない……。想像もつかない、そんなこと……）

山本は、自分の膝に肘を突いて、唇のところで手を組み、うつむくと考え込んだ。そのとき、川嶋の視線と、郷原の視線が交錯して、何らかの情報交換が行われたことに、山本は気づかなか

った。

「それでだな、郷原……。どうだろう、この山本先生を、例の賭場にご案内しては」
山本が、賭場、という言葉に、思わず顔を上げる。

(賭場……？ ギャンブル?? もしかして、それが奇策……??)

1、

「でもなあ。負けたらこの人、もっと地獄を見るんだぜ？」

「ああ……。確かにな。だから俺も、この方法だけは切り出したくなかったんだが……。でも、自宅ビルがすでに、差し押さえの対象になっちまってる今、この人の両親を、占有屋や取り立て屋から守るためには、どこか安全な場所へ逃がしてやるしかねえだろ？」

「まあね。キツイからな。差し押さえ対象の物件に住み続けるのは。張り紙や騒音なんてえのは序の口、汚物を撒かれたり、ネコの死骸を置かれたりな。ひどいのになると、ピストルでドアに鉛弾をぶち込んだりするヤツもいる。本当に、債権者を殺してしまうこともあるんだ。どっかのダムのコンクリには、そんな死体がたくさん、塗りこめられてるって話。あんた、山本さんって言ったっけ？ 取り立て屋や占有屋を、舐めないほうがいいぜ？ 川嶋さんの言うとおりで。早く両親を、飯場かタコ部屋に逃がしたほうがいい」

「それが、どうしてもイヤだって聞かないんだよ……。だったら、手っ取り早く借金をチャラにするには、この方法しかねえだろ？あの賭場なら、一晩で数千、場合によっては数億の勝ちですら、夢じゃねえからな」

「……………??」

山本を置き去りにして進んでいく川嶋と、郷原の会話。山本は勝手に決められたくなくて、身を乗り出すのだが、二人が纏う空気のせいなのか、上手く言を挟めない。

「そうねえ……。ただ、そうなる、山本さん一人じゃあ今度の賭博は成立しない。もう一人対戦相手がいないとな。それが恨みに連なる相手なら、山本さんも遠慮なく本気で戦えて、申し分ないんだけど……」

郷原は、ヘビのような目で、山本に笑いかけた。山本自身はそれで良いとも、なんとも答えていない。それなのになんだか、参加するのが前提で話が進められていくのが、山本には恐怖だった。そんな山本をチラリと見て郷原は、またヘネシーをひと口煽り、ソファの前のテーブルに置いてある、ノートパソコンの電源を入れて、万年筆と手帳を手元に置いた。

「そんじゃあ、まずは、山本先生の生年月日でも教えてもらおうか」

「せ、生年月日、ですか……？」

「そう。借金返したいんだろ……？ 親を救うためにさ」

郷原はそういうと、ソファに寝転んで足を組み、腹の上にノートパソコンを載せて、データを入力する格好で、山本の言葉を促した。

「せ、生年月日は……」

「ふーん……」

郷原は寝転んだまま、片手ですばやくデータを入力していった。

「あんた、結婚したの9ヶ月前？」

「え？」

「9ヶ月ぐれえ前なんじゃねえの？ ずいぶん、派手な式だったみたいだねえ……。そうだな……。たぶん、9ヶ月前だから、今年の3月……。3月の21日。春分の日。結婚式って、

この日だね」

「な、なんでわかるんです！！」

「わかるさ……。俺、占い師だもん」

「う、占い師……？」

「そう。占い師。まあ、正確に言うと占星術師ってえことになんのかも知んねえけど、そんなことはどうでも。んで、そのすぐあとに嫁さん、妊娠してんだろ、なーんか、そんな相があるぜ？」

山本はあっけにと取られて、口をぽかんと開けたまま、何度も大きく息継ぎをした。

「川嶋さん……！」

急に、大声を出す山本である。

「やめてください！ こんなトリックに、僕がひっかかるとでも思ったんですか！」

「あ～??」

川嶋は、いきなりの山本の怒りに、面食らった。

「僕はこれでも医者の方くれ、科学教育を受けた人間ですよ?! こんな大げさなことをして、心理的な暗示を与えておいて、その実、事前にボクの私生活を調べておいたに決まっている!!

絶対にそうだ!! 典型的なホットリーディングじゃないですか!!」

「……だったら？」

興奮して叫ぶ山本の耳に、不意に、郷原の低い声が飛んできた。

「……え？」

「だったら、どうだって言うんだよ負け犬」

「な、なに……! なんだと……!」

「18歳のときに、激しい挫折や劣等感の相がある。フフ……。これはそうだな、いろいろ考えられるが、たぶん、アンタは、負けず嫌いのカタマリみたいな性格だと星が言ってるから、そう……。こんな解釈はどうだ? たとえば、自分にもっともふさわしいと思込んでいた大学、国立大学に受からなかった……。おおかた、そんな出来事を示しているんだろうよ」

「……!!」

山本は、顔が真っ青に青ざめた。

「30歳のときに、訴訟騒ぎ……。隣に火星木星、刃物と血液、か。手術中の事故ってえところ? 反対側に土星もいる。心臓発作を表示する天王星……。たぶん、この配置からすると、患者は一時的に心肺停止……。しかも、性質の悪い配置をしているから、むしろ殺すより面倒な後遺症を、患者に与えちゃった……。しかし、あんたは生真面目だ。患者に誠意を見せようと思ったんだろう。海王星と火星、大損害の印……。たぶん示談を、病院は一切認めなかった。あんたは、仕方がなく自腹を切った。患者の家族に望まれるままに……。この辺りから独立を焦るようになったんだろう。この医療ミスが起こったのは、7月の、恐らく12日か13日のどちらか……。その1ヵ月後には、閑居って出てるから、たぶん自宅禁煙期間か。8月の半ばあたりから、9月の終わりくらいまで……」

「し……。調べたな……。!! 調べたんだ、僕の過去をっ!!」

「ククク……!」

郷原は、体中を震わせた。

「フッフ……！！」

「な、なにがおかしい！！」

「は一っはっはっは！！」

郷原は、腹を抱えて爆笑しだした。

「は！ それ、それだよ！！ 自分でバラしてるじゃねえか！ 俺は誇大妄想男だって、自分で言ってることに、なぜ気づかない……？」

「なっ……！！」

山本は、感情が昂ぶって、頬にくっきりと朱が差した。

「俺たちだってヒマじゃねえんだよ。お前のつまんねえ失敗なんか、調べたからって何になる。もう占いなんかしなくなっただって、その後のあんたの人生なんか、手に取るように読めるさ。あんたは、自分がいつでも一番だという意識が強くて、組織に馴染めない男だった……。K大というカネ持ち大学の中では、比較的普通の家庭だったせいで、カネ持ちの馬鹿息子たちに負けるもんかという、妙な自負心が肥大化していったんだろう。だから医局で嫌われ、孤立していった。そのうち、向こうが悪くて、自分は正しいのだという方向に、思考回路が向かってゆく……。それで意気込んで独立しようとしたら、今度はもの見事に詐欺師に引っかかっちゃった。この時点で、前の職場の局長でも部長でも頭下げて、復職してりゃあここまで墮ちずに済んだんだろうが、プライドの高いあんたのことだ。開業がダメになったなど、みっともなく言えなくて、そのウソを通すために、こんなことになっちゃった……。違うかよ……」

「う……」

山本は、自分の弱い部分を見事に描写されて、真っ青に青ざめ、うつむいてしまった。体が、ぶるぶると震えている。

「どうだい山本先生。郷原の力を、信じる気になったか……。ウチの顧問はただ者じゃないと、言っただろう？」

川嶋の声を背後で聞いた山本は、震えながらつぶやいた。

「す、すみません、た、タバコを1本、吸わせてください……」

郷原は、薄笑いを浮かべて立ち上がると、山本と川嶋のために、飾り棚からグラスを取り出し、ロックを作ってやった。それから、さきほどからずっと扉の前に仁王立ちしている、浜崎に声をかけた。

「おい、浜崎」

「何でしょう、郷原先生」

「ナマ、いくら積んできた？」

「はい、とりあえず30本ほど」

「あ、そう……。んじゃあ、それ全部と、いつもの借用書、持ってきてくれる？」

「かしこまりました」

浜崎は、新兵のように踵を返すと、ロックを解除して扉の外へと出て行った。郷原は立ったまま、カラカラと氷を鳴らしてヘネシーを飲むと、夢中でニコチンを体に入れている、山本と川嶋を冷やかに観察した。山本が吸いだしたので、川嶋もそれに便乗したようだ。

川嶋が、郷原の視線に首を向ける。

「な、なんだよ、郷原……」

「……んなモン、どこがウマいのかなーって、思って」

「そ、そりゃあお前、クセみてえなモンだからよお……」

川嶋が、バツが悪そうに言った。近頃は喫煙者に対する世間の風当たりが強いので、日ごろから社員にかしずかれている川嶋も、タバコのことを聞かれると、なんとなく小さくなってしま

。

「ふーん。川嶋さんはともかく、山本先生はのん気だねえ。あんた、タバコなんか吸ってる場合じゃないっしょ……。酒だとか、タバコだとかは、生活に一番要らないモンでしょうが。カネがないなら、真っ先に止めるべきモンだろ、常識的に。こんな状況で、借金取りを前にして、そんなもんよく吸えるじゃん……。いい度胸だ」

山本は、郷原の指摘に顔中を真っ赤にすると、すぐに目の前の灰皿に、吸いかけのタバコをこすりつけた。

「ククク……。いいよ別に。吸えよ……。咎めてるわけじゃねえ。人間って、どうしようもなく矛盾した生き物だなあって、そう思っただけだ」

郷原はそう言うと、ヘネシーの入ったグラスを一気に煽った。まるで、風呂上りに麦茶でも飲んでいるかのようだ。医師である山本は、その様子を見ていて、この男のほうこそ、かなりのアルコール依存症なのではないかと思った。飲むほどに眼がギラついて、手負いの狂った獣のように、肩で息をしている。

やがて、浜崎が戻ってきた。

「郷原先生、ご用意しました」

「ああ……。そこへ並べてくれ」

浜崎は、抱えるようにして持ってきたジュラルミンのケースを開けると、山本が座るソファの前のテーブルに、札束を積み上げていった。山本は、目の前に展開されてゆく光景にだた、口を開けて見入っていた。

「さあ〜て。そんじゃあ、始めるとするか」

「な、何を……？」

「お絵かきさ」

「お、お絵かき……？」

郷原は再びソファに座ると、ノートパソコンを目の前に置いて山本を見据えた。

「そう……。もしも、絶対に外れない占いがあったとしたら、山本先生は俺に、何を聞きたい……？」

「あ、あなたに……？ 聞きたいこと……？」

「そうだ」

「郷原の力は、今見た通りです山本先生。この男は、女神に心底惚れられている……。予言の女神に愛された、天才占星術師……。あなたの聞きたいことを素直に聞いてみたらどうです」

「ぼ、僕の、聞きたいこと……」

山本は、震えながら口を開いた。

「僕を騙した近藤学という男は、今、ど、どこへ……？」

「探してどうする」

郷原は、微笑んだ。

「さ、探して、訴える……！ カネを返して欲しい、許せない……！」

「ふーん……」

郷原は、左腕のロレックスに眼をやると、今この瞬間の時刻のメモを取った。そこから、この瞬間の星の位置を割り出す。占星術というのは、“時空を切り取る”占いであると言ってもいい。質問が出た瞬間の時刻、その場所の緯度・経度から、星の位置を割り出すことができれば、ほぼオールマイティに、何でも予測の材料にすることが出来るのだ。だから、熟練した占星術師というのは、郷原のように、常に正確な時計を身につけているものである。いつでも、占いのための時空を切り取れるように――。

描き出した星を見ると、質問の対象者を表示する星が、逆行し、赤道面からだいぶ南緯に下がっている。これは目的の人物が、二度と山本の前には現れないことを意味する配置だ。

（しかし、何だ……？ 姿は現れないが、この近藤という男は、もっと別の何かに、繋がっているような感じがする……。問題の星の黄経度は、136度付近か……。子どもに関したこと……。赤ん坊……。山本自身は、産婦人科医だと言ったな……。この辺りに何か、接点があるのかも知れないが、これでは、近藤からカネを絞り取るのは、無理そうだ……。さて、どうするかな……）

爪楊枝をしきりと噛んで、そんな風に推理する郷原だった。

「……自称、ファインメディカル社長の近藤なら、諦めろ。こいつは警察に捕まるようなタマじゃない。逮捕はされることはないだろうな。組織もバックについている」

「……………」

山本は、固まってしまった。ひと呼吸おいて、パソコンの画面を凝視する郷原の眼が、細く、険しくなった。よく星の配置を眺めてみると、見逃してしまいそうな微細な部分に、死相のようなものが浮かんでいることに、郷原は気がついた。

「なんだ、タマを狙われてる可能性があるな、この近藤って男……」

「タマを、狙われてる？」

川嶋が好奇心で、つい覗き込む。

「ああ……。刃物や、ピストルを表示する星の配置が、妙にたくさん出てくる……。天王星、火星、土星ね。おっかない星だらけ……。死に怯えた心……。しかしまどろっこしいなどうも。こんなヤツのことなんか、どうでもいい……。所詮は、もはや手の届かない場所にいる男だ」

郷原は、左腕に常に嵌めているロレックス、エクスプローラーIIのストップウォッチ機能を押すと、耳に押し当てて山本を見た。

「俺の質問に答えろ」

「し、質問……？」

「もしも第三者に、すべての借金をなすりつけられる方法があるのだとしたらどうする？」

山本の瞳孔が、一瞬大きく引き絞られた。

「しかも上手く行けば、借金がチャラになるばかりか、プラスにすることすらできるかも知れない、そんな方法があるのだとしたら、どうする……？他人に泣いてもらうか、それとも、やっぱり自分が苦しむのか……。あんたはどちらを選ぶ……。山本先生……」

「あ……、あう……、うう……」

静かに、郷原は眼鏡を外す。山本は口を開けたまま動揺して震えた。金縛りにあったように、郷原の眼に魅入られてしまった。長く垂らされた前髪の間から、射抜くように覗く、郷原の瞳……。奥二重の切れ長な双眸と、形の良い濃い眉が、独特の催眠効果を発揮しながら山本に迫った。

しばらく静かな緊張が、場を支配していた。何秒、何十秒、経過しただろうか。心を丸裸にする郷原の視線の前で山本は、必死に平静を装ったが、自分では気づかないところで、郷原に本心を告げていた。瞳孔が、さきほどから大きく絞られている。呼吸のリズムが、少し緩やかになっている。乾ききっていた唇に、うるおいが戻る。瞬きの回数が増える。

山本の全身が、自分の投げた質問に対して、希望的反応をしているのを、間違いなく確認した郷原は、笑い出した。

「なるほどね。自分と愛する親、女房子どもが助かるためなら、他人などどうなっても構わないと、そういうことですか先生。ははは……！ 正直な人だ……！ はっはっはっは！！」

山本は、高笑いする郷原を前に、完全な敗北感を覚えて唇をかみ締めると、膝の上に置いたままの握りこぶしに、一段と力を込めた。

「なら、奪い取ってみろよ……。殺すぐらいの覚悟でな。その覚悟があるなら、いいでしょう。そのための舞台にご案内して差し上げましょう。山本先生のリクエストに答えて、借金をチャラにできるチャンスを演出してやろうじゃないの。ただし……」

郷原はそう言うと、ソファから立ち上がって、山本の目の前に対峙した。背の高い郷原の影が、緊張と屈辱でちぢこまっている山本を覆った。

「それをして欲しければ、ここにある3000万でこの俺を雇え」

「なっ……！！」

「このカネで、俺に正式に仕事を依頼するなら、アンタの借金をチャラにできる可能性を作り出してやる。場合によっては、アンタの作った借金より、さらに奪い取れるかも知れない状況をな……。何もかも、元通りになれるチャンスを……。憎い相手に連なるヤツらに、復讐できるチャンスを……」

「う……、ううう……！」

山本の歯が、ガチガチと鳴っている。

「まさか、俺がボランティアで、そんなこと考えてやるとでも思った？ 俺は占い師だぜ？ これは鑑定料だ。さあ、どうする……」

郷原は、山本の鼻先に、顔を近づけた。山本は歯を鳴らして、涙目になっている。もう言葉を発することも出来ない。

「なんだ、ビビって声も出ねえのか。ケツ、仕方がないな……」

郷原は、山本の鼻先を覗き込むようにしていた上体を起こした。

「おい浜崎」

「は、はい……！ なんでしょう、郷原先生……！！」

「借用書持って来い。山本亮一先生、さらに3000万円お借り入れだ」

「は、はい！！」

普段から氣勢を張っているホスト上がりの浜崎慎吾も、郷原が持つ独特の雰囲気、すっかり気圧されて、青ざめていた。殴る蹴るといった暴力とは違う、身に纏った空気だけで、相手を制圧してしまう存在感——。それを郷原は持っている。

「さあ……。それに、サインしていただけますでしょうか、山本先生……。どうせあなた、借金返すまでここから出られないわけだし。出たとたんに、街金連中が襲い掛かってくるからな、クク……」

「う……。うう～……」

山本は歯を食いしばり、暗示に必死に抵抗しようとしていた。少し離れたところにいた川嶋貢が、山本の側へ寄ってきた。

「山本先生……。恐れることはありません。郷原はこうして、恨みのこもったカネで、自分自身を追い詰めるのです……。郷原は、命を削り、ときには自分の血を流して、予言の神にお伺いを立てる……。聞くほうも当然、死ぬ覚悟で占いに向き合わないとならない。そうして占うほう、尋ねるほうの双方が、命を極限に追い込んだとき、始めて神の領域に到達できる……。命の軋まない、何のリスクもない、子どもの遊びみたいな生ぬるい鑑定料で、占いなんかしたところで、神の声が聞こえたとでも……？」

川嶋貢が、山本亮一の肩越しに、悪魔の囁きをする。郷原は、冷ややかな薄笑いを浮かべて、鋭い視線を山本に向ける。山本は、考えようとしたが、抵抗のための言葉が何も思い浮かばなかった。手元のペンと用紙を見つめるしかできないでいた。

郷原の、眼を見るのが怖い……。魂を絡め取るような、吸い込まれそうな、その眼……。
(ホテルに連れ込まれて、1対3で囲まれた時点でもう、こうなることは目に見えていたじゃないか！ こんな、ヤクザの常套手段だ……。なのに僕は、のこのこと……。自分が情けない……。情けなさすぎる…！！)

「クソっ……。……クソおっ……。！！」

膝の上に作られた、山本の握り拳が、激しくぶるぶると打ち震えて、肩が、わなわなと揺れ始めた。

「うわあ……。！！」

山本は、涙を流しながら、やおらペンを取った。3000万円の借用書に、殴りつけるように、ペンを振りかざしてゆく。まるで呪いの言葉のような、恨みがたっぷりと含まれた文字が、借用書の欄を埋め尽くしていった。

「これで満足か郷原っ……。！！ これでっ……。！！！」

山本は、涙が流れるままの顔を、郷原に向けると、怒りに任せて借用書を突き出した。郷原は、それを静かに受け取った。

「……いいだろう。これで、正式に仕事を請け負った。山本先生のためにいい絵を描いてやろうじゃねえか……。いい絵をな……」

「やはり、例の賭博か？ 郷原」

川嶋が、郷原に視線を送る。

「そういうことになるね。山本先生の参加は決定だな、これで」

「対戦相手は？」

「それを、これから占う。山本先生の対戦相手として、誰がふさわしいのか……。星が教えてくれるだろうよ……」

郷原は、そう言うと、手帳と万年筆を手元に引き寄せて、再び山本を見た。

「あんたがカネをむしり取れそうなターゲットを、これから選定してゆく。あんたの女房の親族、世話になった先輩医師、成功している同僚、学生時代の友人知人、知っている限りの人間の、生年月日を教えろ。そこから絵を描く……。下絵をな……」

「僕の、知っている限りの人間の、生年月日……？」

「そう……。あんたの借金をチャラにできる人間……。それがあんたの知り合いの中に、いるかも知れない。誰と誰を結び付け、誰を揺さぶればいいのか、誰が、どんな秘密を持っているのか……。それを一から洗い出す……。あんたの知り合いで足りなければ、世間の他の人間も調べてゆく。とにかく、いろんな材料を持ち寄って、どんな料理にするか決めてゆくのさ。理想はもちろん、近藤学本人を炙り出すことだが、それ以外にも、ムシり取れそうな人間がいたらそいつに的を絞る。借金を返したければ、とにかく教えろ」

「あ……。う……」

山本は、ここまでの息詰まるやり取りに、神経がかなり磨耗していて、思考能力が麻痺していた。完全に郷原に支配されて、知っている限りの情報を、しゃべってしまっていた。

生年月日を思い出せない人物は、名前や経歴、勤務先などを郷原に話した。郷原はそれを、インターネットを駆使して調べ、わからないものは先ほどの名簿屋、永森に照会していった。

山本の知人や友人はみんな、医者や薬品メーカーの社員、弁護士、法人の代表など、身元を調べやすい人間ばかりだったから、生年月日を探し出すのは簡単だった。永森が死に物狂いで集めた、有名大学の卒業名簿や、法人名簿などが絶大な威力を発揮する。

郷原は、次第に集まってくるそれらのデータを、ノートパソコンにすべて打ち込んで、山本の関係者たちの星を調べていった。

2、

その昔、呪術が横行していた時代、生まれた年月日、時刻、本名などは、うかつに知られてはならないものだった。それを知られると弱味を探られ、呪いをかけられてしまうからである。

昔は洋の東西を問わず、権力者には多くの場合、お抱えの占星術師がいた。三国志に登場する諸葛孔明や、平安時代後期、一条天皇に仕えた安倍晴明、唐へ留学した空海などはみな、優れた占星術師だったと言われている。

しかし、占いを歴史的観点から眺めてみれば、それは常に特権階級のものであった。歴史上に登場する占星術師たちも、すべては権力に近い者たちである。もともとが占いというのは、選ばれた階級のためのものであり、それ故にその根底には根深い選民思想、差別的人間観が含まれている。有名人は運が大きくて、庶民は運が小さいというような、差別的な言論が多く占いの所見

に見られるのは、占い理論自体がもともと、差別主義だからだ。

だから、昨今のオカルトブームで、ごく普通の人が占いに夢中になるのは危ない。本人にその気がなくとも、差別的な人間の見方が刷り込まれてしまう。

しかし、昔の王侯貴族とか、現代だと財務整理や身辺整理しなければ死ねないような人間には、占い師という職業の人間が必須でもある。彼らは自分の判断ミスで多くの人間が路頭に迷い、自然を破壊し、争いを起こして、死なせてしまうことすらあるのだから。

その責任の重さを一人で抱え込むのは、耐え難い孤独であろう。だから占い師という、悪と欺瞞を覚悟したヤクザ者が、大昔から歴史の裏で、その責任をいくらか、受け持ってやってきた。

それが本物の占い師の仕事なのである。決して、占い雑誌の原稿を書いたり、占いの館で普通の人を占うのが仕事ではなくて、もっと業の深い、薄汚い、マトモな神経の人間には行えないシノギだ。

そして、社会的責任の重い人間の相談役であるためには、あらゆる世事に通じ、この世の裏を知っておく必要がある。郷原悟が天才の異名を持ち、数百万、数千万の鑑定料をむしり取れるのは、少年時代から体で覚えてきた社会の汚さ、人間の普遍的本質という、圧倒的リアリティで占いを眺めているからこそなのだ。

“占”は裏”……。だから、占いや神秘に手を染めた者はみな、知らず知らずに日陰者の、目つきの悪い人間になってゆく。占いだとか神秘なんて、テレビや雑誌が書き立てるほど、いいもんじゃない。ヤクザ者でなければ、こんなシノギは到底できないのだ。

占い師などという突き抜けた外道、悪党に、生年月日を知られることは、あらゆる弱点を読まれること……。連中に、付け入る隙を与えてしまうこと……。だからゆめゆめ、うかつに口にしてはならない。郷原に占いの読み方を叩き込んだ男の、口癖である。

郷原は、爪楊枝を噛みながら、黙々と山本の関係者の星を描き出していった。4人の男が何の会話もせず、じっと座っている時間が続く。山本はこの隙に、ここから逃げる手立てはないかと考えようとしたが、疲労のせいで先ほどから、頭がどうにも働かなかった。

郷原はひたすら、爪楊枝をもぐもぐ噛んで、パソコンの画面を睨み、暦を繰り、そして時折メモを書くばかりだ。短い間にいろんなことが起こって、混乱していた山本は、逃げ出したい気持ちとは裏腹に、いつの間にかこくりこくりと、ソファにもたれて眠りに落ちていった。

2時間ほど、そんな時間が続いたが、黙々と星を描いていた郷原の手が、一瞬止まった。

星々が示すその人物の人間性——。妙に、ひっかかる——。

(なんだこいつは……。妙に楽天的で、理想主義者的な性向を思わせる配置……。こういう性向の持ち主は、ともすると個人的利得を超えて、強い感情を持ちやすい。もし、このタイプが犯罪などをするならば、似合うのは正義のための悪だ……。炙ってみたら案外、そんなものが出てきそうな人物だ……。星を透かして、そんな人物像を感じる——)

「こいつはいったい、誰なんだ？」

郷原は、爪楊枝を噛み締めて、山本を見た。その声に山本はハッとして、しばしばと、眠気と消耗に萎んだ目を上げると、星の位置が描かれた郷原のパソコン画面を、重い腰を上げて覗いた。

「ああ……。その人は、僕がお世話になっているNPO法人の、理事長さんですよ」

「NPO法人の、理事長……？」

「ええ。児童福祉や、母子福祉などの社会活動をしているNPOです。でも、その人を調べたからって、何も出て来ないと思います。とてもちゃんとした人ですから。我々医療側の人間は、大なり小なりその人に助けられている……。その人は、そういう人なんです」

(この男、妙に引っかかる……)

「NPO法人と言ったな。なんという名前なんだ」

「あ……、まさか、郷原さん……、この人に僕の借金を……？」

不安そうに山本は、郷原のほうへと身を乗り出した。

「さあ……。それはどうだかね。やましいことが無いんだったら、別に聞いたって構わないだろ？ 会社の名前くらい。それとも、そんなに大事な人なのか？ まさか、アンタの恋人……？」

「そ、そんなんじゃ……！ ワールド里親協会、という法人です。その人の名前は、池田史郎さん……。昔、厚生労働省にいた人で、福祉関連の任に当たっていました。そのときに、乳幼児の人権保護活動の重要性を感じたそうで、私財を投げ打って里親協会を立ち上げた人なんです。すごく立派な、尊敬できる人ですよ」

「ふーん……」

(何だ……？ 何か無性に、引っかかる、この男……。山本の今の口ぶり……。この男に心酔しているかのようだ……)

しかしまだ、運命の流れの全体像が見えて来ない。いかなる運が交錯して、山本にこのような苦しみを与えたのか。

(運なんてものは、確かに1割は予測不能な天の配剤だが、残りの9割はすべて、人の思惑……。この世のほとんどは、人間の、あるいは、人間の集合体の思惑で動いている。だとするならば、山本を追い込んだ運の正体、それも必ず誰かの思惑であるはず……。意図的だったか、偶然だったかはともかくとして、誰かの意志が働いている……。それがまだ、見えてこない……)

こういう風に占いが行き詰まった場合、視点を切り替えて、個人ではなく、事件全体を俯瞰するアプローチをしてみると、案外突破口が見つかったりするものだ。

郷原は、左腕のロレックスに眼をやった。時間を、逆算してみる……。その時とはすなわち、山本が、借用書にペンを走らせた時刻……。場所は、このホテルのある緯度と経度……。その交わりによって算出される星々の位置が、神秘の糸を紡ぐのだ。あの瞬間こそ、郷原にとって、この件との関わり合いが発生した瞬間なのだから。

あの時刻……。今からそう、だいたい2時間と20分ほど前だった、確か……。

逆算した時間と、このホテルの緯度経度から、あのときの星の位置を計算する。描き出された星々は、ずいぶんと地平線の東側に集中していた。

(地平線上より約20度か……。ここに集中する星……。ここは、隠蔽性、匿名性の強い何かを示す部位……。隠蔽性と匿名性……。そこから連想されるもの……。そう、たとえば……。インターネットのような……)

郷原は、爪楊枝を強く噛み締めながら眼を閉じた。何か郷原の脳細胞の中に閃こうとしている。意識を、額に集中させる――。

(インターネット……。隠される何か……。隠す？ 何を……？)

犬歯の辺りで噛み締めている爪楊枝が、ギリギリと音を立ててよじれてゆく。強く、深く、意識を集中させる——。さらなる連想を紡いでゆくために——。

ハッと閃いたように郷原は、突然目を開けると、宙の一点を見つめたまま呟いた。

「トロピカル信販……」

郷原の占いを、少し離れたところで見っていた川嶋が、そのつぶやきに反応した。こくりこくりと船を漕ぎ始めていた山本も、ハッとして、我に返った。

「トロピカル信販？ そこに、何があるっていうんだ、郷原」

「俺の占いが正しければ、トロピカル信販を語った何者かの実態は、口座屋かも知れない」

「口座屋？」

「そう。要するに、マネー・ロンダリング」

「マネー・ロンダリング？」

山本が、憔悴しきった顔で、二人の話を聞いていた。

「星が、そう指し示している……。何かを隠すためのアイテム……。それらの販売……。山本さん、アンタが詐欺に遭ったファインメディカルだけど……」

郷原は、ソファから身を起こして、山本のほうを向いた。

「そもそも、ファインメディカルは自前の信販会社を持っている」

「自前の信販会社……？」

川嶋が、首をかしげてオウム返しをする。

「ああ。つまり、ファインの製品なんだから、本来ならファインのグループ企業の信販会社が決済を請け負うのが普通だってこと。たぶん、トロピカル信販を語った謎の組織は、いろんなくさい物品販売のローンの、窓口をしている……。そして、契約者に振込みのための、専用口座を作らせるんだ。山本さん、アンタ、近藤と契約したとき、トロピカル信販だという連中から、支払い専用口座を開設するよう言われなかった？」

「い、言われました！ 変だなんて思ったけど、ローン支払いの専用口座を持っていたほうが、確定申告するときとか、監査されるとき、税金の控除がスムーズに行くからと、そう言われて……」

「やっぱりな。たぶんその口座、ローンの支払いが滞ってきたところで、ローン契約をチャラにしてやるから寄越せとか、貸せとか、そんなことを言うんだらう。そして、もっと悪いカネを洗浄するのに使う……。犯罪で得たカネを、いくつかの口座に入れて自分が持っておく。そこから、メインで使っている口座へ少しずつ入金して、溶け込ませていくのさ……。犯罪で得たカネは、起訴されて裁判で有罪が確定すると、証拠物として没収されちまうからな。だから悪い奴らは、ムショから出てきたときに、カネが使える状態にしておく。それがマネー・ロンダリングだ。トロピカル信販を語った何者かの正体は恐らく、それを専門に高値で売買する組織……。近藤は、山本先生を信用させて、有り金巻き上げるために、どうしてもリース契約の契約書を見せる必要があった。しかし、悠長にファインの子会社の契約書を捏造する時間がなくて、知り合いの詐欺集団にでも、一芝居打ってもらったんだらう。近藤に協力した連中は、何か別の理由で、とにかく誰かの銀行口座と、通帳、キャッシュカードが欲しかった。それでたぶん、芝居のついでに

、山本先生に口座を作れと言ったに違いない……。あとでそれを高値で転売するために——。あるいは、自分たちで利用するために……」

山本も、川嶋も、遠くで聞いている浜崎まで、郷原の推察力に驚いていた。確かにそう考えると、いろんなことでつじつまが合う気がする。

「その口座、どうなったんだ？ 結局……」

川嶋がタバコの煙を吐き出しながら、山本のほうを向いた。山本は蠟のように真っ白になって、目を剥くと、抑揚のない声を出した。

「は、はい……。近藤がいなくなって、警察に詐欺被害を訴えた直後、捜査2課の刑事だという男が現れて、捜査の手がかりのために、その通帳と印鑑、キャッシュカードをしばらく貸してくれと……。だから僕は……。その……」

「んで、渡したのか……。とことん、騙されやすいタイプだな、アンタ。少しは人を疑うことを覚えたほうがいいぜ？ ククク……」

郷原は、またヘネシーをグラスに注ぐと、美味そうにひと口飲んで笑った。山本はただ青ざめて、拳を握るだけだった。

「んで、そいつらをどうやって、賭博にハマるんだ？ 郷原……」

川嶋が、話を先に進める。

「この謎の組織から裏口座を買っている連中を、どうにかして炙り出す」

「裏口座を、買っている人間？」

「ああ。裏口座を買うってことは、出所の明かせないカネを、たくさん持っている連中だっのでは確実だろ？ この組織を調査していけば、恐らく、ある連中に行き当たるはずだ」

「ある連中……？」

山本が、疲れ果てた顔で呟いていた。

「ああ。スネに傷持つヤツらさ。警察に突き出されるのが、何よりも怖いヤツら……。そして、あくどいことで作ったカネを、マネー・ロンダリングして確実に持っている人間。そんな人間が必ずいると、星が俺に教えている。それを探し出す……」

川嶋は、そうつぶやく郷原を見ながら、紫煙を静かに吐き出した。

「田代を、呼ぶのか……？」

「そうだな、田代のおっちゃんの出番だな……」

郷原はそう言うと、左腕のロレックスに眼をやった。現在時刻は明け方4時を回ったところだ。郷原と川嶋、平安ファイナンスの闇のエージェント、田代英明に動いてもらうには、まだずいぶん早い。世の中が動き出す頃にならないと、田代も調査できないだろう。

「とりあえず、仮眠でも取るか。山本先生、もういい、あんたは少し眠れ。浜崎も疲れただろ？ ベッドは奥の部屋にもあるから、二人とも休んでくれ」

川嶋はとりあえず、疲労困憊してぐったりしている山本をベッドに連れていくと、眠らせてやることにした。今の山本は、例のゲームの正式な参加者となったのだ。これからはコントロールしながら、接していかなければならないだろう。

山本の両親は早々に、川嶋の部下たちによって、伊豆の国民宿舎の飯場へと転居させる予定だったが、それも夜が明けてからでいいだろう。山本をベッドで休ませてから、川嶋がリビング

に戻ってくると、郷原は、ソファに横になり、眼鏡を外して、右腕を眼の上に載せていた。郷原もまた、かなり神経を酷使したようである。いつも占いが終わると、郷原は大体ぐったりしている。

（よほど消耗するんだろうな。星を読むという行為は……。無理もない、あの寒気のするような推理だ……。異常な集中力だというのは、見ていてわかる……）

不意に、川嶋の胸の携帯電話が振動を始めた。

「……………」

3、

部下からだと思って慌てて携帯を開くと、電話ではなくてメールだった。メールの相手は、川嶋の長年の愛人久子からだ。久子は、ひとり新宿でスナックを営んでいるママさんである。いつも深夜12時に店を終えて、後片付けをして、自宅に帰って風呂や食事などを済ませると、だいたい寝るのが朝方という生活をしているから、こんな時間のメールも珍しくない。

「……犬？犬がどうしたって？」

川嶋の愛人久子は、40をとうに越えた今でも、どことなく無邪気さのある女だった。用件だけを書けばよいのに、余計なことまで書いて寄越すのは、女という生き物に特有の習性だな、と、川嶋は思いながらメールに眼を通して、眠りかかっている郷原を揺すった。

「おい、郷原……。久子からメールだぞ。深雪ちゃんの請求書が来たって。早急に払えってことみたいだ。すぐ病院に行ってやれ」

「んあー……。請求書？ ああ、そうか。もうそんな時期……。わかった。そのうち顔を出して、久子ママに伝えておいて」

そういうと、そっけなく郷原は、川嶋に背中を向けた。よほど疲れているようだ。

川嶋はそれを見ると、浜崎が寝転がっているベッドルームに行って、毛布を取って返し、郷原の体が冷えないよう、それを全身に優しくかけてやった。

（お前と俺との付き合いも、もう15年以上になるんだな、郷原……。お前がいなければ俺は、あのと時のまま、今だにしがたいパチンコ屋の店員で、兄貴連中にこき使われるだけの存在だったかも知れない……。本当に感謝している……。しかし……）

川嶋は心配だった。この郷原の消耗ぶり――。

これが占い賭博本番ともなると、もっとずっと過酷だった。なにせ郷原は、命を曝け出さねばならないのだ。占いを外すことは、占い賭博の賭場では、死を意味するのだから。いや、死ななくても、相手に望まれるままを郷原は、自分の占いに賭けてみせねばならないのだった。

そうまでしないと、ウソや欺瞞を激しく嫌う闇社会の連中たちは、占いなど信用しはしない。奴らが知りたいのは、つまらない人生相談とか、自分探しなどではなく、自分を捜査する警察の動き……。競馬の勝ち馬……。株の売り目と買い目……。誰がいつ、誰とどこで、密談をするのかということ……。

この連中に、おためごかしは一切通用しない。当たるのか、外れるのかだけだ。だから信じてもらうためには、自分の占いに命を賭けるしかない。そういうスタイルでなければ、この闇社会で認められ、権力を掴むことは出来ない――。

郷原悟は、そうやって修羅をくぐり抜けて来た男だった。川嶋貢はただ、最初に郷原をこの世界に世話してやった兄貴分というだけで、一目置かれる存在になり、郷原の力でここまで来たのだとわかっていた。。

（俺は、お前がいつか破滅するかも知れないと思いながら、上からの命令に逆らえなくて、いつも占い賭博をけしかける……。そんな自分が、情けねえ……）

郷原が仕掛ける占い賭博——。それがもたらす膨大なテラ銭と、好奇心でそこに集まる政財界の人間たちの秘密が、結局は川嶋と平安ファイナンス、ひいては寺本組と、その大本である関東報勝会を強固なものにしている。

（親父や本家が、ここまでのシノギに育った郷原を、簡単に手放すだろうか……。今や郷原は、寺本組と関東報勝会にとってのドル箱……。金看板……。そこから救い出してやるためには、俺は……）

そう思う川嶋だったが、それと同時に別の声も胸にあがってきて、思わず首を振った。

（いや、わからない。郷原自身はどう思っているのか……。俺が不安なのはこの眼だ。占いをしているときの、こいつの眼……。自分が敗れ、滅びる狂気に、たまらない快感を覚えているような、あの突き抜けた眼の光……。郷原はもしかしたら……。俺には理解できないような、とんでもないことを望んでいる——？）

川嶋は一瞬の自分の予感に、また首を振って、胸の内の不安を払い落とすと、郷原が寒くないよう、空調を調節してリビングの照明を落とした。夜が明けたら、いよいよ本格的に調査開始である。自分も少し休んで、体力を回復させることにした。

1、

「おい！ 直人、起きろよ。もう6時半だぞ？朝練あるんだろ？」

「ん……。んん～……」

田代英明は、ピンクのエプロン姿のまま、台所で弁当を詰めていた。チン、と音がして、トーストが飛び出す。田代はそれを皿に載せると、牛乳とジャムと一緒に、テーブルの上に並べた。

今日の弁当はシャケの焼いたのと、無骨な卵焼きと、冷凍のシューマイだった。卵焼きがどうも上手に作れなくて、タッパーからはみだしている。

「おい直人、起きろってば！ 練習に間に合わなくなるぞ？せっかく今度の試合で、ベンチに入れてもらえるかも知れないんだろ？ がんばって起きろよお」

「んあ～……、眠い……」

田代の息子の、直人である。直人は眠い目をこすりながら布団から這い出すと、とりあえず食卓に着いた。

「うげ～、またシャケえ？ ワンパターンじゃねえかよー」

「しょーがねえだろ。父ちゃん、料理できねえんだもん……。動き回って腹が減りゃあ、おいしく食べられるって」

「まあいいけど……。婆ちゃん、早く帰って来ないかなあ……。毎日、父ちゃんの料理じゃよお……」

「そう言うなってえ。そのうち上手くなるさ、料理も。要は慣れだ慣れ。婆ちゃんも、リハビリが済んだら退院してくるからさ。な？」

直人は、じと目で父親を見た。ピンクのエプロンが、妙にプライドのない感じを演出している。第一線で働いていた刑事だった頃の父の、かっこよかった姿を思い出すと、ちょっと情けない気持ちになった。

「あー、もう行かなきゃ……。ユニフォーム、ユニフォーム」

「そこに洗濯してあるぞ？」

直人は、パンをひと口だけ牛乳で流し込んで、着替えると、歯磨きと洗面をササッと済ませた。そしてスポーツバッグに、赤いユニフォームとスパイク、タオル、田代が作ったシャケ弁当などを入れて、行って来ますとボソツという、そのまま出て行ってしまった。

「やれやれ……。アイツも反抗期だなあ……」

田代はつぶやいて、ピンクのエプロン姿のまま、直人の食べ残したトーストをかじった。

田代英明はついこの前まで、警視庁新宿署の敏腕刑事だった男だ。それが今は、郷原悟と平安ファイナンスのエージェントをやっている。郷原が占いで導き出した秘密を調査したり、相手の弱みを握るための裏工作をしたりするのが、今の田代の仕事だ。

田代が刑事から、この世界へと転身した原因は、やはり占い賭博だった。その頃田代は、職務上でのやむを得ない付き合いが原因で、とある詐欺師と不適切な間柄になっていた。田代の母親が、手伝いのおばさんと二人、細々と営んでいた、中野の実家の製麺屋も大変な事態になっており、気がつけば数千万の負債ができていた。

川嶋は川嶋で、田代とツルんでいた詐欺師に融資の漁場を荒らされていたし、郷原は郷原で、地震予知が出来るという大予言者と戦っていた。

この3つの軸が次第に絡んで、ついに過激な流血オカルトゲーム、「人間占い神経衰弱」になっていくのだが、そのとき田代は最後、大逆転のチャンスというところでカネが尽きたため、なんと自らの命を賭けるという愚挙に出たのである。

そして見事に大負けし、そのせいで郷原の下僕として、一生働くことになったのだった。もちろん、警察もクビになった。田代は今、残っている借金の返済のために、息子の直人と自分の母親とで、6畳2間の木造ボロアパートに暮らし、ときどき新聞の勧誘員をしながら、なんとか食いつないでいる。

挙句に、貧乏になった田代をみるや、数年連れ添ったフィリピン人の女房は、勝手に本国へと帰ってしまうし、母親は母親で、膝を痛めて入院する始末。

そんなわけで今の田代家は、父と息子の寂しい男所帯であった。

(直人もこの春には中学生だ……。そろそろ、塾とか家庭教師とか、考えないとなあ……)

裏返しになったままの直人の靴下を、干すためにひっくり返ししながら、田代はそんなことを考えた。

その時だ。エプロンのポケットに入れてあった携帯電話が、けたたましく鳴り出した。

「うあ……！」

田代は慌ててその電話に出た。郷原からである。

「よお、おっちゃん、朝早くに悪いな。直人は？」

「直人ならもう出かけたよ。もうすぐサッカーの試合なんだとさ。こんな時間から朝練に行ったよ」

「ふーん……。そうか。頑張ってるじゃん直人。ところでおっちゃん、あの一件以来カツカツなんだろ？ 直人の学費なんかは足りてるのか？」

「まあどうにか。元は敵だった刑事の俺に、郷ちゃんや川嶋さんが仕事をくれるおかげで、ぼちぼち借金も返せてる。今日も調査の依頼かい？ 郷ちゃんのためなら俺、一生懸命働くからさ。何でも言ってくれ」

田代はそう言うと、携帯電話をハンズフリーにして、メモを取る体勢になった。郷原の低い、淡々とした声が室内に響く。

「ああ。それじゃあ頼む。まず一つ目は、目黒にある“しらゆりテレフォンサービス”という会社へ行って、03—xx—xxxx—△△△△という電話番号を利用していただいた顧客を、特に今から1年半ほどの間に絞って、調査してきて欲しいということ」

「うんうん」

「もう一つは、その電話番号を使っていた業者や個人を特定できたら、その所在地も調べておいて欲しいということ。できれば早急に知りたい。今言った二つを調べるのに、どのくらいかかる？」

「ん～……、そうだな。午前中でなんとか」

「わかった。んじゃあ、昼頃落ち合おう」

「りよ、了解っ！」

田代は電話を切った。それから、出かける支度をした。コットンツイルの白いパンツに、グレーのハイネックセーターを着て、茶色いパーカーを羽織る。少し離れた月極駐車場に置いてある10年落ちの車、ホンダ・シビックに乗り込むと、まずはしらゆりテレフォンサービスのある、目黒を目指す田代だった。

2、

午前8時を回った。

新橋ダイヤモンドパレスホテルの高層階スイートルームで夜を明かした4人は、ほんの3、4時間休んだだけで、すぐに次の行動へと移っていった。

山本の両親を今日中に、しかもできるだけ早い時間に、伊豆にある川嶋の知り合いの、国民宿舎の寮へと引っ越させなければならない。山本亮一を自分たちの思うままに操るための、いわば人質だ。

川嶋と浜崎は、朝早く山本亮一を連れて、部屋を出て行くと、山本の自宅ビルへと向かった。そこで山本と両親を引き合わせ、山本の口から、自分は別行動に出るから心配しないで欲しいと言わせる必要がある。そうでないと、いざこじれたときに面倒なのだ。

それが済んだら、浜崎と山本のみ、再びここへ戻ってくる。川嶋は社長業と組の仕事で多忙な身であるから、そうそうこの件にばかりも関わってられない。後は浜崎に、山本の管理を任せることになっていた。

郷原は、ろくに眠らないまま身を起こすと、ホテルの室内のバスルームへと向かい、熱いシャワーを浴びた。そしてスーツにトレンチコート、黒い革靴に眼鏡といういつもの服装に身を包むと、ホテルの地下駐車場に預けてあった、イエローカラーの愛車、ランボルギーニ・ムルシエラゴに乗り込んだ。

郷原は、ホテルを転々として暮らしていた。そのたびに、車も移動させる。ランボルギーニ・ムルシエラゴは、新車で買うと4～5千万円はする超高級車だ。

シートにもたれ、イグニッション・キーを回す。ゴボォッ……、と、待ちかねた野獣のようにエンジンが目覚め、主人の郷原に呼応して喉を鳴らした。セミオートマティックのシフトレバーを、ローにチェンジして、アクセルを踏み込む。

薄暗いホテルの駐車場を抜けると、そこはもう物流トラックが絶え間なく流れ、ダイナミックにこの国の人と経済が躍動する、東京の喧騒の中だ。ステアリングを横浜方面に向ける。

まずは、山本亮一を騙した近藤学という男が、まんまと山本からカネをせしめてとんずらするまで事務所を置いていたらしい、横浜・関内のKYマンション、302号室を目指した。

今日は比較的道路が空いている。ものの30分程度で横浜に着いた。手帳にメモしてきた住所を頼りに探すと、確かに、デパートの裏手の路地に、ひっそりとした青い外壁のマンションがある。

「ここがKYマンション……？なんか、貧乏くせえところだな」

KYマンションは、繁華街の路地裏の、いかにも狭間にあるような、入り口の狭まった構造をしていた。ファミリー用ではなくて、独身ばかりが住んでいそうな雰囲気のマansionだ。

入り口は、格子状に銅線の入ったガラスの扉だった。そこを開けるとすぐ右に、全部屋の集合ポストが置かれている。いくつかのポストからは、ピザとか、宅配寿司、ピンクチラシなどが溢れ返っている。部屋数は各階に4室、それが3階までだから、全部で12部屋である。

302号室のポストには、チラシが溢れ返っていた。

(今は無人なのか——?)

郷原が、302号室のポストから溢れ返ったチラシ類を見ていると、スーツの上にコートを羽織った若い男がやってきた。

(ここの住人——?)

「すみません、ご出勤途中に呼び止めて……。私、社宅用の借り上げマンションを探しておりまして。ここの大家さんか、管理会社をご存知じゃありませんか？」

郷原にすれ違いざま、声をかけられた若い男性は、急いでいる風に歩きながら言った。

「……大家さんなら、その商店街にある“村田”というお肉屋さんですよ。すぐにわかると思います」

「そうですか、ありがとうございました」

狭い通路なので、郷原は、若いサラリーマンを通すために、ポストのほうへ一歩下がった。若い男はそのまま、入り口のガラス戸を出ていった。

郷原は一応、302号室の前まで行ってみた。電気のメーターは止まっていて、ドアの新聞受けには、新しい入居者のための電気・ガス・水道の開設案内が挟まっている。近藤の痕跡は何もない。

さっきのサラリーマンに聞いた通り、郷原はそのまま近くの商店街へ向かうと、村田という名前の肉屋を探した。

すぐに見つかった。わりと大きな、立派な店だ。ちょっとしたスーパーのようである。自動扉を入ると、突き当たりが精肉のショーケースになっていて、パートらしき三角巾をつけた中年女性や、初老の男性がお惣菜を作っていた。

「はい、お兄さん、何あげましょう？」

ショーケースの向こうの調理台で、ひき肉を捏ねていた女性が、郷原に声をかけた。

「ああ、すみません、ちょっとそのKYマンションのことで……」

「KYマンション？ 社長！ なんかマンションのことだってよ！」

女性が大声を出すと、奥にいて肉をスライス機で切っていた初老の男性が、手を拭きながら出てきた。

「ああ、お忙しいところすみません……。ちょっとあの、KYマンションのことで聞きたいことがあるんですけど……」

「ん～？ おたく、どちらさん？」

男性は、いかにも気さくな、商店街の社長という感じで、明るい笑顔のまま、郷原の前のショーケースから、顔を乗り出した。

郷原は、肉屋の社長に自分の名刺を差し出した。名刺は【株式会社 平安ファイナンス顧問 ビジネスコンサルタント 郷原悟】となっている。

郷原の名刺はもう一枚、威圧用に寺本組の文字と代紋が入った、ヤクザ仕様の名刺があるの

だが、社長がビビると困るので、一般人向けのほうを出した。

「平安ファイナンス……？」

「ええ。KYマンションの302号室に、この間まで住んでいた、近藤学という者について、ちょっとお伺いしたかったです。いろいろと、お金を貸してあるもんで」

「あちゃ～……。またかあ……。もしかして、踏み倒されちゃったの？ あの人、居なくなる直前には家賃も相当溜めちゃっててさ」

「近藤がお宅のマンションを引き払ったのは、いつなんですか」

「ん～、先月の頭だったかな」

「急に、引き払うと？」

郷原は、コートの内ポケットから手帳を取り出し、メモを取った。まるで刑事みたいである。

「そう。なにせあの人、半年も家賃溜めちゃっててね。家賃の催促にすごーく苦労したのよお。なんだか知らないけど、いつも夢みたいなこと言うクセがあってねえ。そのうち莫大なカネを掴むから、今はもう少し待ってくれって、そればっか」

「莫大なカネを掴む……？」

「ん～、なんかそう言ってたよいつも。まあ、事情はよくわからないけれども、お金に困っているのは確かだったみたい。けっこういい勤め先に勤めてたのに、いったい何があってあんなに窮していたんだろうねえ。家賃は、最後はまとめて全額払ってくれたけど、敷金の精算も済まないうちに、もぬけのカラになっちゃってさ。会社も辞めたみたいよ」

社長は言いながら、郷原に背を向けて持ち場に戻ると、再び仕事をし始めた。ランチどきに売るための惣菜などを、作らなければならないようだ。

「すまないね社長。忙しい中、ただで話を聞くわけにも行かないな。そこの肉ちょうだい。グラム1380円の神戸牛」

郷原は、ショーケースの中の肉を指差した。

「はい、いくらあげましょう？」

手を止めて、再びショーケースの前に出てくる社長である。

「そんじゃあ800グラム。近藤の勤め先とかは、なにか聞いてない？ 社長」

「ああ、時雨製薬だよ。近藤さんが住んでた302号室は、時雨製薬さんの借り上げ社宅でね。代々、そこの社員さんが住んでるんだ」

「時雨製薬……？」

「ああ」

「じゃあ、時雨製薬を辞めたってこと？」

「まあ、そうだろうね。でも、聞いた話じゃあ近藤さん、借金だらけでパッと見、禿げあがった冴えないオッサンだったけど、すごい経歴の持ち主らしいよ。東大のドクターコースを出て、外国のすごい大学で研究をしてたんだって。それで、ヘッドハンティングっての？なんかそんなので時雨製薬に入社することになったらしいって、ウチに住んでる別の社員さんが言ってた。そんな人でも、家賃が払えないんだからねえ。世の中って面白いよ」

「研究者……、研究……。製薬会社の……」

「まあ、俺が知ってる近藤さんは、そのくらいだな。あとはなーんも知らない。悪いねえお兄さん。はい、お肉。オマケに牛脂も付けといた」

「ああ、ありがとう社長。邪魔したね」

(近藤は、時雨製菓の社員で研究者……。研究……。？なんの……。？)

ムルシエラゴに戻る途中に、コーヒーショップがあったので、そこに立ち寄った郷原は、オリジナルブレンドを1杯買うと、ホットスポットを探して席につき、ノートパソコンを広げた。インターネットを調べる。

(昨日星をみた池田史郎という男……。NPO法人の、ワールド里親協会理事長と言ったな……)

検索をかけてみると、ワールド里親協会自体が運営しているホームページは無かった。仕方がないので、検索に引っかかってきたページを、辛抱強く覗いてみると、東京都庁のページで、都内のNPO団体の一覧を探ることが出来た。どうやら、NPO法人というのは、事業所のある都道府県が承認するものらしい。

(四谷4丁目、シジュウカクマルビル605、ね……)

なんとなく癖で、そのままコーヒーを飲みながら、他のページも開いてみた。するとどういうわけかノイズのように、まるで関係なさそうな中絶体験のブログだとか、難病を抱える子どもを持つ親のページだとか、そういったものがちらほら引っかかる。

「……………」

郷原は違和感を覚えていた。こういうのは検索ロボットが、アルゴリズムでウェブページ内の内容をランダムに自動表示するから、知りたいことが書いてあるのかなと思ってページを開いてみると、まるで関係なくてがっかりすることもあるし、逆に、とても知りたかったレアな情報が、辛抱強くいろんなウェブページを読み込むことで拾える可能性もある。

ブログ・中絶体験日記「私の天使ちゃん」を試しに開いてみた。ページの管理人は、夢見がちな女子大生のような。少々イライラする文章だったが、斜め読み、とにかく眼を通す。

更新の最後のページには、同じように望まぬ妊娠で困っている人に向けて、メッセージが書かれていたが、郷原の眼は、そのページを読み進めるにつれ、次第に細く絞られていった。

(中絶した子どもを、難病治療にだと……？ なぜ、こんなブログがちらほら、ワールド里親協会の検索で引っかかってくる……。？ アルゴリズムの悪戯なのかな……)

コーヒーを啜りながら、思わず眉間に皺が寄った。パソコンを閉じ、店を出ると、駐車しておいたムルシエラゴに戻る。そして再び都心を目指して第一京浜を抜け、霞ヶ関に出ると、国道1号線に折れた。着いたのは四谷4丁目、シジュウカクマルビルだ。

小綺麗なビルだった。普通の居住用マンションというよりは、事務所用の集合マンションといった感じである。エントランス奥のエレベーターホールには、手入れされた鉢植えが置かれており、受付ブースも設えられていた。入り口のプレートを見ると、確かにほとんどが事務所のようだ。設計会社や弁護士事務所、イラストレーターのアトリエなどが入居しており、6階にはワールド里親協会の文字があった。

郷原は、迷わずエレベーターに乗り込むと、6階へと向かった。

チン、と小さく音がして、エレベーターの扉が開くと、そこはごく普通の、1LDKマンショ

ンのような設えである。603号室はエレベータを降りたすぐ目の前にあった。部屋のインターホンを鳴らしてみたが、誰も応答しない。

「居ないのか……」

電気のメーターを確認する。電気の使用量を測るメーターは、じりじりと回っていた。ということは、この部屋が現在も使われているのは確かのようにだ。部屋番号が書かれているプレートにも、プリンタで印字した紙を貼り付けたような、“ワールド里親協会”の文字がある。

在室していそうな、隣の部屋のインターホンを押してみると、はい、という、若い女性の声が出た。

「すみません……、あの、隣の603号室のことで、ちょっとお伺いしたいんですが」

相手が若い女性なので、郷原は、懇懇な声を出してみた。

「はあ……。私、お隣のことは、ほとんど知りませんが……」

「何時頃に出入りの音がするとか、在室しているようだとか、そういうことは？」

女性は、少し間を置いて、考えた風に話してくれた。

「さあ……。たまに物音が聞こえることはありましたけど、別に騒がしいとかでもないから、そんなに気にはしていませんでした。でも先週、そういえばお隣に、変なものが置いてあったわ」

「変なもの？」

「ええ。大したことじゃないんです。気味が悪いホラー映画のポスターみたいなものが、ドアの前に飾ってあったの。そういうご趣味の方なのかしら。お隣さんの印象は、そのぐらいです」

女性はそう言うと、インターホンから消えた。

「……ホラー映画のポスター？　なんだそれ……」

郷原は、首を捻った。他の部屋もインターホンを鳴らしてみたが、どこも留守のようだ。腕時計に眼をやった。

「……もうそろそろ昼だ……。おっちゃんとおち合う時間だな」

そういえば田代は今、どのあたりに居るのだろう。なんとなく、エレベーターには乗らず、階段を降りることにした郷原だった。階段を降りながら、携帯電話を取り出し、田代英明の番号を選択して、通話ボタンを押す。コール音を聞きながら階段を降りてゆくと、遠くから水戸黄門のテーマが聞こえてきた。

「ははは。すげー偶然。かけた瞬間に誰かのケータイが鳴った」

しばらく鳴らすと、田代が出た。

「おー、おっちゃん？　今どこにいる？」

「んあー？　四谷だよ」

「四谷あ？　奇遇だな。俺も今四谷にいる。四谷四丁目」

「え……？　ほんとかい郷ちゃん。俺も、四丁目なんだ」

どすん、と、何かにぶつかった。上を向いて携帯電話で話しながら歩いていたので、どうも前方不注意になっていた。3階に差し掛かった階段の踊り場で郷原は、そこを通ろうとした人とぶつかったのだった。

「あ、すみませ……、あれ??」

「うあ……！　なんだ！　郷ちゃんじゃないのっ！」

「何してんだおっちゃん……。こんなところで……。俺、ここも調べてくれて頼んだっけ？」
「えーと、俺はあれだよ、そうそう、しらゆりテレホンサービスを利用してた業者の住所が、えーと、ここの305だったから、そんで寄ってみただけ」
「ん～……??」

3、

田代の話は、こうだ。

しらゆりテレホンサービスに、郷原から託された、03—xxxx—△△△△という番号を調べに行った田代は、そこの社長からこの番号をここ何年も、ずっと使っている業者が“桂川興産”という会社であることを聞いた。

桂川興産は他にも、二つの番号を借りていて、全部で3台契約し、そのときどきで使い分けているらしい。しらゆりテレホンサービスの社長に、偽造したバッジ型警察手帳を見せた田代は、その社長から、桂川興産の所在地も聞き出した。

田代はその住所に寄ってみようと思って、それでこのマンションに来たという話だった。

「郷ちゃんはなぜ、ここに？」

「俺？ 俺は、星の思し召し。お星様が教えてくれた、池田とか言う男が、このマンションの603号室でNPOをやってるんだ。それで寄ってみただけ」

うーん……、と、考え込む田代。

「それってもしかして、桂川興産と、そのNPOが、繋がっている可能性がある……、ってこと？」

「ん～……、どうかな。よくわかんねえ。偶然にしてはよく出来すぎているが、何の関係があるのかはさっぱり」

二人が、階段の踊り場で顔を見合わせていると、階下から揃いの薄緑色のジャンパーを着た若い男が二人、昇ってくる。二人とも、手にはビニール紐で縛られた包みをいくつか持っていた。ここで二手に分かれて、包みをそれぞれ届けに行くらしい。彼らのうち、上階に行くらしいほうの男の、通行の邪魔なので、いったん下り階段のほうへ身をかかわして、通してやった。

「あれは、何かの配達か？」

この階を回るらしき男は、郷原たちを気にすることもなく、奥のほうから配達してくると、そのまま305号室の桂川興産の前に立ち、インターホンを鳴らした。

「どうもー。フェニックス印刷ですー」

男がインターホンに声を掛けると、ドアが開いて、室内に居た誰かが対応しているようだったが、ちょうどドアで中の人間が隠れてしまって、顔などは見えなかった。

すぐに階段を駆け降りる郷原と田代。シジュウカクマルビルのエントランスを、足早に通り過ぎる。

建物を出ると案の定、「フェニックス印刷」とボディに描かれたバンが停まっていた。すかさずその車体に書かれていた電話番号を、手帳にメモする田代だった。

「フェニックス印刷……、ね。もしかしたら、この印刷屋は、このビルに入居している個人事務

所のチラシ作成を、一手に引き受けているのかも知れないな。ついでに行ってみるか。桂川興産のことが何か、わかるかも知んねえ」

二人は頷き合うと、今メモした電話番号を頼りに、タウンページを調べ、そこからフェニックス印刷の住所を探し出した。車にそれぞれ乗り込み、新宿区若松町にあるフェニックス印刷へと向かった。

フェニックス印刷は、小さな商店街の裏路地の、ひっそりとした一角にあった。ガラスの引き戸に大きく、“チラシ、ポスター、配布用ポケットティッシュ、各種販促ツール作成 フェニックス印刷”と書かれている。

「いいのか？ おっちゃん。いくらこないだまで現役の刑事だったとはいえ、そう何度も偽造警察手帳使っていると、そのうち昔の仲間にマークされちゃうぞ」

店の前で、ポケットから、バッジ型偽造警察手帳を取り出そうとした田代を、郷原が静止した。

「ああ、だいじょうぶ。基本はトークだよ。これはまあ、どうしても聞き出せないときの、水戸黄門の印籠みてえなモンさ」

「だったら、ここは俺が行く」

「んあ〜……？ 郷ちゃんが？」

「ああ。まあ、何とかなる。ここで待ってろ」

郷原はそういうと、田代を残して一人、フェニックス印刷の中へと入っていった。田代はいぶかしがりながらも、その外でしばらく、タバコを吹かして待っていた。

30分くらい経ただろうか。郷原がなかなか戻らないので、気になり始めた田代は、何かあったのかも知れないと思って、フェニックス印刷の引き戸を覗いたが、そのときちょうど郷原が店の中から出てきた。

「どうだった？ 郷ちゃん……。収穫はあったのか？」

郷原は、ポケットから3枚のチラシを出すと、田代の目の前に突き出した。

「ああ。ホラこれ。桂川興産が作らせたとおぼしき、うさんくさいチラシだ。しらゆりテレフォンスービスと、桂川興産が契約している電話番号が、ぜんぶあったぜ？」

田代は、郷原が差し出したチラシを手にとって眺めた。

一枚目は、黒地に上半身裸の女性モデルが写り、その周囲をバイイブとか、ローターなどのアダルトグッズが取り囲んでいるデザインで、黄色い丸文字で“クリーム”とあった。そして電話番号の下に小さく、“ナイショのアレコレ、高価買取中！”と書かれていた。

「うわ〜、うさん臭いチラシだねえ〜。でも郷ちゃん、よくもらってこれたね、これ」

「こういう個人商店の小さい印刷屋は、条例違反すれすれのチラシを作ることが多いからな。金融屋だと言ってやったら、俺のこと客だと思ったらしくてよ。チラシ作成頼みたいから、ここ最近刷ったチラシをいろいろ見せてくれって頼んだら、コレが出てきたんで、そのままくすねてきた」

「“クリーム”のほかは、出張ヘルスト、あとは司法書士事務所のチラシだな……。しかし、なぜに司法書士??」

「さあ……。弁護士だとか司法書士だとかってのは、実態はヤクザまがいの人間も多いからな。

桂川興産の知り合いとか、顧問とか、そんなんじゃねえの？」

「なるほど。んじゃあ、あとは……」

「そうだな。このチラシから何か、連中とコンタクトするとかかりを作れないものか、考えてみよう」

「ええ？ 桂川興産の連中と、もう接触する気？」

田代は、心配そうに郷原を覗き込んだ。刑事時代の思考が抜けない田代は、調査をするうえでも、とにかく安全の確保を第一に考えるクセがある。相手がまだ、何者なのかわからない状態で、連中とコンタクトを取るの危険なのではないかと思った。

「ま、ちょっと考えがあるんだ……。今夜、このチラシの番号に電話して、カマをかけてみる。おっちゃん、ご苦労さんだったな。あの生意気息子の直人、そろそろ学校から帰ってくる頃だろ？ これ土産だ。直人に喰わせてやってくれ」

歩きながら、ムルシエラゴを停めておいたパーキングまで戻ってくると、郷原は、助手席のシートに置きっぱなしになっていた、横浜・村田精肉で買った神戸牛800グラムを、田代に包みごと手渡した。夏場では、とっくに腐っているところだ。

「うあ～、なんかよくわかんねえけど、ありがとう。さっそくすき焼きにでもするよ。悪いねえ郷ちゃん」

「作戦の目処が立ったら、また連絡する。んじゃあな、おっちゃん」

そういうと郷原は、パーキングの料金を精算して、車に乗り込み、街の中へと消えて行った。

田代は郷原を見送ってから、自分も停めてある車に戻っていった。今夜は久しぶりに、息子と二人すき焼きだ。帰りがてら、シラタキと春菊、焼き豆腐を、スーパーで買って帰ろうと思う田代であった。

4、

山本亮一はその頃、一人、ベッドルームにいた。ここは、新橋ダイヤモンドパレスホテル27階の、スイートルームである。

山本は今朝、伊豆へ連行される前の両親に会い、そして再びここへと連れ戻された。

浜崎慎吾が、この部屋の扉の向こう、リビングへと続く空間で、山本が逃げ出さないよう監視している。しかし、社長の川嶋貢が仕事で、もうここへは帰って来ないので、浜崎はどこかだらけて、漫画雑誌を読みながら、スナック菓子を食べていた。

扉の内側にいる山本の耳に、時折、がさがさと菓子の袋をあさる音が聞こえてくる。山本はベッドの上に寝転んで、あれこれと浮かんでは消える漠としたことを思った。

(亮ちゃん……)

母親の姿を思い出す。山本の母は憔悴しきって、ひたすら、亮ちゃん、と山本の名をつぶやくばかりで、まともに受け答えのできない状況であった。父親もうつむいたまま、硬く拳を握っていた。

(いったいなぜ、こうなった——？ わからない……。神様……)

思わず、胸の中で呟く。山本は、結婚もそこそこに、何もしてやることが出来なかった新妻を思い出していた。

(彼女とはもうこのまま、離婚するのがいいだろうな、きっと——)

無性に空しくなって、山本は身を起こすと、タバコに火をつけた。タバコを吹かして、考えて、また吹かす——。そのくらいしか、やることはない。やれることもない。

コンコン、と、誰かが部屋の扉をノックする音がした。

「はい……」

元気のまるで無い声を出して、山本は、タバコを啜えたまま返事をした。扉が静かに開けられると、郷原悟が立っていた。

「よお……。どうだ調子は」

「いいわけないでしょう。あなたたちに支払う金利のことを考えて、気が遠くなりかかっていたところですよ」

「まあ、そりゃそうか……。ホラよ。メシ。缶ビールも入ってる。適当に食え」

そうやって郷原は、山本にコンビニの袋を渡すと、リビングのほうへ戻っていった。山本は郷原が調べてきたことが気になって、コンビニの包みをベッドの上に置くと、郷原の後をついて、リビングへと出て行った。

「何か、わかったんですか……？」

「ああ。もしかすると、あんたの尊敬する池田さん……」

「い、池田さん……？ 池田理事が、どうしたって……？ まさか、調べたんですか?! 池田理事のこと……！」

郷原は、コートとジャケットを脱ぎ、シャツのボタンを緩めながら、冷やかに山本を見た。山本のこの、異常な池田への態度——。妙に違和感を覚える——。

「近藤学と、繋がっている可能性がある」

ネクタイを緩めながら、ソファのほうに戻って、郷原は言い放った。その言葉に、眼を剥く山本である。

「う……。うそだ……。あり得ない、そんなこと……」

その顔には、明らかな狼狽が浮かんでいた。

「あり得ないものにも、可能性があるって推量してるだけだ。物的証拠はまだ何もねえ。そう、うるたえることはないだろ？ 池田史郎さん、前職は何だっけ」

体を投げ出し、解いたネクタイをシュッと、襟元から引き抜いて、ソファにかけるようにしながら、郷原は尋ねた。

「厚生労働省の、法人担当課長です。でもその前は福祉関連のセクションにいて、児童相談所や保健所の行政指導をしていた……。り、立派な人ですよ。疑うなんてとても……！」

「近藤学が、時雨製薬の社員で、エリート研究員だったという話は、聞いているか」

「し、時雨製薬……?? 知らない、そんな話は……」

「……、あんたが教えてくれた、近藤から聞いたという電話番号、こんなチラシになっていたぜ？」

長い脚を組み、肘を背もたれにどっかりと投げ出すと、郷原は、ボタンのほだけたワイシャツの胸ポケットから、3枚のチラシを取り出した。それを手に取る山本である。

「う……」

「そのチラシを作ったのは、四谷4丁目、シジュウカクマルビルの“桂川興産”という会社だ。池田史郎の里親協会も、同じビルに入っている。もしこれが偶然だとしたら、ものすごい偶然だな。アンタは産婦人科医、近藤は元製薬会社の研究員、そして池田は元厚労省の役人……、なんとなく1本の線を感じる……」

郷原は、自分用に買ってきた缶ビールのプルタブを起こして、美味そうに飲んだ。郷原の突き出た喉仏が上下する様を、山本は啞然と眺めるばかりだった。

「ただ、桂川興産が、池田や近藤にどう関係しているのか、それがわからねえ……。今からそれを、星に聞いてみるから、邪魔するな」

漫画雑誌を読んでいた浜崎が、郷原がパソコンを見つめ、天体暦を出し、星の計算をし始めたので、緊張して姿勢を立て直すと、慇懃に、郷原の邪魔にならぬよう正座した。星を読んでいるときに、物音など立てようものなら、郷原は、ぶっ殺すぞと言わんばかりに恐ろしい目で睨むのだ。

山本は緊張していた。郷原の占星術が、心底怖い……。まるで悪魔の知識である。

（たかが占いで、こうも秘密を浮き出させるだなんて——。こんなの、本当なのだろうか……。僕は、テレビでインチキくさいおばさん占い師を見たり、妻がくだらない占い本で相性診断をしたりするくらいしか、占いなど知らないけれど……）

そんな山本に構うことなく郷原は、ソファに寝転がり、腹の上にノートパソコンを載せると、なにやらデータを入力し始めた。

（桂川興産と、近藤、池田、そして時雨製薬——。この4つを結ぶものは、何だ——？星よ、答えてくれ……）

描き出す星々——。ライジングと呼ばれる、答えを教える重要な場所に、太陽が輝いていた。その隣には冥王星。英名・プルートー。

2006年8月14日に、プラハで行われた国際天文学連合総会において冥王星は、小さく、質量も軽い故に、惑星という定義から外された星である。それを受けて、占星術上の冥王星はどうなんだという議論が起こったが、そういう科学的な論理を、単なる民間伝承に過ぎない占星術に持ち込むのは、間違っているのかもしれない。要するに占いなんて、根拠はともかく当たればそれでいいのだ。

郷原は、テーブルにいつも置いてある容器から、爪楊枝を1本取り出すと、糸切り歯の辺りで強く噛み締めた。眉間に皺を寄せ、眼を閉じ、意識を額の辺りに集中させて、連想の糸を紡ぐ。

占いは、すべてが連想である。決して摩訶不思議な才能ではない。世にいう霊能者という人々も、単なる連想、推量の技術にすぎない。結局、霊能だの占いだのの本質は、本人の知識量、人生経験、推理力と洞察力で決まってしまうものなのだ。所詮は、占い師本人が知っている範囲の言葉しか出てこない。

郷原は、プルートーと、太陽を見つめていた。どちらもこの世の権力の象徴である。太陽が表の権力ならば、冥王星は裏の権力——。

（表の権力……。表……。つまり、人前で公言できること……。裏の権力……。裏……。人前では絶対に公言できない秘密の力……。それが鍵だと告げている星……。権力、決定権があるもの

、ということだ。決定権、世の中のことを決める、つまり……)

政治家——？ 郷原の脳細胞が、推論に冷たく震えている。

政治家——。口の中で、つぶやく。それと同時に、確かな手ごたえ……。呟いた言葉が、実感を伴って、郷原を押し返した。口にしたときにリアリティを感じる言葉は、大抵間違っていないことを、郷原は長年の経験でよく知っていた。

政治家——。この路線を疑え、という、星のメッセージ——。しかも、ただの政治家ではない。 “決定権がある” 政治家だ、と言っているわけだから、それは、法案を押し通せるだけの力を持った、有力議員という意味だ。

(恐らく、政権与党の幹部クラスか、その一派……。それが、裏・表……)

郷原の耳に、かつて占い師の騙しの手口を叩き込んでくれた老人の音が響く。

(いいか郷原。人間の真実はたった一つ……。欲だ。人は誰もが醜い、欲望という名の汚物を抱えている。神秘など信じるな……。人間の醜い欲だけを信じろ……。けっして、まっさらな気持ちで星など読んではならん。人間とはすべからく醜いものだ決め付けて、その上で星を読むのだ。それでこそ、人の裏側が見えてくる……)

そう、爺さんの言う通りさ……。人間のたった一つの普遍的真実……。それは欲だ。カネが欲しい、人より有利になりたいという欲。欲——。池田は元役人、近藤は製薬会社、そしてそれを結ぶ可能性のある政治家——。

一瞬、脳裏にフラッシュが走った。

(あ——！！ そうだ、こう考えてみたら——?? 時雨製薬、厚生省、政治家、この三つを、利権という欲望で透かしてみる……。すると、どうだ……?? 政・官・業の癒着のような構図……。そんなデッサンの跡が、おぼろげに見えてくる……。それを取り持つのが、桂川興産なのか……? もしかして、桂川興産をつつけば、池田史郎本人を案外、炙りだせるのかも知れない……)

「ど、どうしたんですか、郷原さん」

じっと座っていた山本が、顔を上げた。郷原は不意に身を起こすと、自分の携帯電話を取り出した。

「おい山本さん……。さっきあんたに渡したチラシ、ちょっと貸してくれ」

「……………???’」

山本は、ジーンズのポケットにねじ込んであったさっきのチラシを、郷原の手に戻した。郷原は爪楊枝を噛みながら、そのうちの1枚、“クリーム”を取り出すと、残りを山本へと突っ返して、携帯電話のダイヤルを回し始めた。

(郷原、何を……………?)

山本は、残り2枚のチラシをどうしていいかわからずに、とりあえず再びジーンズのポケットへとねじ込むと、浜崎とともに、郷原の様子をじっと見つめていた。かすかに空気を震わせて、郷原の手中の携帯電話から、女の声が聞こえてくる。

「はい、クリームです」

「すみません、転送してもらえます?」

「はい。少々お待ちください」

また、“愛しのエリー”の保留音だ。

「はい、もしもし」

巻き舌なしゃべり方の、低い男の声が出た。昨日とは違う。

「そちら、桂川興産……？」

「おたく、どちらさん……？　なんでウチの名前を……??」

相手の声は、明らかに郷原をいぶかしがっている。郷原は、缶ビールをひと口飲んだ。

「お宅の会社、銀行口座を買ってくれるんだってね」

「誰から聞いた？　お前は誰だ？」

電話の向こうの声は、威圧的な、威嚇的な調子に変わって、低くくぐもった。

「まあ、いろいろとね。裏の世界ではそんな噂は広まりやすいもんだ。気をつけな。ところでな、買ってもらいたい口座がある。しかも、大量に……」

「大量にだと？」

「ああ。俺は金融屋の下っ端でな。返済不能になった連中から、口座を集めて、自分で売りさばこうと思ったんだが、どうやらそれが兄貴連中にバレたらしくてよ。捕まって、バラされる前に早く逃げなきゃなんねえんだ。カネが要る……。頼むよ、まとめて買い取ってくれ」

「……………」

言葉が途切れた。郷原は、電話の相手が誰か別の人間と、こそこそ話している様子を感じていた。たぶん、この話が信用できるものかどうか、相談しているのだろう。保留中の音楽が受話口から流れてくる間に、郷原は手持ち無沙汰な感じで、缶ビールをひと口飲んだ。しかしその眼は、危険なやり取りを楽しむかのように細く絞られ、遠くの果てない方向を見つめている。

やがて保留中の音楽が止むと、先ほどと同じ男が出た。

「何本持っている」

「そうね。30くらい」

「……いいだろう。こちらへ宅急便で送ってくれ。料金引き換えで支払う。1本につき買い取り価格は3万5千円だ」

電話の向こうの男は、事務的に答える。どうやら郷原のハツタリに喰らいついたようだ。

「ええ？　ダメだよそれじゃあ。こっちは急いでるんだ。直接会ってその場で買い取って欲しい」

郷原は、大げさな演技をしてみた。電話の向こうの連中を試しているのである。つまり、本当に単なる口座売買だけの組織なのか、それとも、もっとどす黒い何かを秘めた連中なのか。

「ちょ、ちょっと待て」

郷原のカマかけに、男は慌てたように敏感に反応した。また電話の向こうが静まり返る。保留音にされてしまった。

待たせる時間が妙に長い。30秒……、1分……。

郷原はその間、腕組みをしながら、余裕の姿勢でソファに投げ出した長い足を組み替えた。

再び、保留音が切れて、男の声がした。

「では、こちらの事務所まで来い。本来は来客お断りだが、お前が一人で来るといいうなら、特別

に受け付けてやろう……」

「ええ？それも恐いなあ……。ホントはあんたら、うちの兄貴たちと繋がってたりしてな……」

。俺、今、ナーバスだから、事務所なんか恐くて行けねえよ」

「だいじょうぶだ。現物を見て、カネを受け渡すだけだ。別になにもしねえ。金庫が事務所にあるんだ。安心して一人で来い」

(……………?)

郷原は、眉を寄せて、爪楊枝を噛みながら、違和感を覚えていた。

(なんだ？ こいつのこの話し方……。なにか意図がある……?)

郷原は、眼を細めて、また缶ビールをひと口飲む。

さきほどから郷原の神経が、電波を通じて届く相手の声の調子に、恣意的な誘導とでも言うべき何かを、感じ取っている。駆け引きの匂い——。向こうもどういいうわけか、この俺を、おびき出そうとしている——?? そんな直感が働いて、さらにカマをかけた。

「ん～……、じゃあいいや。別の業者を当たるから。事務所に来いなんてヤダよ。おっかねえ。んじゃ」

「あ、待て！ わかった、待ってくれ！ それなら、事務所でなくてもいい……。ファミレスはどうだ」

「ファミレス……？」

「ああ。ファミレスなら人目もある。妙な真似はお互いにしにくいはずだ。そうだな……、渋谷から世田谷通りを登戸方面へ行って、三本杉陸橋を越えたところに“ヴェリーズ”というファミレスがある。そこへ明日、夜10時に来い。くれぐれもお前一人でな……」

「いいだろう……。んじゃあ、アンタも一人で来いよ……。フェアにやってもらおうじゃねえの」

「お前の特徴を教えろ」

そう訊ねてきた電話の声に郷原は、横目でチラリと、神妙に正座している浜崎慎吾を見た。

「そうだな……。髪は茶パツで、赤いラークを吹かしている……」

「赤いラークだな……。わかった」

そういうと、通話を終えた。

「ご、郷原先生、まさか……。ヤツらと、接触するつもりで?!」

浜崎は、不思議そうな顔をして郷原を見た。

「ああ。連中に会ってみる。できればヤツらをどうにか拉致りてえ」

「拉致る?!」

意外な言葉に、眼を見開く山本と浜崎だった。

「拉致るって……？」

山本が、緊張した顔で尋ねた。山本の生活の中で今まで、拉致などという穏やかならざる言葉が、出てきたことはない。言葉の持つ危なさに、山本は心臓がキュッと締まった。

「そうだ。ヤツらを拉致る……。拉致って、吐かせる。そのほうが手っ取り早い。これは俺の推理だが、俺が今電話をしたクリーム、桂川興産はたぶん、元厚労省の役人、池田史郎と、時雨製菓の社員だった近藤学を、なんらかの形で取り結んでいる。そして、その奥には政治家……。そ

んな構図だと、星が俺に教えているのさ……。俺たちは公僕じゃなくてヤクザだ。だから、結果を得るのに手段は選ばなくていい。ククク……」

「……………」

郷原の不敵さに、身震いする山本だった。もう止めてくれ、といたい気持ちが、こみ上げてくる。

(郷原は、池田理事を疑っている。池田理事を例の賭博に引き込もうと、密かに考えているのでは……。池田理事と向かい合うのが怖い……。自分の過ちを、確認させられるのが怖い……)

山本は、鎮痛な面持ちで、自分の思いに堪え切れず歯を食いしばった。それを横目で、チラリと見る郷原である。

「うあ～、スゲーやりたいっス、俺！ そーいうの憧れてたんっス！」

浜崎は、目を輝かせ、身を乗り出していた。どうもこの男は、危ないこととか、ワルっぽいことに憧れているようだ。

「そうだなあ。でもどうすっかな……。浜崎ちゃんはここで、山本先生の面倒見てなきゃなんねえもんなあ。かといって、おっちゃん一人じゃあ頼りねえし……」

「お、お願いします先生！ 俺、連れてってください！ 俺、ずっと柔道やってたから、たぶん役に立つと思います！」

浜崎は、床に手を付いて、深々と頭を下げた。その前にしゃがみ込む郷原であった。

「しょーがねえな……。んじゃあ、山本先生も連れてくか」

「ああ？」

「ぼ、僕も…………？」

「いいじゃん、気晴らしに。あんたを騙した憎いやつを賭博にハマるための行動なんだから、あんたも手伝えよ」

「で、でも郷原先生、スキを付いてこいつに逃げられたら……！」

浜崎が言う。

「そんな時は、伊豆の飯場で頑張っている山本先生の父ちゃん母ちゃんを、どうにかするだけさ。なるべくならお年よりは、いたわってやらねえとなんねえけどよ、フッフ……」

「あ……、あう……」

またしても、郷原のペースに飲み込まれ、振り回される山本だった。口をパクパクさせて、何か言おうとしているようだが、郷原はそのまま立ち上がって、冷蔵庫のほうへ行ってしまった。

郷原は、冷蔵庫を開けると、冷えたエビスの350ml缶を、3本取ってきた。

「まあ、おっちゃんも入れて4人でかかれば、男の一人ぐらいサラえんだろ。あとはまあ、出たところ勝負ってことで」

山本は、展開についていけなかった。郷原は、その目の前に冷えた缶ビールを突き出す。

「んじゃまあ、とりあえずご協力をお願いしますってことで、乾杯」

そうやって、美味そうにビールを煽る郷原だった。

5、

こうして、郷原たちが、桂川興産の者を拉致しようと画策したときから、時間は前後して数日

前のことである。ワールド里親協会のある四谷4丁目、シジュウカクマルビル602号室のドアに、でかでかと、大きなポスターのようなものが貼られていた。

その写真はかなり気味の悪いものであった。赤いじゅうたんの上に、禿げ上がった男がうつぶせになって、倒れている。

じゅうたんの回りは、どす黒い変色——。血液のようだ。頭の周辺には、ところどころカッタージチーズ状の白い何か。脳髓の破片だろうか。男の服装は、スーツ姿であるが、ネクタイもジャケットも血で黒く染まり、元の色が判然としない。

そしてなぜかこのポスターの真ん中には、赤いスプレーで【Give it Up】と、メッセージらしきものが書かれていた。

彼氏の所へ泊まって、朝帰りした602号室の隣の若い女性は、エレベーターから降りたとき、真っ先にこのポスターが眼に飛び込んできたので、思わずうわっと、仰け反った。

(なにこれ……。ホラー映画のポスター……。？ キモチ悪う～……)

思わず、まじまじと眺めてみる。しかし、死体として倒れている男の、髪が生え方や、服装、傷の具合のナマナマしさなどが、かなり迫真で、夢に見そうなくらい鮮明だった。

しばらく女性は、そのポスターを眺めていたが、まさかこんな、里親協会なんていう平和そうな法人のドアの前に、こんなものが貼られている関連がわからなくて、やっぱりきっと性質の悪い、B級ホラーの画像だろうと思いなおすと、自室へ帰っていった。

他にこのドアの前を通りかかった人たちも、おおむね、この女性と同じリアクションである。ひとり、この部屋の借主である池田史郎だけが、皆と違うだけで——。

池田史郎がドアの前に現れるまで、そのポスターはひっそりと、その時を待ち続けるのだ。池田に対する、池田一人が身震いする、強烈なメッセージを与えるために——。

1、

「それにしても、なんで世田谷なんだ？事務所は四谷なのに」

ステアリングを握りながら、田代英明がつぶやいた。

4人の男を乗せた型落ちのホンダ・シビックは、都心から世田谷通りを、流れに乗って西へ向かっていた。空は薄く曇っていたが、雨が降りそうだという予報は、夕方のニュースでは出ていなかった。

「さあな。たぶん、何か思うところがあるんだろ？」

助手席にふんぞりかえった郷原は、あくびを一つ吐き出した。カーラジオから、北原ミレイの“石狩挽歌”が聞こえてくる。今日はどうやら、懐かしの歌謡曲特集ということのようだ。

「懐かしいなあ、なんか……。この歌……」

郷原が、リアウィンドウの向こうに眼をやりながら言う。

「なによ郷ちゃん。何年生まれよ。だいぶ古いぞ？ この歌」

「昔よく漁港でさ、なんかあると、かかってたんだよこの歌」

「漁港……？ どこの……？」

「俺の地元」

「ふーん……。そういやあ郷ちゃん、故郷はどこなんだっけ……」

田代がつぶやいた。尋ねられた瞬間、サイドミラーに映った郷原の眼が、わずかに伏せられたのを、後部座席に座っている山本は見た気がした。

「あ！ 今のあそこじゃないっすか？ 指定されてたヴェリーズって」

浜崎が指を差した。田代の車は、今どき珍しくカーナビもついていなかったから、注意深く前方を見ていないと、通り過ぎてしまう。

約束のヴェリーズから、少し通り過ぎた場所にあるコンビニの駐車場に、田代は車を停めた。時刻はちょうど夜9時を回った頃だ。

田代と郷原、浜崎は、それから1人ずつ、ヴェリーズの中や周囲を確認しに行った。どういう配置、作戦で行くのか、現地を見てからでないと決められない。

「んで、どうする……。？ あのファミレスの駐車場で男3人が、車の中で待機していたら、一発で怪しまれちゃう……。かといって、ひとりでヤツらに接触する郷ちゃんの身の安全も気がかりだし……」

田代が、全員の顔を見回す。今、覗きにいったヴェリーズは、郊外によくあるような、そこそこの駐車場がある、平屋型のファミレスだった。箱のようなファミレスの建物の裏側は、調理場と繋がっているようだが、そこにはたくさんのビールケースや、ダンボール、おしぼりのカゴなどが積まれていた。

トイレは比較的広く、男子のほうは、大使用の便器が2つ。小使用の便器が3つあった。便所の小便器の前は、おあつらえ向きに大きなガラス窓が嵌っていて、その向こうは調理場の影の、ビールケースが置いてある辺りであった。客席は、まずまず人がおり、それなりに活気があるようだ。

「まあ、一番安全なのは店内だな。しかし……」

郷原は左腕のロレックスに眼をやった。眼を閉じ、鼻柱を押さえてしばし考え込む。郷原が考えている様子を他の3人は、息を潜めてみつめていた。しばらく黙想してから郷原は、おもむろに言った。

「浜崎、お前行け」

「へ??」

「お前が店の中で、連中を待つんだ。昨日電話した者だというフリをして」

「えええ～?!」

「俺は、店内の便所の中に待機する。おっちゃんは、駐車場で、車の中で待機。なるべく目立たないようにな……。山本先生は、浜崎の向かい、浜崎と顔が見合わせられる位置に、ひとりで座る。いかにも寂しい独身が、一人でメシ食ってますみてえなカンジで」

「んで、俺、どうするんです? 先生……」

「やつらの目を盗んで、コレを飲み物や食べ物に混ぜろ」

そういうと郷原は、浜崎に小さな錠剤を渡した。

「……なんスか? これ……」

浜崎が、小さな錠剤を眺めながら言った。

「即効でよく効く下剤。これを飲むと、ものの10分もしないうちに猛烈に腹が痛くなる。連中が堪えきれずに便所へ行くまで、お前はなんとか粘れ。ヤツらの誰かが便所に来たところで、待ち構えていた俺がクロロホルムを嗅がせる。山本先生と浜崎は、連中が便所に立ったら、すぐに後を追いかけてくれ。どうにかして気を失わせたら、あとは3人がかりで便所の窓からそいつを出す。おっちゃんはこのまま、車の中で待機して、そいつを車に押し込めるのを手伝う。上手く行ったら、そのままホテルに逃げる」

「……わかった……」

3人は、緊張した面持ちで、郷原に頷いてみせた。そして、それぞれの持ち場に散った。

2、

時刻は10時を30分回ったが、桂川興産の連中とおぼしきやつらは、まだ現れない。

郷原は、浜崎に、自分の携帯電話を渡しておいた。それからひとり男子便所に入り、便器を一つ陣取って、ドアの外に故障中の張り紙をした。便座の蓋の上に座り、思案を巡らせる。

(すまねえな、浜崎……。お前をたばかっちゃまって……。上手く行くわけはねえと思っているが、これもまあ、考えのうちだ……)

息を殺して、タイミングを窺う郷原だった。その眼は、冷酷に凍てついて、鋭く艶めいていた。左手が、トレンチコートの内側の、裏地のポケットを触る。

その中にある感触が、郷原の神経を落ち着かせた。ポケットから、郷原にとってのお守りであるそれを取り出すと、ストッパーを外してマガジンを引き抜き、中をチェックする。

そしてもう一度元の状態にすると、無造作に、再び内ポケットに戻した。かなり雑な扱い方であるが、彼にとってはそれでいい。

それは、ただのお守りだから。

荒みきっていて、冷えきっている自分を忘れないための、お守りだから。

その頃浜崎は、店の入り口を見渡せる、店内奥の4人がけテーブルに陣取り、郷原から渡された携帯電話を見つめていた。

(連中も馬鹿じゃねえ……。たぶん、夕べの俺の着信履歴を、残してあるはずだ。現れる前にはこの電話に、連絡が来ると思う……。俺のフリして電話に出て、なんとか客席に向かわせるんだ。いいな、浜崎……)

浜崎は、郷原の白い携帯電話を見つめ、もらった錠剤を置いてあった呼び出しボタンの底で、押し付けるようにすりつぶしながら、ファミレスの入り口を緊張した面持ちで見つめていた。

その向かいの座席には、山本が座っていて、スポーツ新聞を読むフリをしている。

浜崎は、山本と一瞬目配せして、再びテーブルの上に眼を落すと、ラークの赤箱を取り出し、1本口に啣えて火をつけた。

(赤いラーク——。そういえば、いつもの俺のタバコ……。郷原先生は、始めから俺を行かせるつもりで?)

煙を吸い込み、緊張感を手なづける。不意に生まれたエアポケットのような、精神の間隙を突いて、いきなり郷原の携帯電話が、スーパーマリオの音楽を奏で始めた。ビクッと身構えて、電話に出る浜崎だった。山本も新聞から顔を上げて注視していた。

「はい、もしもし……」

「あんた、昨日の人？」

電話の向こうの男は、ドスの効いた、くぐもった声である。

「あ、ああ……。例のものを持ってきた……。ずいぶん待たすじゃねえか」

「店を出ろ」

男は、高圧的に言う。まるで、お前に選択の余地は無いといった態度である。

「そうはいかねえ。俺を攫うつもりなら、その手には乗らねえぞ……。俺はお前等の悪事を知っている。俺の身に何かあったら、一緒に連れて逃げる手筈の俺の女が、警察に飛び込むからそう思え」

「なんだと……？」

電話の向こうの声は、苛立ったような声を漏らした。

「わかった。お前は今、店内の突き当たりにいる青いパーカーを着た男だな。今からそっちへ行ってやるが、その前に通帳を見せろ……。頭の上にかざせ」

「こんなところか？」

「いいから、見せろ。そうでないと信用できねえ。見せられないならそっちには行かない」

「わかったよ……」

浜崎は、茶色い紙に包んできた通帳の束を、わざと大きな仕草でビリビリと破り、中から1冊引き抜くと、それを頭の上でひらひらさせた。もちろんこれはダミーである。あとは全部ただの紙だ。

バレバレの、見え透いたウソなのは、すぐに見破られる——。

(あの車……？ もしかして、あれが桂川興産の連中……?)

その頃田代は、ファミレスの向かい、道路を挟んだ反対側の路肩に、1台の白いフェアレディZが止まっているのを見ていた。

資材を納入するためのワゴン車が、ちょうど田代の前を横切って、ファミレスの裏の調理場のほうへと入っていく。

(しまった……。あれじゃあ、便所から男を運び出すのに、邪魔だ……)

そう思ったが、どうすることも出来ない。やがてフェアレディZから、一人の男が出てきた。リーゼント頭の目つきの悪い男である。もう一人、車の中にいる男は、運転席にもたれたまま動かない。田代は、山本の携帯電話を鳴らした。

「お、おい……。今、ガラの悪い男が一人、そっちへ向かった！ 浜崎さんに伝えてくれ！」
「は、はい……！」

山本は慌てて電話を切り、入り口を見た。同時に、ファミレスの2重扉をカランと鳴らして、男がやってきた。

リーゼント頭の、その男——。浜崎に合図するため、用意していたタバコを唇につけたまま、山本は、固まってしまった。

(あの男——。そう、あの男だ……。刑事だと言って、僕のところに通帳と、キャッシュカードを寄越せと現れた二人のうちの一人……。見間違えじゃない、覚えている！！)

「あ、ああ……！」

山本は青ざめて、持っていたスポーツ新聞で、すぐに顔を隠した。

(さて、どうするかな……。あのZ、中にもう一人いる。たぶん俺のことも、この車も監視されているはずだ。それにしてもあの白いワゴン、邪魔だなあ……。なにも便所の前に止まらなくてもいいのに……)

田代は、ワゴン車のほうを見た。ワゴンの運転手は、図体の大きな坊主頭の男で、調理場のほうへと消えていった。中の従業員にでも、挨拶しているのかも知れない。

田代は、まんじりともせず時間を過ごした。正直、浜崎の様子が気になるが、動くこともままならない。男が店に入ってから、すでに10分が経過していた。店内の浜崎は、どうしている——……？

(ちくしょう……。これじゃあ、薬を混入するなんて無理だ……。まるで隙がない……)

浜崎は、焦っていた。男は、余裕の表情を浮かべて、浜崎の前でタバコを吹かしていた。

「お前、俺たちの悪事を知っているだと……？ ハッターリ噛ますのも大概にしておかねえと、痛い目見るぞ？ お前こそ、口座を持っているなんてフカシだろうが……。要求はなんだ」

「要求……？ だから、カネを寄越せってことだよ」

浜崎が、いぶかしげな眼で男を睨む。

「なに言っていやがる。お前みたいなヤツがチラチラしていると、先生が困るんだよ……。お前はどこのモンだ。中国のことなら俺たちは無関係だ。近藤を殺したのは、お前らなんだろうが——。いくらで請け負った？ ああ??」

「……………??」

どうも話が要領を得ない。先生？ 中国?? 殺し……??? こいつらは、何の話をしている——??

「まあいいや。その話はあとでじっくり聞こうじゃねえの。ククク……。とりあえずションベンでもしてくるか……」

意味深に笑って、誘うように浜崎を見ると、テーブルから立ち上がる男。

(やった……！ べ、便所に立ったぞ……！ すぐに後を……！！)

男が用を足しに、便所へと消えたのを確かめてから、すぐに山本と目配せして、浜崎は自分たちも急ぎ、便所へと向かった。

レジの前を通り過ぎ、従業員室の手前で、奥まった男子トイレのドアを、男を追って開けた。

そのときだ。もう一人の別の男が、扉の向こうに立ちはだかっていた。さっきまでフェアレディZの運転席で待機していた男である。

「おいおい……。お前ら、まさか古典的に、あいつを便所の中で攫おうなんて、考えてるわけじゃねえだろうな……。残念だがそうは行かねえ、諦めろ」

「くッ……………！！」

浜崎が、拳を握りしめたその時。

「お、お前は、あのときの……！」

山本が、震える声を出した。

「なに……？ 何だ山本センセエ……、こいつを知ってるのか？」

「さっきの男と、こいつなんだ！！ 僕のところに、刑事だと言って通帳とキャッシュカードを寄越せとやってきたのは……！！」

「な、なんだって？！」

「そういうことか。この間のマヌケな医者……。お前が俺たちを呼び出した。ぬかったな。単なる勘違いじゃねえか」

立ちはだかる男はそう言って、少しいまいましそうに頭を搔いた。

「勘違い……?? 勘違いって……??」

山本は、男のつぶやきに凍り付いて、立ち尽くしていた。それをチッと舌打ちして、浜崎が、男を組み伏せようと腕を伸ばした瞬間。

鈍い音が便所から聞こえてきた。グフッと、呼吸が吐き出される音と、間を開けずに低い呻き声。ドスッとサンドバッグを叩いたような音。強い暴力に、あばらが軋む音、だ——。

「ご、郷原先生……！！！」

「ククク……。バカめ。事情聴取に中の男は攫っていく。あばよ」

「クソ……ッ！！ ま、待て！！」

浜崎が、便所の中に逃げる男を追いかけて、扉の向こうに踏み込むと、すでに郷原の姿はなかった。

立ちはだかっていた男は、小便器を足場にして、窓に乗り上げ、そのまますりと窓の向こうのワゴンに飛び移った。同時に、発進する音。

「あ、うあ……！！」

山本は慌てて、田代の携帯電話を鳴らそうとしたが、時すでに遅しである。騒ぎを聞きつけて、店内から店員が何人かやってきた。

「ど、どうしたんです?!」

「くっ……!!」

男の店員に取り囲まれる、浜崎だった。外にいる田代はまだ気づいていない。白いワゴンが目の前を通り過ぎたので、これでやっと、便所の前に横付けできると思って、車を動かしていた。その荷台に、郷原が押し込められているとも知らず――。

山本が、ファミレスから走り出てきた。

「田代さん――!! あの白いワゴンだ!! あのワゴンを追いかけて、早く!!」

「あ～……??」

田代は啞然としていた。

3、

後頭部に激しい痛み。口の中に、どういうわけか塩分を感じた。鉄さびのような味――。唇が、切れている。ズキズキと、焼け付くように頭が痛む。鳩尾にも、こみ上げるムカつき――。体中の痛みが、自分が暴行されたことを、郷原に教えていた。

まるで水底から見上げた世界のように、視界が揺れている。

「……………」

郷原の眼鏡が、ひしゃげて、ピントが合っていないせいだ。郷原が眼を覚ますと、そこは、閉店後のスナックのような場所であった。

郷原は壁を向いて、ボックス席のソファの上に転がされていた。

手は後ろ手に、きつく布で縛られている。足も同様に、脛のところに布を何重にも巻かれ、縛られていた。

郷原の鼻を、キツイ匂いが刺激した。

(タバコの煙……。誰かそこにいる……?)

上体を動かして、芋虫のように這いずり、床の上に転がり落ちた。

「クッ……、痛たた……。あー、痛てえ……」

無様だが仕方がない。首や肩、腹筋を総動員して、なんとか上体を建て直すと、ボックス席に背中を預けて、床に座り直した。

男が二人そこにいた。さっきのファミレスで、浜崎と話したオールバックの男と、もう一人は坊主頭の、スウェット姿の巨漢だ。

「気がついたようですね? 松木さん」

「ああ……。そのようだな……」

松木、と呼ばれたオールバックの男は、むくりと起き上がった郷原を見てタバコを吹かしていた。二人は、スナックの入り口の前に座り、郷原を見ていた。

広さ約20平米……、だいたい和室で8畳かそこらの、小さなスナックだ。郷原は、入り口から向かって左側にある、ボックス席に転がされていた。その反対側にはカウンター。カウンターにはバーチェアが6脚……。黒い壁紙と、黒いカウンター、黒い洋酒棚に、ワインレッドのバーチェアと、ボックス席が色映えていて、洒落たムードのスナックであるが、カウンターの上にはカラオケ用の機材と、テレビも置かれていて、ごく普通の、場末の小さな店という感じであった。

松木という男と坊主は、起き上がった郷原に対して反応が薄かった。ただ淡々と、手持ち無沙汰にタバコを吹かしているだけである。

「なんだどうしたよ。人のことこんなに痛めつけて、拉致ったわりには、リアクションが薄いじゃねえか。もっと盛り上がれよ」

そういって、郷原がけしかけた。

「今、お前に用のある男を社長が連れてくる。それまで待ってろ」

松木が言った。

「俺に、用がある男だと……？」

「ああ……。しかし、見当違いだった可能性もあってな……。悪かった。手荒な真似をして。ただ、お前が何者なのか、何をするためにわざわざ俺たちに接触してきたのか、それをはっきりさせるまでは、こちらも安心できなくてよ」

「ふーん。あんたたち、まんざら悪い人たちでもねえのかもな……」

郷原は、不敵に唇の端を歪めた。

「まあ、俺たちは、社長がある男を連れてくるまで、見張ってるように言われただけだからな。お前をどうしろとかは」

「ふーん」

やり口が、まるで素人だ。これじゃあ、逃げてくださいと言っているようなもの……。しかし、せっかくの機会……。これを利用しない手はない……。郷原は言った。

「悪い……。あんたらに殴られたせいで、眼鏡がひん曲がっちゃまってよ。フレームが目に刺さりそうで怖い……。ちょっと眼鏡、外してくんない？」

「あ～……？　しょうがねえな。自分で取れないのかよ」

丸坊主が、立ち上がると、郷原に近づき、眼鏡を外してやった。それから後ろ手に縛られた手に、眼鏡を握らせてやった。

「サンキュー……」

郷原は、手のひらに収まった眼鏡を撫でる。おあつらえ向きに、折れてひしゃげた眼鏡は、ところどころ鋭利な部分が出来ていた。

それで、手を縛る布を擦る。

松木と丸坊主は、ヒマそうにきよろきよろして、所在無げだった。

「この店は、あんたらの知り合いの店？」

「あ～……？　さあな。お前に答えるこっちゃねえだろ」

「クク……。そりゃあそうだ」

手を動かす。擦っているが、なかなか思うように、布は破けてくれなかった。それよりも、手首を動かしているうちに、なんとなく緩むような気がする。眼鏡を、隙間に突っ込んでみた。隙間に突っ込み、こじってみる。こじっては休み、こじっては休む。連中の気をそらせながら――

。

こんなときの会話――。俺は、占い師だ……。人の心の間隙を突くのは、得意のはずだろ……？

「あんたら、タバコ好きだねえ」

「んあー……？」

「いや、俺こう見えて、タバコって吸わない男だからよ。よくこんな、閉めきったところで吸えるなあってな。俺が女だったら、タバコ吸う男なんか、絶対チューすんのイヤだけどな。あんたらの彼女、そういうの寛大なわけ？」

「あー……？ 別に向こうも吸うもん。両方とも吸うんだから、気にしねえだろ？ 俺は逆に、タバコ吸わない女のほうが面倒だ。なんか、冷やかな眼で見られるとムカつくからな」

「なるほど……。そりゃあ確かに、リクツだな……」

眼鏡が、こじった勢いで、余計にひしゃげてきた。ゆっくりと猶もこじり、こすり、捻る。ごくわずか、縛り目が緩む感覚——。手が、抜けるかも知れない、もう少しで——。

「お前、まるで吸わねえの？」

信じられないという風に、坊主が目を剥いた。アウトローのくせに、という意味だ。アウトローが、退廃の一つの象徴であるタバコを、吸わないというのが、坊主にはにわかには信じられないのだった。

「まあ、そりゃあ、吸ったことが無いわけじゃねえけどよ。どうもこう、溺れられないっていうか。タバコ吸うやつってさ、タバコの奴隷みてえなところあるじゃん。俺はプライドが高い男だから、そういう、何かの犬になる、奴隷になる、溺れて支配されてしまうっていうのを、どうも軽蔑したくなる……。そんなわけで、タバコも辞められないやつは、俺の中では、真に醒め切れていない弱虫……。脆弱者……。そういう認定になるね」

「言うじゃねえかコラ……」

松木が、立ち上がった。

「誰が脆弱だと？ それとこれとは関係ねえだろが」

「関係？ あるさ。一事が万事ってえヤツだ。タバコや女に溺れるヤツはどいつもこいつも、脆弱者……。精神の弱い、不安定な人間……。強がって、自分の弱さを隠そうとしているつもりでも、むしろその逆、本当は怖い……。自分の精神の弱さを見抜かれることが……。だからタバコを吸ったり、酒に溺れたり、女や子どもを縛り付けて、押さえこんで、捨てられる恐怖をごまかす……。とっくに見放されているのにな。クク……。どうせこのスナック、お前らの社長とやらがとち狂っている女のスナックだろ……。その女を恐怖で支配するために、わざわざ俺を連れ込んだ……」

「コイツ！！ フカしやがって！！ 社長はそんな人じゃねえ！！」

松木は怒りに任せて、郷原の胸倉を掴んだ。

「憐れだな、犬め……。お前の社長が女に貢ぐためのカネを稼がされている、憐れな犬だお前らは……。あらゆることに支配され、束縛されているくせに、自分は強いと虚勢を張る、惨めなワン公……」

「なんだと！！ テメエはヤクザじゃねえのかコラ……。テメエだって、上のモンに傳いて生きてんじゃねえのかよ……！」

松木は、郷原を締め上げた。締め上げて、髪を掴み、そしてボックス席の椅子に、顔を押し付けた。丸坊主も怒りの形相を浮かべて、郷原のところへ近づいてくる。

「構うことねえ、松木さん！ やっちまいますよ、こんなヤツ！」

「おう！ 黙って聞いてりゃあ舐めやがってっ...！ お前だってバックがあんだろがっ！ お前だってヤクザじゃねえのかよっ！！」

丸坊主が、後ろに回りこみ、手足を縊られて動けない郷原を起こした。松木がそれへと、高々と足を上げて蹴りを打ち込む。グフツと、鳩尾に鈍い音がして、胃液がこみ上げてきた。それでも郷原は矜持の眼をして、うそぶき続ける。

「ヘッ、俺は違うね。俺は何にも支配されない、溺れない。女にも、組織にも、上の連中にもな……。お前らみたいに孤独を恐れ、死を恐れ、自分のツマンねえ欲も捨てられない、欲に縛られた甘ちゃんと、俺と一緒にすんな。俺はいつだって死んでやる……。命も他人も、俺を縛ることは出来ない……。！！」

松木と、丸坊主の目が、衝動的な怒りで真っ赤に燃え上がった。

鳩尾に、松木の膝が入る。丸坊主が、背後から締め上げる。容赦なく拳が顎に食い込む。歯の碎ける音——。首筋に当たる殴打——。

次の瞬間、乾いた檄鉄音が響いて、丸坊主の体が壁に激突した。

ぎゃあっと悲鳴を上げて、その場に崩れる丸坊主である。松木がそれにひるんだ瞬間、郷原は松木の襟首を掴み、そのこめかみにお守りを押し当てていた。

「ひ、ひ、ひいいい！！！」

「動くな」

ベレッタ・M91——。イタリア軍の歩兵用自動拳銃——。郷原のお守り——。

「な、な、な……！！ んで、んなモン持ってる……??？」

「ヘッ、んなこと、お前に答えるこっちゃねえだろ」

「そ、そ、そりゃあ、そうだ……、あわわ！！」

「おいデブ」

郷原は、足元に崩れている坊主に、顔を近づけた。

「この布を解け……。早くしろ……」

坊主は、恐怖と苦痛に涎を流し、涙と鼻水で汚れていた。郷原が超至近距離から撃った9mm弾は、坊主のわき腹を深く抉り、壁にめり込んでいる。

その弾痕を、まるで華やかに赤い花びらが飾るように、肉片や細かい血しぶきがスプレー状に取り囲んでいた。銃口を押し当てるように発砲したせいで、発射時の葉莖の爆発がそのまま、壁に肉片を転写したようである。坊主の腹からは生々しい鮮血が滴っていた。

「あ、あう、うう……。こ、ろさな……いで……！！」

「いいから、早く解けコラ……。もう一発お見舞いしてやろうか、ああ……??？」

「ひ、ひいッ……！！」

狂気を宿した郷原の眼に、坊主は震え上がった。その足の布を解こうとしたが、思うように力が入らない。

「仕方がない……。松木とか言ったな……。テメエがやれコラ……」

銃口を押し当てられた松木は、青ざめて、唇を震わせ、恐る恐る足の縛めを解いた。

坊主は、這いずるように入り口のほうへ移動してゆく。それを目の端に捉えながら郷原は、すばやく松木の首根っこを押さえると、カウンターの中へ連れ込んだ。そして、今自分を縛ってい

た布で、松木の腕を縛り上げ、余った端を冷蔵庫の取っ手に結んだ。

「う、うう……」

血まみれで這いずり、ふらつく手でどうにか、ドアを開けようともがいている坊主を、カウンターから素早く移動して、蹴り上げる。

「はぐっ！！」

「動くな。動くとも余計失血して、死ぬぜ……？ 大人しくしていれば殺しはしねえ……。用が済んだらすぐ医者へ行け。もつとも、それまで生きていければの話だがな……。ククク……」

「う、ううう……！！」

坊主は怯え、涙を流し、失禁していた。それを一瞥して、店の中を捜す郷原である。

店内突き当たりの物置のようなスペースに、タオルが何本か吊るしてあった。それを取り、坊主と松木を固定し、さるぐつわを噛ませると、身体検査をして二人の携帯電話を取り上げ、店の電話の電話線も引き抜いた。

そして、店内の照明を落す……。

真っ暗闇——。勝負は一瞬で決まるはず——。

ベレッタを構え、ドアの脇に立つ。こいつらの兄貴分がここへ連れてくる男……。星の言うことが確かならば、それはたぶん、あいつのはず……。

郷原の予感が、彼の脳内にアドレナリンを分泌させる。その眼は、狂気に血走り、口元は興奮で歪んでいた。

1、

カウンターの上の水割りグラスの中で、大きな氷がぐるりと揺れた。自分以外にお客のいない店内。妙に静かだった。

カウンターの奥では、十数年来の愛人である久子が、川嶋のために惣菜を作っている。その顔を、水割りを飲みながら時折見つめる川嶋は、久子を本当にいい女だな、と思っていたのだった。

「いつも済まないな、久子……。忙しくてなかなか、家にも帰ってやれなくて」

それを聞いた久子は、菜箸で鍋をかき混ぜながら言った。

「なに言ってるの。お家賃だけ入れてくれればそれでいいわよ。あんたなんか帰ってこなくたって、ちっとも困らないわ。きなこもいるし」

「きなこ？」

川嶋が、タバコに火をつけてつぶやいた。

「もうっ！ 昨日、郷ちゃんのことでもメールしたとき、一緒に書いてあったでしょ。犬飼い始めたって。トイプードルよ。薄茶の毛色だから、きなこって名前にしたの。この間ねえ、郷ちゃんが買ってきちゃった犬なのよお」

「郷原が？」

川嶋の口元から、ぷかりと煙が漏れた。久子は出来たてのイカと里芋の煮っ転がしを川嶋の前に置くと、自分もグラスを持ってカウンターのほうへ出てきてから、内夫の隣へ腰掛けた。

「うん。この間、郷ちゃんとデパートに行ったの。深雪ちゃんのものを買いに。そしたら、そのペット売り場に、すごくかわいい犬が居てさ。うわ〜かわいい〜！ って、ついはいやいだら、次の日買ってきちゃったのよお、いきなり……。先月も、うちのテレビが壊れたって言ったら、72型の液晶テレビが送られてきたばっか。ホント、あの子の金銭感覚ってどうなってるのかしら……」

「郷原にとって、お前は母親代わりだからなあ。お前だけだ、郷原を叱れるのは……。俺はダメさ。あいつを叱るなどなかなか。利害関係である以上、あいつの気持ちを逆撫ですることも多い」

久子は、優しい眼を川嶋に向けていた。子どもに恵まれなかった久子にとって、少年の頃から何くれと無く世話を焼いた郷原悟は、息子にも等しい存在なのである。

「でも、ダメよもう……。あの子もいい大人だもの。昔みたいに、お母さん代わりに叱ったりなんて、今はもう出来ない……。郷ちゃん、寂しいんじゃないかしら本当は……」

「寂しい……？ あの郷原があ……？」

久子の言葉に、眼を丸くする川嶋だった。

「郷ちゃんのあの、酒の飲み方よ。アル中ぶりに最近、どんどん拍車がかかっちゃって……。こないだなんか、この店で郷ちゃん、いきなり札束を取り出して、他のお客さんに無理やり手渡してたの。もちろん止めたけど……。どうも、エリートさんが嫌いみたいでね。たまに一流企業の人なんかが、三次会の流れでこの店に来たりすると、絡んじやって大変。お前らに俺の気持ちは

わからないとか何とか。お前らより俺のほうが、カネを持ってるとかさ。占い師だと思って馬鹿にすんなとか。とにかくそんな調子で、あたしもときどき困るのよ」

久子は、真剣な眼差しで川嶋を見つめていた。川嶋は、思い当たることがあるのか、手元のグラスに視線を落とした。

「占い師だと思って馬鹿にするな——、か……」

川嶋の眼が、細くなった。思い出した何かを振り払うように、それから一気にグラスを飲み干した。

久子が、里芋の煮っころがしを箸で突つきながらつぶやいた。

「ねえ、郷ちゃんには、恋人みたいな相手はいないの？」

「あー……？」

「恋人でもいてくれれば、もうちょっと楽しくお酒を飲んでくれるんじゃないかしら。ねえ、あなたはそういう話、聞いてない？」

久子が言いながら、川嶋の酒のおかわりを作っていると、急に、川嶋の携帯電話が鳴り出した。

「なんだ……。こんな時間に……」

チッと舌打ちして、面倒くさそうにその電話に出る川嶋だった。

挨拶もそこそこに、電話の相手からの報告を受けた川嶋の顔は、見る間に陰しくなっていた。

「郷原が、攫われただと……?!」

思わず気が動転して、言葉が口を突いて出てしまった。すぐにしまった!と気づいて、携帯電話の送話口を押さえ、久子のほうを目の端に見る川嶋である。

久子はすぐに、尋常ならざる様子に気がついて、眼を剥くと、眉をひそめて川嶋のほうに釘付けになっている。

川嶋は、郷原が誘拐されたと連絡をつけてきた、郷原のエージェント、田代英明に向かって、小声を出した。

「田代、すぐかけ直す……。いったん切るぞ」

そういうと川嶋は電話を切り、店の外へと出て行こうとした。その背中に声をかける久子だった。

「郷ちゃん、なにかあったの……??」

川嶋は、動揺に肩を上下させながら、久子のほうを向いた。

久子は、なにも知らない。郷原の占い賭博のことも——。川嶋の仕事の詳細も、なにも——。

「ねえ!! 郷ちゃん、どうしたの?何があったの——??」

久子は、涙目である。

「何でもない……。ちょっと電話してくる。お前はここに居ろ」

「ちょ、ちょっと!」

川嶋は、久子に構うヒマもなく、すぐに店の外へと出て、少し離れた物陰から田代に電話を折り返した。久子は自分もすぐにドアの陰から、4、5メートル離れた道で話している川嶋の背中

を見つめた。久子の耳に、川嶋の怒声が聞こえてくる。

「バカ野郎……！ とにかくすぐに探せ！！ 山本は？！」

川嶋の背中のは、何度か大きく盛り上がって呼吸をしていた。動揺を少しでも抑えようと、必死で息をしているのが久子にはわかった。

また、怒鳴り声……。

「山本は、うちの債権者だぞ？！ それを連れ出すだなんて、何を考えているんだ郷原はっ……！！」

相手の間合いで、また一瞬の沈黙ののち、川嶋が反問する。

「アホう！ 郷原が自分で播いた不始末だろうがッ……！ 寺本にゃあ関係ねえ……！ とにかく探せ！ 何かあったら俺にすぐ知らせろ！ いいな田代！！」

そういうと、川嶋は、携帯電話を切った。振り向いたドアの陰で、心配で曇った顔が張り付いている久子に向かって、その眼を見ずに川嶋は言った。

「なんでもない……。ちょっとトラブっただけだ……。お前は心配するな久子……」

「ねえ、郷ちゃんはいったい、何をして稼いでいるの……？ ただの組員じゃないわよね？ あなたは郷ちゃんに、何をさせているの……？」

川嶋は答えずに、店の中へと入っていった。ここでは通行人の人目もある。久子に泣かれるとバツが悪い。カウンターの上のタバコを取ると、苛立ったように穂先に火をつける川嶋だった。

「郷原は別に、ちゃんと働いているさ。ヤクザのシノギが泥くさいのは、お前にだってわかるだろ久子……。郷原は大丈夫だ。お前はとにかく心配するな」

そういう川嶋に、久子は悲鳴のように喰ってかかる。郷原のことで、どれだけ辛い気持ちになっているか、郷原も川嶋も、まるでわかっていないことが、久子には我慢ならなかったのだ。

「心配するわよ！！ いつも病室で深雪ちゃんに、郷ちゃんのことを聞かれるあたしの身にもなってよ！ 郷ちゃんも郷ちゃんだわ！！ カネさえやれば放っておいていいと思っちゃって！」

川嶋は、黙ってタバコをくゆらせた。何も言えない……。信じるしかない……。郷原が無事なのを……。

「ことが落ち着くまで、深雪ちゃんには黙ってるよ久子……」

久子は、唇を噛み締めていた。

「大丈夫だ。あいつのことだから……。自力でなんとかできる男さ」

「……深雪ちゃんには黙ってるなんて、何が起ってるのかわからないものあたし……。何にも言いようがないわよ……」

涙が溢れそうになったが、それを水割りで流し込んだ。

(いつもそうだ……。男なんてみんなそう……。ロクなもんじゃないわ。面倒なことは全部女にやらせて、自分勝手なことばかり……。今だってあたしが、どんな気持ちで、深雪ちゃんの付き添いをしているか知りもしないで……)

久子は、苦しい病床でたったひとり、世界中の孤独という孤独を一身に背負いながらも、明るく健気に、郷原のことだけを案じている深雪のことを思った。

「ねえ……。郷ちゃんに、本当に恋人はいないの？」

「……？」

「あたしじゃあ、ダメよ……。あたしじゃああの子を引き止めるの、無理だわ。恋人でもいてくれたら、郷ちゃんのことはずんぶその人に任せられるのに……。あたしもう、あの子の面倒見るの、疲れたわ……」

川嶋は、泣きそうな久子の肩を抱いた。

(郷原……！ とにかく無事に戻って来い……！ 無事に……！)

二人は、身を寄せ合って天に祈った。

2、

「ダメだ……。寺本組は動いてくれない。俺たちだけでなんとか、郷ちゃんを探すしかない……」

がらんとしたコンビニの駐車場に車を停めて、3人は慌てていた。

「そんな！！ こういうときのための盃なんじゃないんすか！！」

浜崎が、苛立ったような声を上げる。

「……………」

田代は、ステアリングに突っ伏していた。

そのときだ。田代の携帯電話が鳴った。慌ててそれに出る。

「おう、俺だ」

「か、川嶋さんですか？！ す、すみませんっ！ 俺がついていながら、郷ちゃんをっ……！」

「いい。とにかく探せ。寺本にドジが知れたら、郷原の出世に関わる。あとあとのことを考えると、親父や本家の耳に、このことは入れたくねえ……。だからなんとか、お前らだけで郷原を探すんだ。俺に協力できることは、やれるだけやる。あいつは俺の弟だからな。お前、元はマル暴の刑事だろ？ 捜査に関してはプロじゃねえか。どうにか手がかりを見つけてこい。いいな」

「う、うわ、わかりましたっ！！」

電話が切れた。

「手がかりって……。そうは言ってもな～……」

田代は、ステアリングに額をぶつけながら、思案を必死でめぐらせた。不意に、バックミラーに映る山本の顔が見えた。

「そういえば山本先生……」

「え……？」

「山本先生は連中に、心当たりないのかい？」

浜崎が、後部座席で小さくうつむいている山本に首を向けた。

「そういえばあんた、さっき、あの男に妙なこと言われてたよな……。なんだお前か、とか何とか。向こうはあんたを知ってるみたいな口ぶりだったじゃないか」

田代もそれを聞きながら、山本のほうを向いた。

「郷ちゃんは、池田という男に目星をつけているようだった。このことに、その池田が絡んでいるということはないのかい？」

「そ、それは……」

山本は、青ざめて、唇を震わせた。

「こんな状況だ。隠さないで全部、話してくれないか先生……」

「あんたを騙した人間かも知れないんだろ？ けっきょくその池田ってのは……。庇うことなんかにもないじゃん。なのに、なんで言えない？」

山本はうつむいて、拳を膝の上で固くするだけだった。その様子を田代は、バックミラー越しに見つめる。

「なあ……。池田さんって、昔は厚生労働省のお役人だった人なんだろ？ お医者さんってえのは、やっぱり厚生省の偉いお役人さんと、付き合ったりすることはあるのかい？」

「はあ……。病院長とか、局長クラスになると、そういう付き合いもあるでしょうけど……。僕はただの勤務医だったから別に……」

「じゃあ、池田さんとはどうして知り合った？」

山本は、黙りこくった。

「なんだよ、言えないことなのかい？」

田代が迫ったが山本は、能面のように真っ白な顔をして、虚ろな表情だった。苛立った浜崎が、山本の体を揺すった。

「なんだよ、ぜったいなんか知ってるこいつ！ 言えよコラ……！」

山本の胸倉を掴む浜崎だ。

「……………っていた」

「あ……………？」

蚊の鳴くような細かい声で、山本がつぶやいた。

「困っていたんです、最初は……」

田代は、運転席から身を乗り出した。そして、浜崎を静止する。

「困っていた？ 何を……？」

「あ、赤ちゃん……………」

「赤ちゃん……………？」

「ええ……。ぼ、僕はあのとき、分娩中に母親が死んでしまった子どもを抱えていて……。身寄りも引き取り手もない赤ちゃんに、職員みんなで弱っていた……。だから、児童相談所に連絡したんです……。どうにか、その子を引き取ってもらえないかって……」

「それは、何年前の話？」

「4年前……。4年前です」

田代は優しく続きを促した。山本は無表情だった。しかし、むしろそれが、溢れそうな感情に蓋をしている証拠だと、田代にはわかった。山本は淡々と続けた。

「児童相談所に連絡したら、どういうわけか、その子の血液型を教えて欲しい、と言われまして……。血液型なんて聞いてどうするのだろうと思ったし、新生児は母親の血液型の影響を受けるから、判定が微妙なんです。それでもいい、とにかく教えろと」

「それで？」

「その子の血液型は、O型だった……。死んだ母親はA型……。だから、その赤ちゃんは間違いなくA型かO型なんですけど、それを報告した直後、すぐになぜか、NPO法人で里親斡旋をして

いるという人が、現れたんです……。それが池田史郎さん……。児童相談所からの報告を受けてやって来たんだと……。なんでも、ある金持ちが、養子を欲しいと言っていて、僕がそのとき困っていた赤ちゃんを、とても欲しがっていると」

「あるお金持ち——？」

田代は、眉間に皺を寄せていた。

「ええ……。名前も職業も言えないということでした。僕はその子のために、出生証明書を書こうとした。そうしたら院長が、それは向こうでやるからいいと言う。とにかくすぐに赤ちゃんをもらっていきます、という話で……。院長も、看護師たちも、それに関してなにも言わなかった。僕は、不思議に思いながらも、池田さんが元厚労省の役人だということで、信用してしまったんです。物腰もとても紳士的な人だし、なにより、池田さんの里親協会は、非営利団体で、あくまでも子どもの人権保護が目的なんだということでしたから……。以来、引き取り手のない赤ちゃんや、母親が育てられないという子どもを、何人か池田理事に託してしまった……。自分が忙しくて、そこまで手が回らないのを言い訳にして、池田さんに渡してしまった……」

山本は、自分の膝の上に肩を落して、そして、泣いていた。田代は黙って見つめていた。

「……疑うようになったのは、過去の書類を見つけた時です……」

「過去の書類……？」

「ええ……。病院に分院が出来たので、事務機能の一部を移転することになって……。事務長がいろんな書類を片付けるのを、僕は非番の日に手伝っていた。そうしたら、過去にこの病院で提出した出生証明や、死亡診断書の控えの束が出てきたんです。僕はなんだか興味があって、パラパラとめくっていた……。そうしたら、4年前のところに、僕が池田理事に託したはずのあの子の死亡診断書があったんです。しかもその日付は、病院から連れ出された日だった」

田代は、眼を剥いた。

「死亡診断書？」

「ええ……。死亡診断書は、病院で控えを保管しておく義務がある。僕が書いたものじゃない……。筆跡は、病院長のものだった……。院長を問い詰めたら、知らないの一点張り……。僕はもともと、院長とは上手く行っていなかったから、以来、そのことで余計に疎ましがられるようになって……」

「それで、病院を辞めたわけ」

山本は、小さく首を振った。

「いいえ……。理由は、それだけじゃありません……。死亡診断書が出されたあの子の、死んだことになっていた日付で、ある移植手術が、病院長の先輩のところで、行われたんです」

「……………??」

田代と浜崎は、揃って顔を見合わせていた。

「生体間肝移植……。医療従事者用の新聞があるのですが、それに生体間移植の実施された一覧が毎月載るんです。その新聞に載っていた日付と、ドナーの血液型、おおよその体重、性別、どれをとっても、僕が取り上げたあの赤ちゃんに違いはないと思いました。まさか、死にかかったお金持ちの子を助けるために、あの子を犠牲にしたんじゃないかって……。それで、恐くなって、病院からも、池田理事からも、離れたくなって……。今まで池田理事に、なにも知らずに、何人

か赤ちゃんを託してしまったから……。その子たちがどうなったかなんて、ちゃんと想像すると恐かった……。そんなことない、池田理事はいい人だと、自分に言い聞かせなければ、とても恐ろしかった……」

山本は、完全に泣いていた。

「でもさあ、なんつうか、他人の臓器なわけだろ？ そんなの移植すると、拒否反応とかさ、そういうのってどうなの？ 前からすげー不思議だったんだよ」

浜崎が、タバコを吹かしながら言った。

「サイクロスポリンA……」

「……………」

「サイクロスポリンAという、免疫抑制剤……。この薬が、1980年代に普及し始めて、世界中で人身売買事件は異常なほど増えているんです。この薬があるお陰で、赤の他人からの肝臓や腎臓移植が可能になった……。おおざっぱに言えば、ABO式の血液型さえ一致すれば、あとはこの薬でどうにか適合するんです。細密な型の一致が求められる骨髄移植などと違い、適応能力の強い肝臓・腎臓の移植は、かなり自由度が高い。そう考えると、あのとき、あの子の血液型を聞かれたのも、なんとなくわかる……。池田さんがまさか、そんなことを……」

「……なるほどな……。事情はだいたいわかったけど、でも、郷ちゃんが攫われた手がかりにはなあ……」

田代は頭を掻いた。浜崎がタバコの吸殻を窓の外に投げて、つぶやいた。

「そういえばあいつ……。変なこと言ってなかった？」

「変なこと？」

「ああ。山本センセも聞いただろ？ あのとき、便所の入り口で俺らを待ち伏せていた男、“なんだ、勘違いか” って、そう、口走っていた気がする……」

「言ってた……。そういえば……」

山本は、ずっと胸につかえていた秘密を吐露して、すっきりしたのか、少し柔らかい顔になって、自分の涙をフリースの袖口で拭くと、浜崎を見た。

「勘違い……。？ なにを勘違いしたんだ??」

「うーん……。田代さん、元刑事じゃないっすか。こういうとき、推理小説みたいにズバツと思いつかないんすか」

「あのなあ……。そうそう都合よく行くかよお～……。なんか手がかりとかなあ～……。手がかり……」

10秒ほど考え込む田代だったが、頭が混乱していて何も浮かばない。まずは神経を落ち着かせようと、ひとまずタバコを吹かすことにした。山本もジーンズのポケットを探っている。ニコチン中毒患者の行動パターンは同じだ。ヤニ中は気持ちが焦ると、なぜかタバコをふかす習性がある。

その山本が、不意にあ、と、小さくつぶやいた。

「そういえば僕は、こんなもの持ってた……」

山本のポケットにあったのは、桂川興産の2枚のチラシだった。ホテルで郷原に渡されたとき、なんとなくそのまま持っていたのだ。

「これ……、手がかりになりませんか」

そうって、田代に2枚のチラシを手渡す山本。

「これは……。そういえばあのときのチラシ……」

「なに？ なに？ それ」

田代の手元を覗き込む浜崎。1枚は出張ヘルスコンパニオン、もう1枚は司法書士のものだった。

「ん～……、司法書士……??」

田代は首を捻った。今、東京では、この司法書士、行政書士が過剰気味だとも言われている。その何割かは弁護士事務所やコンサルタント会社などに就職できず、かといって個人で大々的に商売をする体力もないから、自宅を事務所ということにして行うSOHOだ。

その怪しさが余計にネックになって、依頼がほとんど来ず、資格を取ったものの、月収は学生の小遣いぐらいにしかないというケースも多い。そういった背景と、この桂川興産のチラシを引き合わせると、なんとなくピンクチラシと司法書士が一緒くたなのが、田代にはわかる気がした。

“クリーム”のチラシに比べ、ほとんど気にとめていなかったそのチラシを、田代はくまなく、細かい文字のところまで慎重に見た。チラシの左下にごく小さな文字で、この広告主とおぼしき司法書士の名前が出ている。約款・免責事項などの細かい必須事項を、限られたチラシ面に詰め込み過ぎて、肝心の責任者先生の名前を入れるスペースが足りなくなったのだろう。ゴマ粒よりも小さな文字で、【司法書士・谷中 洋司】とあった。

「名前が判明すりゃあ、どうにか辿れるかも知れねえ……。この谷中洋司とかいうやつは、桂川興産と必ずなにか繋がりがある……」

田代はそれから、深呼吸を一つすると、携帯電話を取り出して、ダイヤルを回した。川嶋に架けるのである。川嶋はまんじりともせず待っていたのか、すぐに電話に出た。

「おう、俺だ。何かわかったのか？ 田代」

「川嶋さん、お手数かけてすみません……。司法書士って今、調べられますか？」

「司法書士？」

「ええ。郷ちゃんを攫っていった桂川興産が借りていた、電話対応代行の電話番号の一つが、谷中洋司とか言うやつ、司法書士事務所なんですよ。ヤクザ屋さんは弁護士とか、税理士とか、だいたいよく知ってるでしょう？ だから、川嶋さん知らないかなと……」

「谷中洋司、だな……。わかった。俺に心当たりはないが、俺の子飼いの名簿屋ならば調べられるかも知れねえ。すぐ調べさせよう」

「た、頼みますっ！！」

田代は祈るように電話を切った。それから3人は、タバコを吹かしては消し、消してはまた吹かすということをして、川嶋から連絡が来るのを待った。まんじりともせず、待ちつづける時間は、1分1秒が妙に長く感じられる。30分ほど経過しただろうか。田代の携帯が水戸黄門を奏でた。すぐに応答する田代であった。

「か、川嶋さん?!」

「おう田代。谷中洋司、わかったぞ？司法書士試験に合格したのは今年だ。年齢は22歳……」

「22歳?? そりゃあまた、ずいぶん若いですね」

「ああ。谷中洋司自体は、ただの小僧だが、調べてみたら面白いことがわかったぞ？ 谷中の父親は、政財界で問題児と噂されている、谷中信一郎という男だ」

「谷中信一郎……？」

オウム返しに、田代が聞き返す。

「父親の谷中は、元は政治家志望で、いろんな議員の秘書を転々とした男でな。政界で名を馳せることはなかったが、関わった議員はみんな大物政治家として活躍している。いわば、政治家プロデューサーとでも言うべきヤツだ。自分が意図する代議士の選挙工作をしたり、資金をかき集めたり、邪魔者を消したりと、汚い噂の絶えない男だ。その谷中は6年ほど前から、飯田継男という国会議員の後援会会長をやっている……」

「飯田継男?!」

その名前に、田代は仰天した。山本も眼を剥いて、田代が話している携帯電話に顔を近づける。

「飯田継男、厚生官僚出身の、筋金入り厚生族議員だ！ なるほどな……。じゃあその谷中の関係先に、郷ちゃんがいる……？」

「しかし、早く郷原を見つけ出さねえと、危ない。お前らは俺ほどあいつを知らない……。郷原はキレると、何をするかわからん男だ。手遅れになる前に、俺が今から言う谷中の関係先を片っ端から当たれ！ いいな！」

「う、うわ、わかりましたっ！」

そういうと、田代は大急ぎで、ポケットからペンと手帳を取り出した。川嶋が片っ端から読み上げる谷中の関係先を、必死に手帳にメモしてゆく。

「何かあったらすぐに俺に電話をしろ。いいな田代！」

「りよ、了解!!」

3、

電話が切れた。田代が手帳にメモした谷中の関係先は、自宅と、谷中が取締役を務める倉庫会社、その会社の子会社に、飯田継男の後援会事務所など、全部で5件あった。

「これを全部調べるんすかぁ……？ 場所は全部首都圏だけど、どこに最初に行くのかで、時間のかかりかたがだいぶ違うじゃないっすか。どうすんだよ田代さん……」

「うーん！ そうだよなあー！ どーしよ！」

ムンクの叫びのように、頭を抱えて悩み果てる田代であった。

「うーん、うーん……。こんなときは……」

「こんなときは……」

「う、占いで決めるか！ いっそ！」

「んあ～??」

田代はそういうと、ついさっき、ファミレスで山本が見ていたスポーツ新聞を取った。裏面から数えて2ページ目に、エロ記事とともに載っている、フェリシア・M・カサンドラ先生のデ

イリー星占いに目を通す。

「えーと、うーと。郷ちゃんの星座は……。そういえば知らねえ！」

「ダメじゃん……。田代さんの運勢でいいんじゃないの？　なんかあったら、社長に怒られるの田代さんなわけだし」

頭をボリボリ搔きながら、面倒くさそうに浜崎が言った。

「うあー！　まあ、参考までに見るかあ～……。えーっと、おとめ座、おとめ座……」

「いい年しておとめ座だって。プププ……！」

「うるさいなあ……。おとめ座……。あった……。なにになに？？　“望み通りの方向へ進展がある日です。特に親しい人への頼み事がある場合、話してみるといい反応が。その一方で、人間関係には慎重さが必要。甘い言葉や誘惑に乗りやすいですから、冷静になって”　だって。うが～！

カスほども参考にならねえ、フェリシア・M・カサンドラあ～～！！」

「しかも書かれていることが真逆じゃん。積極的に働きかけろと言っておきながら、人間関係には慎重になれだって。どんだけ保険トークだよ……。俺、前から思ってたけど、占いの文章ってさあ、なんかこう、イタいんだよな～……。どれを読んでも」

「確かにな……。こんなモン、なんであるんだろって、世間のヤツはもっとちゃんと考えたほうがいだろうな」

「あの……」

山本が、口を挟んだ。

「ん？」

目線は新聞を見ながら、肩と首だけ振り返る田代である。

「あの……。差し出がましいようですが、そんなことするより先に、とにかく探し始めたほうがいいのでは……」

「おお！　そういえばそうだ！　こんなことしてる場合じゃねえ！　気が動転してつい、ひとりノリツッコミをしちまった。行くぞ！」

サイドブレーキを解除し、アクセルを踏み込む田代である。

「最初はどこから？」

浜崎が聞いた。

「とりあえず、谷中が役員を務めている昭島の物流倉庫だ」

そうって、ステアリングを川崎街道に向ける田代。ここから昭島へは、昼間だと小1時間かかるのだが、明け方で交通量が減っているため、30分程度で到着した。

昭島とか立川、福生、武蔵村山などの多摩北西部は、都心に向けて集荷・出荷されるための倉庫が数多くある。

しかし、谷中が役員をしているレインボー物流の倉庫周辺には、ファミレスで見かけたフェアレディZと、白いワゴン車が見当たらない。しかも、集荷と出荷の荷物の積み出しが頻繁に行われていて、とても人を監禁して、痛めつけたりなどしている余裕は無さそうだった。

「クソッ！　たぶんここは違う……。無駄足だったか！」

「さっき川嶋社長が教えてくれたこのメモを見ると、レインボー物流って、千葉の流山にもありますよね？　そっちにも行くんすか？」

「いや、たぶん、そこもここと同じだ。これでわかった。郷ちゃんが監禁されているのは、倉庫じゃない……」

「このあとで近いのって言ったら……、赤坂にある飯田議員の後援会事務所、それと、初台の谷中の自宅マンション、銀座にあるレインボー物流のビル……。そんな感じっすかね？」

「……………」

田代は、夜明けが近い闇の空を、じっと見つめながらステアリングを握り、考えていた。

「いや、違う気がする……。監禁されているのはそんなところじゃない……」

「でも、他に手がかりはないじゃないっすか」

「まあそうなんだが……。そうだなあ、とにかく都心へ戻りながら考えよう」

アクセルを踏み込む田代だった。とにかく、多摩から再び都心へと向けて走り出す。郷原はどういうわけか、23区内に居る……。そう思えてならなかった。

「……………」

山本は、ぼんやりと景色が流れるリアウィンドウを眺めていた。それをミラー越しに見る田代である。

「どうしたよ先生……。元気無いじゃない……。まあ、こんな状況で元気出せってほうが無理だと思うけど……」

「飯田継男……」

「ん……？」

「飯田継男、話題になってましたよねそういえば……」

「話題？」

さっきからやたらと、車内に煙を吐き散らしている浜崎が、山本を振り返った。

「ええ。週刊誌やワイドショーで数年前……。なんでも、飯田議員の若い愛人に子どもができて、その子がこれまた障害児だと……。ちょうど、血液製剤から感染したウィルス性肝炎が、深刻な社会問題になっていて、それをもみ消してもらうために、時雨製薬から飯田と、飯田が所属する派閥や、厚生省法案関連の委員会の議員たちに、莫大な賄賂が行われて問題になっていた時期と、愛人の子どもの誕生が重なっていましたよね」

「……………??」

浜崎は、腑に落ちない顔をしていた。田代はさすがにいぶし銀だけあって、そういうことはよく覚えていた。

「そうだった。意地悪な週刊誌が、患者たちを泣かせた報いだとかなんとか、書きたてたっけ。国会でも連日、時雨製薬からの賄賂のことで、飯田の派閥のトップを証人喚問していたな。テレビでは、子どものことはさすがに触れていなかったけど、週刊誌とかオヤジタ刊とかは、子どもが肝臓障害児だっていうので、面白おかしく書き立てていたよねえ。そのうえ、その愛人がまだ19とか20くらいで、飯田とは20も年が離れているとか。飯田の本妻とどうしたとか。世の中の下世話根性をくすぐる事件ではあったな」

「飯田議員はもしかしたら、その愛人との間に生まれた子を救うために、時雨製薬や、池田さんを使って、ドナーを手に入れようとしたのでは……。それがたまたま、あの赤ちゃんだったんじ

やないかって、そう思うと僕は——……」

「そういえば飯田の愛人って、銀座のホステスじゃなかったか？」

「そうですね……。なんか、そんな話だったように思います」

「水商売を1度でもやった女は、なかなか水商売から足を洗えないもんだ。今もどこかで店をやっているのかな……。その女」

「さあ……」

「……………」

田代は考え込んだ。とても引っかかる——。

「ものすごく飛躍した推理だけどさ——」

田代のつぶやきに、山本が視線を向けた。

「俺の伯母の話なんだけど、伯母さんの旦那がさ、若くして病死したんだよ。んで伯母さんはけっきょく、若死にした旦那の弟とまた結婚した。昔はこういうことは、ときどきあったんだって。死んだ兄の嫁を弟が娶るとか、逆に嫁に死なれた男が、その嫁の姉妹をまたもらうとか。もしかして、今言ってたその女、案外、飯田にとっては恩師同然であるだろう谷中が、身請けしていたりしてな……」

「……………！！」

「あり得ない話じゃないだろ？ 政財界なんてのは、封建時代のような政略結婚が、未だに平然と行われる社会だ。ましてや飯田継男は、これから政界で頭角を表すであろう、期待の若手議員……。愛人だなんて、世間体が悪すぎる。ほとぼりが醒めるまで、誰かに愛人を任せているんじゃない……。だとすると、もしかして郷ちゃんは、その女の店にいるのかも……。閉店後のスナックとか、クラブ……。監禁するのにとてもふさわしい……」

「で、でも、ど、どうやってその店を探したら……??」

「うーん！！ そうだよなあ～！！ あの女、なんて名前だったっけえ～！！ さんざ週刊誌に出てたのに、俺、思い出せないよおお～！！ うえーん！！」

助手席でタバコを吹かしていた浜崎が、見かねて助け舟を出した。

「んなの、ネットカフェで調べりゃいいじゃないっすか」

「な～?? ネットカフェ??」

浜崎は、チッと舌打ちすると、呆れ顔を作ってみせた。

「これだから中年は……。24時間やってるでしょ？ ネットカフェ。そこ行って、ネットで調べてみればいいじゃないっすか。そんなに世間を騒がせたネタなんだったら、絶対に意地悪な書き込みがしてあるから、おおよその場所くらいわかるんじゃないんすかね？」

田代は、眼を輝かせた。

「は、浜崎ちゃん、お願い……。つ、連れてって、ネットカフェ！！」

「しゃーないな。んじゃあ、とりあえずどっか、繁華街行ってくださいよ。ここからなら渋谷が近いな。明治通り沿いに、ネットカフェがあった気がする。田代さん、とりあえず渋谷へ行って」

「わ、わかった！！」

田代は、アクセルを踏み込んだ。外は少しづつ、濃闇が薄闇へと変わりつつあった。

1、

しんと静まり返った、夜明け間際の空気——。空調はしてあるようでも、郷原の手の中に収まったベレッタ・M91の銃把は、芯から冷たく凍り付いていた。

唸り声ができる——。さっき、どてっ腹に一発、お見舞いしてやった坊主が、失血のショックで呼吸がおかしくなり、気色の悪いひきがえるみたいな、死の淵での生命活動をしている音だった。

(うるせえな——)

郷原は思った。

[面倒だ、殺っちまえよ郷原——]

頭の中で、別の誰かの声ができる。郷原は、その声に反問した。

(いいや——。唸り声は、やつらの気を引かせるのにちょうどいい……。もう少し唸らせておいたほうが好都合だ——)

その声は、いつも郷原が、何かに緊張すると聞こえてくる。怯え、恐れ、悲しみ、荒れ果てている自分自身を、郷原に気づかせようとする。

(黙っている、今は——。奴らを完全に制圧するまでは——)

銃把を握る手が、乾いた氷に張り付いてしまったようにこわばり、離れない。連中がいつ来るのかわからない——。

郷原は銃把を握る手を、引き剥がすようにほぐして獲物をひとまず下ろすと、カウンターの上に置きっぱなしになっている松木のマルボロを1本取り火をつけた。吸い込む煙に、体中の血液が引き締まる。ニコチンの薬理作用で緊張感をごまかすのだ。

シミュレーション……。連中の人数はたぶん、二人……。こいつらの言う社長と、もう一人は恐らく、池田史郎——。占いの神が、星々の言うことが本当ならば、それは間違いなく池田史郎だ——。

[確証はあるのか——？郷原……]

また、頭の中の声である。それに反問する郷原だった。

(確証——?? バカを言うな——。占星術に、確証もなにもあったもんじゃない……。ただのでたらめな星の並びを、俺が勝手にそう読んだだけだ)

[ならばなぜ、池田が来ると断言できる——?? 断言したとたんに占いは、占いではなくなるのではないのか？ 郷原……。言い切る——。それは単に信じるということ——。つまり——]

(そうさ、賭けだ。占い自体が危険な賭け……。賭けに勝つか負けるかだけのこと……。占い師など、妙な学理を振りかざし、偉そうなことをフカしたところで、どいつもこいつも、ただの薄汚いバクチ打ちに過ぎない)

[では、お前はなぜ、自分の気持ちにこうも命を賭ける……。？ まさか、このまま未来永劫、自分は勝ち続けるとでも——？]

(クク……。それはな……。愛されているからだ。天上の悪徳の女神にこの俺が、惚れられているから——。女神は俺と、交わりたがる……。嫉妬深くて淫乱な、醜悪な運命の女神……。俺に

抱かれるためならば、どんな未来も教えてくれる……。俺はその女神ですら、最後には捨ててやるのだ——)

頭の中の声は、沈黙していた。イメージを再び、繋げてゆく……。

ドアが開けられる。その隣に立っている自分。最初に入ってくるのは、連中の言う社長……。坊主頭の唸り声に気づく。しかし真っ暗な店内。眼は慣れていない。手探りで照明のスイッチを探す。その後ろにいる池田——。一緒に店内に入ってくるはず——。

(そうしたら俺は、すぐに池田の襟首を掴み、ベレッタを押し当てる。そしてそのままドアの前に立って、連中の退路を断つ……。あとは思うままだ。ことによっては2、3発鉛弾を喰わせてやる……)

ホテルのように、タバコの穂先が点滅していた。フィルターぎりぎりまで吸い込んで、灰皿に押し付けた。視界がだいぶ、暗闇に慣れている——。もう一度、ベレッタ・M91を握り直した。

遠くから、コトリ、コトリと響いてくる靴音——。

(……………！！ 来た——！！)

すぐにドアの横、蝶番で開かない左側に立つ。かすかに話し声。ベレッタを、右耳の辺りに掲げる。眼を閉じ2回、深く息を吸った。

カラン……、と、ドアにつけられているベルが鳴った。男の野太い声——。

「なんだ……？ 電気もつけねえで……。おい松木！」

50代始め頃の、頭の薄いずんぐりとした男が、キョロキョロしながら1歩、2歩と店内へ踏み込む。

郷原は、息を殺していた。その後ろにもう一人の人影——。ずいぶん小柄だ。これなら、押さえ込むのはわからない——。郷原は闇の中、手探りで明りを探す男の真後ろにいた人間を、いきなり、左腕を伸ばして押さえ込み、すかさずベレッタを押し当てた。

「きゃあああ！！！」

甲高い声に眼を剥く——。女——！！ なんで——！！

「てっ！！ てめえ！！」

「イヤああ！！」

「騒ぐな！！ ブッ殺すぞ！！」

ベレッタの銃口を、女の頬に押し当てながら、郷原は怒鳴った。

そのすぐ後ろ——。

「あ、あわわ！！ あう……！！」

首を向けた郷原。女のすぐ後ろに、もう一人、中年の男が立っていた。

(しまった——！！ 池田はこいつだ——！！)

「う、うわあ！！」

衝動的に、ドアの向こうに走り去ろうとする池田と思しき男の足元に、郷原は、女を捕まえたままの姿勢で、9mm弾を打ち込んだ。

アスファルトに跳弾する衝撃で、火花がパッと散り、耳を劈くような爆発音がした。

「！！！！！！」

その際に、不意に周囲が明るくなり、郷原に突進する男——。郷原は、突き飛ばされた拍子に女を離すと、その場に倒れこんだ。その上に、馬乗りになる男である。ベレッタを握る郷原の右手首を掴み、押さえ込んでいた。

「てめえ……。よくも……。俺の子分をっ……。！！」

電気の灯った店内は、丸坊主のおびただしい血液で赤く染まっていた。女がそれを見て、また悲鳴を上げた。

2、

「な、なあ！！ 今、銃声が聞こえなかったか？！」

「え、ええ！！ き、聞こえました！！確かに……。！！」

飯田継男のかつての愛人、琴子という女が経営するスナックが、どうやらこの界隈であるとインターネットで見つけて、田代と浜崎、山本は、コインパーキングに車を止め、ちょうど辺りを探そうと思っていたところであった。

曲がり角の向こうから、血相を変えた男が走りこんでくる。

「あ、ああ……。！！ た、助けてください！！ 拳銃を持った男が、あ、あそこのスナックに——！！」

そう言って、3人の元に飛び込んできた男は、今度はさらに眼をひん剥いて、口をパクパクさせると、再び踵を返して、脱兎のごとく逃げようとした。

「な、なんだ?? こいつ——」

「池田理事！！」

山本が、叫んだ。

「浜崎さん！！ 捕まえて！！ 池田だ！！ 池田理事長だよ——！！」

「ええ～?!」

とりあえず、走る浜崎。さすが浜崎は、まだ20代だ。池田がパニックでよろけた瞬間に追いついて、池田をあっさり組伏せてしまった。

「く、くそっ！！」

浜崎の股の下で、池田史郎は身悶えたが、もう観念するしかなかった。田代と山本が、遅れて小走りになりながら、池田の元へやってきた。その前にしゃがみ込む田代である。

「あんたが、池田史郎さん? 今言ってたスナックはどこだ。琴子という女の店だろ? 案内してくれ」

「う、うう……。わ、わかったよ……」

池田は、組伏せられた拍子に、頬をすりむいていた。そこを手で擦ろうとしたのを、浜崎が後ろ手にねじり、自分が着ていたパーカーで、きつく縛り上げた。

「や、山本くん……。なぜ、山本くんがこんな連中と……。?? あの銃を持った男と、知り合いなのか?」

「銃を持った男……。? 発砲したのは、郷原……。?」

パン、パンと、立て続けに2発発砲音がした。まさか——！！！！

「急ごう！！ 郷ちゃんが危ない！！」

3人は頷きあうと、池田を引きずるようにして、先を急いだ。ビルの角を曲がり、車道を挟んだ向かいにある白いマンションの1Fにあるスナック、“ミラージュ”へと向かう。明け方近いせいか、野次馬はほとんどいなかったが、それでも上のマンションに住む住人が、銃声に驚いて2、3人、寝巻き姿で階下を覗き込んでいた。

「さて、どうするかな……」

つぶやく田代であった。

「中にいるのは、何人なんだ？」

浜崎が、池田の腕をねじ上げる。

「あ、あたた……！！ わ、我々は、私も含めてご、五人です！」

「じゃあ、中には男が4人……？」

「いいえ、ひ、一人は女……」

「じゃあ、3対1ってことか。いくら拳銃を持っていても、多勢に無勢だ。やはり撃たれたのは、郷ちゃんのほうかも知れない……」

「とにかくあんた、どうにか扉を開けさせろよ」

池田をねじる手に、更に力を込める浜崎であった。

「わ、わかりましたっ！ だ、だから離して！ イタタタ……！！」

「ケッ」

腕に込める力を、ほんの少し緩めてやる浜崎。それから、体で押すようにして、池田をドアの前に立たせた。

「た、谷中さん……！！ わ、私だ！ 応援を連れてきた！ あ、開けてくれ！！」

池田の声は木製のドアにぶつかって、明け方の澄明な空気の中に反響していった。その声が妙に大きかったので、田代と山本は、思わず周囲を振り返ってしまった。

反応はない。恐らく、扉の向こうの連中の精神は、極限状態のはずだ。そんなとき、小手先の智恵など、余計に神経を逆撫でするだけだろう。必死に訴える以外にはないと田代は思った。

「ご、郷ちゃん……！ 俺だよ、田代だよ……！！ 助けに来た！ 中にいる人も聞いてくれ！

お、俺たちは丸腰だ。池田さんも一緒だ。ここにはお医者さんもいる！ 頼む、ドアを開けてくれ！ う、撃たれた人がいるなら、早く手当てをしないとっ……！」

田代の声もまた、夜明けの街へとこだましていった。しんと静まりかえった夜明けのスナック。新聞配達の若者が、いぶかしげにミラージュの隣の階段を、新聞を抱えて上がってゆく。

何秒、何十秒、経っただろうか。その間、ドアの前にいた4人は、それぞれが、まばたきするのも忘れるほどに固唾を飲んで、視線を1点に集中させていた。

突然、ドアがギシリとしなり、恐る恐る、細い空間が開いた。その向こうの暗闇から、白くて華奢な指先が、ニュッと覗く。美しい、桃色のネイルアートが施された、形の良い指だった。指は、少し間を置くと、それから一気にドアを開け放った。

中を覗いた4人は、啞然——。凄惨な血溜まり——。

ドアを開けた女は、恐怖に顔を引きつらせ、唇を歪めている。田代たちは、女を突き飛ばすようにして、中へと踏み込んだ。

左上腕から血を流した郷原が、狂った野獣のように肩を上下させて、右手で銃把を握り、足元に倒れている男の鼻先に、銃口を突きつけていた。倒れている男は、郷原の足元で震え、懇願の媚びをその眼の色に浮かべていた。

「……………！！」

山本はすぐに、店内奥で気を失っている坊主頭に気がついて、そこへ駆け寄った。坊主はさるぐつわを噛まされ、腕をタオルでトイレのドアに括られ、腹からどくどくと黒い血を流し、意識が無かった。

「た、大変だ！！ す、すぐに救急車を！！」

山本は叫んで、坊主を縛る手を解き、床の上に寝かせた。

浜崎はすぐに池田を、自分のパーカーで縛ったまま、丸坊主が倒れているトイレのドアの前に連れていき、縛りなおした。

「あんた、ごめん……。ガムテープ、ある？」

茫然自失の女に向かって、田代は尋ねた。

「え……………？」

「あ、いや……。ガムテープがなければ、紐とかでもいいんだけど……。大丈夫、俺たちはこれ以上、あんたたちに危害を加えたりしない……。ただちょっと、この谷中信一郎さんと、池田史郎さんに、聞きたいことがあるだけなんだ」

「あ……………」

女は大人しく、カウンターの流し台の下から、ガムテープを取り出すと、田代に手渡した。その横の冷蔵庫にもう一人、ガラの悪い男が縛られている。

男は、自力でさるぐつわを解くと、手を縛られたまま怒鳴った。

「あ、あいつが撃ったんだっ……！！ いきなりっ……！！」

そう言って、郷原に顎をしゃくった。よほど恐ろしかったようだ。

田代はガムテープを受け取ると、谷中の腹の上に馬乗りになり、その手首をガムテープでぐるぐる巻きにして、さらに肩と腕を、胸を取り巻くようにして幾重にもガムテープで巻き、床の上に転がした。それから、石のように硬直している郷原の肩を叩くと、その手に握られているベレッタ・M91を、指を1本1本ほぐすようにして剥がし、どうにか取り上げた。

「それより、早く救急車を！！ この人、意識レベルが下がっている！ 早く病院へ連れて行って輸血しないと、死んでしまうぞ！！」

「だ、だめだっ……！！ 救急車などっ……！！ せ、選挙が近いんだっ……！！ 警察沙汰になりたくない……！！」

谷中が、うめくように言う。その言葉に、衝動的な怒りで頬を染める山本だった。

「あ、あんたの部下じゃないのか！ あんたの命令を守って、こんなことになったんだらう？！

それを見殺しにするだなんて！」

それまで、石のように動かなかった郷原が、再び野獣のように息づいて、転がっている谷中の顔面を蹴った。

「ご、郷ちゃんっ！！」

郷原につかみかかるようにして、その長身を抑える田代である。

「ためえ……、病院ぐらい行かせてやれよコラ……。選挙だぁ……?? コイツが死んだら、俺がケーサツ行って全部ゲロってやろうか……。ああ……?? お前らがある国会議員のために、裏口座を集めてマネーロンダリングしていることも、時雨製薬とツルんで人身売買していることも、全部ゲロってやる……。俺を舐めんじゃねえぞコラ……」

怯えきった谷中を、地獄の悪鬼のようにすさまじい顔で睨み、その髪を引つつかむ郷原。

「ひっ! ひっ!! わっ……! わかったっ! びよ、病院に行っていっ……! ま、松木を解いてやってくれっ! 松木っ! お、お前が坊主を医者へ連れていけっ……! 救急車はダメだっ…!!」

「わ、わかったよっ!!」

髪をアップにしてきれいに巻き上げ、金のイヤリングをした黄色いスーツの小柄な女が、男たちの修羅場で一人、じっと息を潜めていた。

「こっ、琴子っ……! 松木を解いてやれっ……!」

女は能面のように張り付いた顔のまま、無言で頷くと、冷蔵庫に括られている松木の縛めを解いてやった。自由になった瞬間、すぐに琴子を突き飛ばし、身を乗り出す松木である。カウンターからフロアのほうへ出てくると、いきなり一発、郷原の顔面にパンチを入れた。

琴子は顔を手で被って、きゃあっと小さな悲鳴を上げる。いきなり殴打された郷原は、思わず谷中の足の上によろけて、尻餅をついた。松木の体中が、怒りに震えていた。

「舐めやがってっ!! このぐらいじゃ気が収まらねえが、今回は仕方がねえ……! とにかくこいつの治療が先だ……! いつかぶっ殺してやるから覚えてろっ……!!」

「ヘッ、上等だコラ……。いつでも来いよ……。返り討ちにしてやるからよ……」

ケッ、と吐き捨てるように、唾を吐くと、松木は坊主の肩を掴んだ。坊主は巨体で、100kgほどはありそうだ。松木一人ではどうにもならないので、山本、浜崎、田代と、琴子も運ぶのを手伝った。坊主を店の外に止めてあったフェアレディZに乗せると松木は、苛立ったようにイグニッション・キーを回し、何回かアクセルを吹かして周囲を威圧し、そのまま急発進していった。

たぶん、懇意にしている闇医者のところへでも行くはずだ。衆議院の通常選挙が近い今、飯田継男のスキャンダルは、飯田でメシを食っている桂川興産の松木たちにとって、痛手である。普通の病院へ行って警察沙汰にされるような、野暮なことはするまい。

田代は、琴子という女を振り返った。いつか週刊誌で、何度も見かけた顔――。

(この子が、飯田継男の愛人だった女の子……? こうして見るとまだ、少し幼い顔をしているな……。この子の両親は、娘がこんなことになっているのを、どう考えているんだろう……)

確かに、美人だなと田代は思った。しかし、谷中や飯田のような地位のある大人が、とち狂うほどの娘とも思えない。うつむいたままの硬い表情の琴子に、田代は言った。

「悪いね琴子さん……。ちょっと谷中さんと池田さんから俺たち、話を聞きたいだけなんだ。谷中さんもたぶん、俺たちのことを誤解しているようだしな。それだけだよ。それが済んだら池田を連れて、俺たちは帰るよ……」

「わ、わかりました……」

小さな声で琴子は頷いた。

3、

シュンシュンと、やかんの口から湯気が噴出す。さっきまで戦場のように緊迫していた空気が、だいぶやわらいでいた。

それでも床に転がされた谷中と、縛られた池田の構図が、まだ緊張感の残滓を漂わせている。

「こりゃあ、リフォーム呼ばないとダメかもな……」

そこここに、血痕が染み込んだ店内を見回しながら、田代がつぶやいた。モップで擦ったくらいでは、落ちそうにないほど、床のじゅうたんが血で汚れている。

郷原の左肩からは、まだ出血が続いていた。拳銃を奪い合って谷中と揉みあったときに、谷中に撃たれた傷である。

銃弾は体をかすめているので、致命傷ではないが、それでもだいぶ深く肉が抉られ、骨が多少砕けているようだった。相当痛むのをかみ殺しているようで、その額に脂汗が滲んでいた。

「あの……」

琴子が、郷原の肩の傷に、タオルを当ててやろうとした瞬間、谷中が眼をひん剥いた。

「琴子っ！ お前は引っ込んでいろっ！」

「は、はいっ……！」

琴子の眼に、怯えの色が浮かぶ。まさか、嫉妬——?? 田代は一瞬、下衆の勘ぐりでそう思った。

縛られていた池田が、不意に懇願の声を立てる。

「わ、悪かった。承認のことならもう諦める。今回は誘拐なんてして、本当に申し訳なかった！

あの写真がドアの前に貼られて以来、わ、私は毎日生きた心地がしなくて……。ただ、謝ろうと思ったんだ……！ 攫ってでも、じっくり話せば、きっとわかってもらえると思って……。まさか、拳銃を持ってるなんて思わなかったけど……。頼むっ、もう許してくれと、あんたらのボスに言ってくれっ！！ あんたたちの恐ろしさ、つくづく身に染みたよ！！」

池田は、必死の形相でうなだれていた。体が括られているので、頭を下げるしかできないのだが、土下座でもしそうな勢いだ。

「俺たちのボス？ 承認？ 写真?? なんの話だ……??」

郷原が、苦痛に顔を少し歪めながら、池田を睨んだ。

「と、とぼけないでくれ！ あんたたち、針陽薬品会社の息の者だろう？ 中国マフィアの……。それがなぜ、山本くんと一緒にいるのかはわからないが……」

「ああ……??」

痛む肩を押さえながら、眉間に皺を寄せる郷原だった。話がまったく見えない。

浜崎が、急に後ろから口を挟む。

「そういえば、俺がファミレスで向き合ったさっきのリーゼント男も、中国がどうのとか、先生がどうのとかって言ってたな……。あんたら、何をしてるんだ？」

「ちょっと待て。お前ら、俺たちを何と勘違いしている？ 俺は中国マフィアなんか知らねえぞ」

「じ、じゃあ、近藤を殺したのは、あんたたちじゃないのか……？」

池田の上ずった声に、山本が思わず身を乗り出した。

「え？ 殺された？ 近藤さんが？」

「ああ。ものすごく残忍な方法で……。死体は4日前、羽田沖で見つかった。身元不明死体として……。警察発表を聞いて私にはすぐにわかった。その死体は近藤だと。い、いくら私と近藤が、時雨製薬と組んで、同じ薬の承認を針陽薬品と争っていたからって、こ、殺すことはなからうに！！」

山本はそれを聞いて、一瞬で肌があわ立った。

(なんだコイツ……。タマを狙われている可能性があるな……)

星を見て近藤の身の上を、そう予想していた、郷原の先日の占いを思い出していたのだ。

「もうやめろ、池田さん。こいつらはだから、中国とはまるで関係ないんだよ。さっきからそう言っているだろう？ あんたが近藤の死体写真で脅迫されて、パニックになってたところに、たまたま、こいつらの妙な呼び出し電話がかかってきただけだ。真相を問い詰めようこの男を攫ったら、どういうわけか拳銃を持っていて、こんなマヌケなザマになっちまったが……。お前たちは何者だ？ まさか、ただの素人だなんて言わせない」

「まあね……。俺は占い師だ」

「う、占い師、だと……？！」

谷中が眼をひん剥いた。池田も唾然とした顔をしている。カウンターの隅でうつむいていた琴子が、顔を上げて郷原を見つめた。

「ま、まさか、占いで俺たちのことを、嗅ぎ付けたとでも……??」

首をかしげてみせる郷原である。しかし、首を動かすと、同時に傷口が痛んで、思わず上体が伏せた。

「イテテ……。ま、そんなところ……。信じる、信じないは勝手だけど……。お星様が俺にいろいろ教えてくれたのさ。あんたらの悪事のことをな……」

「は、はははっ……。！ 冗談もいい加減にしろっ……。！ 占い師だと……。？ ふざけるなっ！！」

谷中は縛られ、転がされている自分の無様な姿も忘れ、一笑した。

「ふざけてねえよ別に、谷中さん……。あんたが必死で、面倒を見ていた飯田継男のことも知っている。六本木のクラブ“デスティニー”……。知ってるだろ？ あんたの先生の秘書が、先生の代理でよくその店に来てな。そこでお客を取っていた俺に、どっかから仕入れてきた株のインサイダー情報が本当かどうか、占わせてたぜ？」

「う……。、そういえば聞いたことがある、飯田の秘書に……。悪魔のように未来を言い当てる占い師がいると……。お互いに誓約書を取り交わし、占いが外れたときにはそれ相応の代償を払うと約束する、気狂いの占い師……。それがまさか、お、お前なのか?!」

「クク。知っているなら話は早い。近々、大人物の占い鑑定を控えていてね。その爺さんに、俺はあるゲームの勝敗を予想してみせなきゃならない。ただ、せつかくの政財界のドンが遊びに来るわけだから、俺たちも多少サプライズを演出してやろうと思ってな。たまたま、そこにいる山本先生が、詐欺に合ったのをきっかけに借金でコケたから、んじゃあ山本先生をハメたやつ弱

みを握って、山本先生とゲームに参加させたらかなり楽しいんじゃないかってよ……。俺たちの狙いは、山本先生をハメた池田理事長ただ一人だ」

「ゲ、ゲームだと……?? わ、私が、山本さんと……?!」

「フフ……。池田理事長は、純朴な山本先生を、たくさん騙していたでしょう……。? この際、白状したらどうなんです。里親協会の理事長という肩書きと、元役人という肩書きを利用して、いろいろえげつないことしてきたはずだ。人身売買とか、臓器売買とか」

ガタンと、椅子が倒れる音がした。琴子が口元を押さえて、顔面蒼白になっている。

「ぞ……。臓器、売買……。??」

「こ、琴子っ……。! お前は家に帰っていなさい! お前はこんなこと、知る必要はないっ!!」

谷中が、怒鳴った。

「う……。ううん! 聞くわあたし……。! 本当のこと、ずっと知りたいと思ってたもの……。あの、う、占い師さん……。話して……。詳しく……。!」

郷原は、琴子のほうを振り向こうとしたが、傷口が痛んで思うように体がねじれない。さっきから、傷のせいで悪寒が始まっていた。

大量に出血すると、その後で高熱が出る。傷口から大量に体内に侵入してくる雑菌を殺すため、白血球が活動しやすい温度になるよう、自然の摂理でそうなっているのだ。

「……。俺に聞くより、そこの池田理事に聞いたほうが、いいんじゃないねえの? すべて何もかも、真相を知っているだろうからな……」

琴子は黙って、そのまま郷原の隣に来た。どうやら、琴子は谷中にひどく怯えているらしい。どうしても近づこうとしないのだ。

(自分を身受けしてくれた男が、括られているのに、側へ近寄ろうともしない……。よほど恐いんだろうな、谷中が……)

そう琴子を分析する田代。田代は、暴力団担当のいわゆるマル暴勤務が長かったため、さんざ、風俗店や飲食店の一斉検挙をしてきた。そこで働かされていたホステスたちが、経営者に怯える様子が、今の琴子の態度と、とても似ている気がした。

郷原の上体が、ゆらりと大きく傾いた。

「だ、大丈夫ですか?!」

側にいた琴子が、郷原を受け止めた。

「離れろっ……。!! 離れろ琴子っ……。!! わ、私以外の男に触れるなど、許さんっ……。!!」

「……………」

琴子は谷中の言葉に、思わず一步下がってしまった。

「だいじょうぶか、郷原さん!!」

山本が、郷原の上体をキャッチした。田代が、それをさらに支える。相当な熱が噴き出していた。

「マズい……。早く抗生剤を投与しないと……。!」

「そうだな。おい、浜崎くん。池田さんだけ、俺たちと来てもらおうじゃないか。飯田議員のこ

とは俺たちには関係ない……。池田さんだけ来てもらえば、あとは事足りる」

「わかったっす。おい立て。一緒に来てもらうからな」

浜崎は、そういうと、田代とともに、池田をトイレのドアノブに括り付けていた自分のパーカーを解いて、ガムテープで胴体を腕ごとぐるぐる巻きにし、ついでに口にもガムテープをべったり貼って塞ぐと、下手人を引っ立てるおかつ引きのように、池田を連れて店を出た。

外はもう、すっかり朝の眩しさだった。郷原は、山本に支えられながら、店を出て行こうとしていた。その時だ。

「ま、待って……！！ あたしも連れてって……！！」

「……………」

郷原は、熱でふらつく首を、声のするほうに少し傾けた。視界の中に、少女のように小柄な琴子が映る。

「あ、あたし、まだ最後まで聞いてないわ！ 臓器移植のこと！」

「い、行くな琴子っ！！ 今までのことなら悪かった！！ もうお前に手を上げたりしないっ！

お、俺を一人にしないでくれっ！！」

谷中の、悲痛な叫びである。この状態で店内に一人取り残されたら、どうなるのだろうという恐怖と、惚れた女に去られる悲しみとが一緒になって、谷中の声を震わせていた。

「パ……、パパ……。ごめんなさい……。あたし、知りたいの本当のこと……。りえがどうして助かったのか……。パパにも、飯田さんにも、とっても感謝しているわ……。でも、あたしはもう……」

谷中が、琴子のために外界へと開かれたドアに向かって、芋虫のまま叫ぶ。

「琴子っ……！ 行ったら娘が、りえがどうなるかわかってるのか？！ お前が俺の元から去るというのなら、娘がどうなっても知らないぞ！」

「んだと……」

郷原の眼に、赤い閃光が走る。山本の肩に捕まっていた体を、山本を突き飛ばすようにして離すと、店内に踵を返した。

「やっ……！ やめてっ……！！」

琴子が止めるのも振り切って、郷原は、ほんの一瞬前まで立ち上がるのもやっとだったのがウソのように、谷中を一心不乱に蹴りまくった。

「やめろっ……！ 郷原！」

山本と琴子が、必死に郷原を抑えようとするが、怒りに火がついた郷原には、誰の声も耳に入らない。谷中の顔が、激しい暴行で見る間に変形していった。

「や、やめて！！ やめてっ……！！ 死んじゃうっ……！！」

琴子が、谷中の上に覆い被さるようにして、谷中を庇った。その瞬間、郷原の蹴りが琴子の横っ腹にめり込んだ。それでも、その衝撃に耐えて、谷中を守る琴子である。

「どけ……、コラ……、こんなクズブツ殺してやるから、どけてんだよ女……」

「やめろっ！！ やめろよ郷原っ……！！」

山本が、必死で郷原の体を止める。琴子は、谷中の胸の上で泣いていた。

「も、もうやめて……！！ やめてっ……！！ お願いっ……！！ やめてあげてっ！！」

琴子の濡れた瞳に、郷原は一瞬、忌まわしい記憶が重なる。

「うっ……、わかったよ……。やめてやるよ……、ケツ」

郷原はそういうと、カウンターによろける体を預けて、自分を支え直した。涙に濡れた瞳を、そのまま郷原に向ける琴子である。

「あの……。この人、もう解いてあげてもいいですか……？」

「……好きにしろ」

肩を上下させて、郷原はぶっくらぼうだった。激しい衝動のせいで、更に熱が燃え上がったようだ。その場に力なく崩れていった。

「だっ、大丈夫か?! 郷原!!」

山本が郷原を覗き込む。いつの間にか呼び捨てになっていた。

琴子は谷中を括るガムテープをすべて解くと、携帯電話を取り出してどこかへ電話をかけた。谷中はすっかり気を失っている。やがて誰かが応答したようだった。たぶん、谷中の部下なのだろう。

「あ……、あのっ……、み、店に来て……。谷中さんを迎えに……。ええ、そうなの。また酔いつぶれて……。ええ。動けないから、3、4人で来てちょうだい」

それだけ言うと携帯を切り、山本と二人で、なんとか郷原を支えた。ちょうど店の目の前に、田代のシビックが横付けされたので、どうにかそこまで郷原の長身を、渾身の力で引きずる琴子と山本であった。

後部座席にはすでに浜崎慎吾が、池田をふん捕まえたまま乗っている。田代の車に大人6人は乗れないので、誰かタクシーで来てもらうしかない。しかし、郷原は血まみれだ。タクシーに乗せるわけにも行かないので、とりあえず郷原をぐるぐる巻きの池田の隣に押し込むと、浜崎は田代の車から降りた。琴子は女だから、お尻を詰めればどうにかリアシートに座れそうである。郷原を押し込めたついでに、自分も郷原に寄り添うような形で、リアシートに収まった。

それを見て、眉を潜める田代だった。

「琴子さん、いいの? こんなどうしようもない、どヤクザ男の隣で……。助手席側に来たら?」

「あ、大丈夫です。座れたし……。今動くところの人まで、ずり落ちそうな気がします」

「あ、そう……。んじゃあ、山本先生は助手席に乗れるな。浜崎くんがタクシーだ」

田代はそう言って、一人車外に残った浜崎を見た。浜崎は、口元に黒ゴマのような髭が芽を吹き、眼が徹夜でしばしばと疲れていた。昨日よりかなり老けてみえる。

「そんじゃあ、みなさんお疲れっス。俺、マジで疲れた」

「俺もだ。このひと晩で一気に年を取った気がする……。とにかく帰ろう。んじゃあ琴子さん、行くよ?」

「はい。でも、もう琴子じゃありません。本名は北山……。北山あかり、と言います」

「北山あかりさん、か……。じゃああかりさん、とりあえず俺たちと一緒にな」

「ええ……!」

熱と痛みに浮かされながら、郷原は、どこか遠くのほうで彼女の名前を聞いていた。池田とあ

かりに挟まれている今、池田に重心をかけるのは厭なので、無意識のうちに、体重を琴子改め北山あかりのほうにかける郷原である。もたれかかったあかりの髪から、いい匂いがして、殺気立った郷原の神経を撫でた。

(なぜだろう……。俺は、ずっとずっと昔から、この女を知っている気がする——)

しかもそれは、郷原の心の奥深くにしまわれている、もはや存在すら忘れていた、危険な破壊のパンドラボックスを開けることができる、失くしていた鍵のような懐かしさ——。蓋を開けてはならない、決して——。この鍵からは、早く離れなければ……。

そう思う郷原だが、今はとにかく疲れていた。少しだけ人の体温に触れて眠りたかった。とても長い夜がやっと明けて、周囲はもう新しい1日に輝く光を浴びて、エネルギーに動き始めている。

あかりは、郷原を支えるようにしながら、リアウィンドウからずっと自分がママを務めていたスナック、ミラージュのドアを見た。

谷中が、自分の元を去らぬよう、余計なことを外部に漏らされぬよう、あかりを閉じ込めておくための店……。谷中に連れられてやって来る酔客たちの前で、少しでも谷中に懐いていないそぶりをしたり、反抗的な態度を取ると、後でひどい目に合わされるのだ。

鍵はかけていかなかった。きっと、谷中が酔いつぶれたと思って迎えに来た部下が、谷中を見つけて病院へと運んでくれるはずだ。

それが、あかりが谷中にしてやれる、精一杯の気持ち……。あかりにとって、いきなり目の前に現れた郷原は、まさに解放軍だったのである。

朝日に照らされて霜が輝くアスファルトを、型落ちのホンダ・シビックは滑り出していった。

(V I C E 孤独な予言者 後編へ続く)